

特許庁委託

台湾模倣対策マニュアル

2007年3月

財団法人 交流協会

目 次

第 編 権利の取得

第 1 章	保護対象の種類と準拠法	2
1.	発明特許	2
2.	実用新案	2
3.	意匠	2
4.	商標	3
5.	公平取引法及び営業秘密法	3
6.	デジタルコンテンツ	4
7.	コンピュータプログラム	4
8.	半導体集積回路回路配置設計	5
第 2 章	専利法（発明）	6
1.	保護対象	6
2.	登録要件	6
2-1	産業上利用可能性	6
2-2	新規性	6
2-3	進歩性	7
2-4	先願主義	7
2-5	発明特許を受けることのできない物品	7
3.	発明特許を受けるまでの手続概要	8
3-1	発明特許出願手続き	8
3-2	書面出願制度	11
3-3	在外者の特許管理人	11
3-4	必要書類	11
3-5	優先権主張	11
3-6	特殊な出願	12
3-7	出願補正の手続き	13
3-8	出願公開	13
3-9	実体審査の請求	13
3-10	実体審査	13
3-11	面談及び実験等	15
3-12	優先審査	15
3-13	早期公開特許の補償金制度	15
3-14	日本語で出願した場合の誤訳訂正	15
4.	権利の取得と維持	18
4-1	特許公告	18
4-2	公告特許のファイルヒストリ	18
4-3	特許料及び証書料の納付	18

4-4 発明特許権の存続期間	19
4-5 特許権の内容	19
4-6 特許権存続期間の延長	19
4-7 補正申請	20
5.異議申立及び無効審判請求制度	20
5-1 特許無効審判請求提出要件	20
5-2 特許無効審判請求に対する審査	21
5-3 無効審判審決	21
6.特許行政訴訟手続き	22
6-1 種類	22
6-2 高等行政裁判所の判決に不服である場合	22
6-3 訴訟手続きの中止	22
6-4 「知的財産案件審理法」と「知的財産裁判所組織法」	22
第3章 専利法（実用新案）	25
1.保護対象	25
2.登録要件	25
2-1 積極的要件	25
2-2 消極的要件	25
3.実用新案登録を受けるまでの手続き概要	25
3-1 実用新案登録出願手続き	25
3-2 特殊な出願	27
3-3 補正の手続き	27
3-4 形式審査	28
4.権利の取得と維持	28
4-1 登録料の納付及び公告	28
4-2 権利の存続期間	28
4-3 実用新案権の内容	28
5.無効審判請求制度	28
5-1 請求者	28
5-2 請求期間	29
6.実用新案技術報告	29
6-1 意義	29
6-2 内容	29
第4章 専利法（意匠）	31
1.保護対象	31
2.登録要件	31
2-1 産業上の利用性	31
2-2 新規性	31
2-3 新規性喪失の例外	31
2-4 創作性	32
2-5 意匠登録を許可することのできない意匠	32
3.意匠登録を受けるまでの手続概要	32

3-1 必要書類	34
3-2 優先権の主張	34
3-3 特殊な出願	34
3-4 補正手続き及び訂正申請	35
3-5 実体審査	35
4.権利の取得及び維持	36
4-1 登録料及び証書料の納付	36
4-2 登録料の追納	36
4-3 存続期間	36
5.行政訴訟手続き	36
5-1 種類	36
5-2 高等行政裁判所の判決に不服である場合	36
5-3 訴訟手続きの中止	36
5-4 「知的財産案件審理法」及び「知的財産裁判所組織法」	37
第5章 商標法	38
1.保護対象	38
2.登録要件	38
2-1 商標の成立性	38
2-2 積極的登録要件	38
2-3 消極的登録要件	40
2-4 先願主義	41
3.登録を受けるまでの手続概要	41
3-1 商標登録出願	41
3-2 必要書類	45
3-3 優先権主張	45
3-4 特殊な出願	46
3-5 方式審査	47
3-5 実体審査	48
4.権利の取得と維持	50
4-1 登録料の納付	50
4-2 存続期間	50
4-3 存続期間更新登録	50
5.異議申立て	51
5-1 異議申立ての要件	51
5-2 異議申立てに対する審査	52
5-3 異議審決	52
6.商標審判手続き	52
6-1 種類	52
6-2 商標登録無効審判	53
6-3 商標登録取消審判	54
6-4 審決に対する不服	55
6-5 訴訟手続きの中止	55

第 II 編 模倣に対する救済

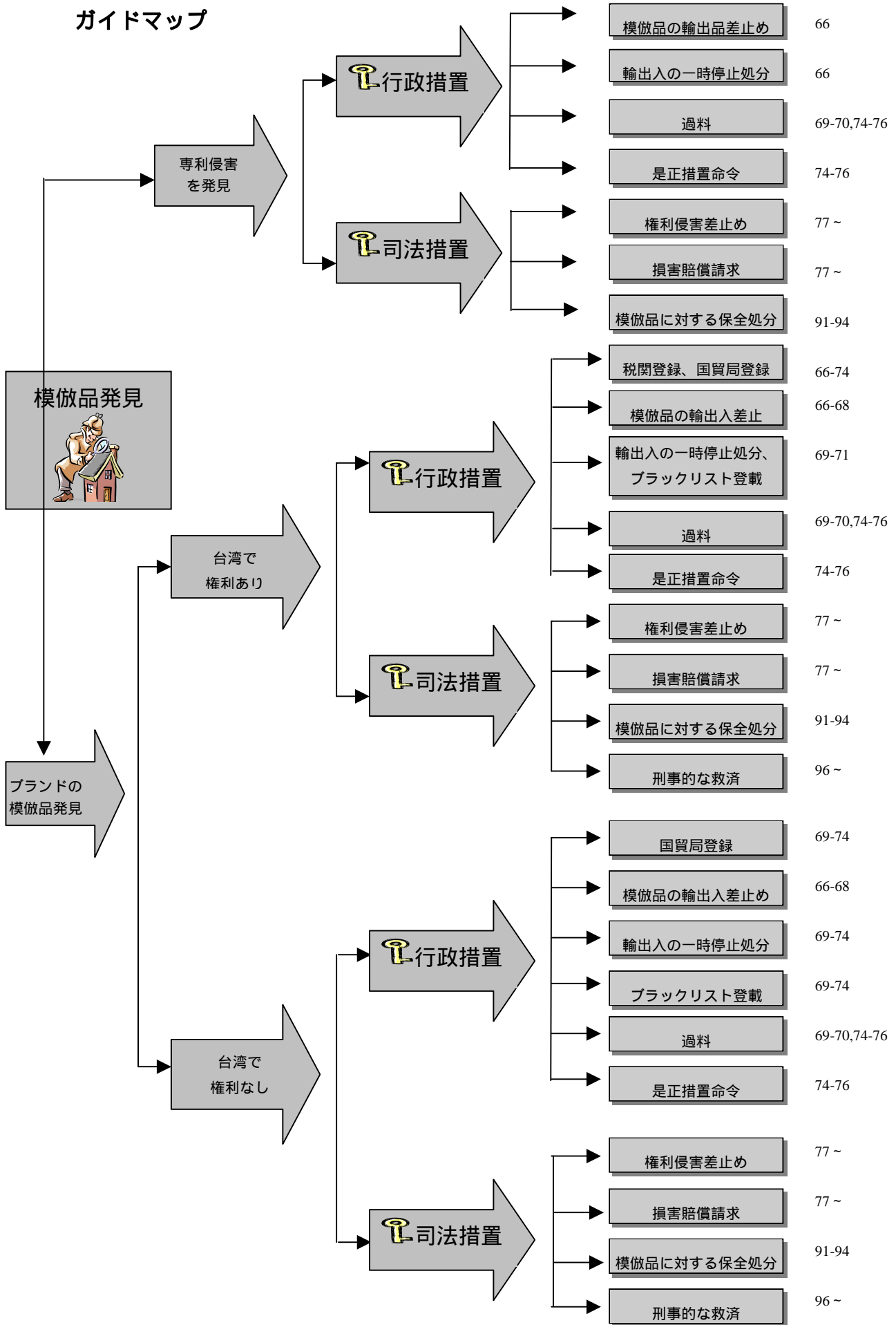
第 1 章 模倣に対する行政救済	58
1. 知的財産局による審判制度	58
1-1 知的財産局による審判の種類及び内容	58
1-2 知的財産局による審判の手続き	61
1-3 再審	64
1-4 専利訴訟	65
1-5 問い合わせ先	66
2. 税関による水際措置	66
2-1 税関の登録制度	66
2-2 商標権・著作権侵害疑義物品の輸出入差止め手続き	67
2-3 商標権・著作権侵害物品の輸出入差止め手続き	67
2-4 税関登録による輸出入差止め手続きのフローチャート	68
2-5 税関登録に必要な書類・情報	69
2-6 その他の注意点	69
2-7 問い合わせ先	69
3. 台湾經濟部国際貿易局による救済措置	69
3-1 商標輸出監視制度	70
3-2 商標監視システムによる商標権侵害物品輸出入差止め及び制裁の流れ	71
3-3 台湾經濟部国際貿易局登録に必要な書類・情報	72
3-4 台湾經濟部国際貿易局登録の留意点	73
3-5 台湾經濟部国際貿易局の処分に対する不服申立て	74
3-6 問い合わせ先	74
4. 公平交易委員会による救済措置	74
4-1 告発手続き	74
4-2 公平交易法違反の効果	75
4-3 公平交易委員会による行政処分に対する不服申立て	75
4-4 公平交易委員会による調査のフローチャート	76
4-5 問い合わせ先	76
第 2 章 模倣に対する民事的救済	77
1. 関連法律	77
2. 民事訴訟の対象となる侵害行為	77
2-1 専利権の侵害	77
2-2 商標権の侵害	78
2-3 不正競争行為の場合	79
3. 侵害に対する救済の種類及び内容	80
3-1 侵害の差止請求権	80
3-2 損害賠償請求権	80
3-3 不当得利返還請求権	81
3-4 信用回復請求権	81
4. 請求権発生の要件	81
4-1 専利・商標の場合	81
4-2 不正競争行為の場合	81

5.当事者適格	82
5-1 専利権に基づく場合	82
5-2 商標権に基づく場合	83
5-3 不正競争行為の場合	83
6.訴訟手続の概要	84
6-1 訴訟手続のフローチャート	84
6-2 裁判所に提出すべき書類	85
6-3 訴訟費用	85
7.提訴管轄	85
民事訴訟法の規定	85
8.主張・立証	86
8-1 専利権侵害訴訟等の場合	86
8-2 商標権侵害訴訟の場合	88
8-3 不正競争行為侵害訴訟等の場合	89
9.判決	89
9-1 判決手続	89
9-2 判決の効力	89
9-3 判決の執行	90
10.上訴	90
10-1 上訴裁判所の連絡先及び所在地	90
10-2 上訴の要件	90
11.保全処分	91
11-1 侵害差止め仮処分	91
11-2 仮差押	92
11-3 債務者が保全処分に反する行為をした場合	93
12.民事訴訟上の和解	94
13.債務者が任意で返済しない損害賠償債権の確保（強制執行）	94
第3章 模倣に対する刑事的救済	96
1.関連法律	96
2.刑事罰の種類及び内容	96
2-1 刑事罰の対象	96
2-2 非親告罪	96
2-3 両罰規定	96
2-4 商標権の場合	96
2-5.不正競争行為の場合	97
3.刑事罰に科するための要件	97
3-1 商標権の場合	97
3-2 不正競争行為の場合	98
4.権利者がとり得る手段	99
4-1 情報の収集	99
4-2 情報の収集方法	99
4-3 告訴、告発	99
4-4 検察・警察機関による捜査	100
4-5 検察による事件処理の決定	100

4-6 知的財産権保護警察隊について	100
4-7 主なお問い合わせ先	100
5.刑事訴訟手続の概要	101
5-1 手続概要	101
5-2 刑事手続のフローチャート	101
6.上訴、不起訴処分に対する不服	102
6-1 上訴	102
6-2 不起訴処分に対する不服	102
6-3 再審	102
【付録】管轄官庁/担当機関などの所在地.....	103
添付資料 1 専利法（日本の特許法、実用新案法、意匠法に相当する）	109
添付資料 2 商標法	137
添付資料 3 知的財産案件審理法案審査報告	155
添付資料 4 知的財産案件審理法	161
添付資料 5 訂正審査基準（専利審査基準の一部）	169

ガイドマップ

該当ページ



第 編 権利の取得

本稿の目的は、台湾において自社製品の模倣品が発見された場合の、現行法令・実務の下での適当な対応方法につき助言を提供するものである。第 篇においては、先ず模倣品の禁止・予防のため、特許権、実用新案権、意匠権、商標権等の知的財産権を中心とする権利の取得について整理し、紹介する。著作権については、2006 年に法改正をしたばかりであり、時間・紙幅が限られているので、今回は割愛させていただく。

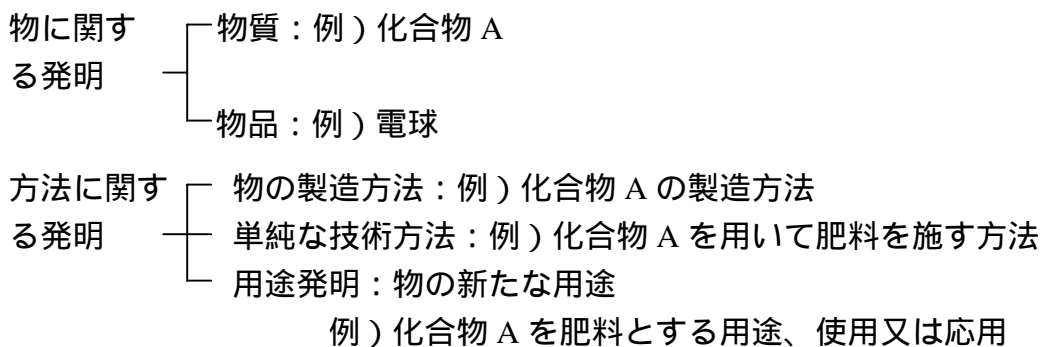
台湾における知的財産権の取得に関する手続きは、基本的に日本のそれと酷似していると言える。したがって、日本の実務を参考にしながら、現地代理人を通じて手続きをスムーズに進めることができると予想される。

第1章 保護対象の種類と準拠法

1. 発明特許

発明特許の権利取得等については、「専利法」に規定が置かれている。中国語の「専利」を日本語に訳す場合、通常「特許」とされるが、実はより広い概念である。台湾「専利法」は、「発明」（特許）、「新型」（実用新案）、「新式様」（意匠）の権利取得等につき定めたものである。したがって、台湾「専利法」は日本の「特許法」「実用新案法」「意匠法」に相当する。発明及び創作を奨励、保護、利用し、産業の発展を促進するために制定された。「専利法」の規定によれば、発明とは、自然法則を利用した技術的思想の創作のうち高度なものを指す。上記規定から、「専利法」の保護対象となる発明とは、技術思想の創作でなければならず、かつ自然界に固有の法則を利用して生み出され、技術性を有するもので、関連する技術分野の技術手段を使用するものであることがわかる。

発明は、物に関する発明と方法に関する発明とに分類することができる。物に関する発明には物質と物品が含まれ、方法に関する発明には物の製造方法、単純な技術方法、及び、「応用」又は「使用」又は「用途」を出願標的とする用途発明が含まれる。以下に、物に関する発明と方法に関する発明との関連を示す。



2. 実用新案

「専利法」の規定によれば、実用新案とは、物品の形状、構造又は装置に対する創作又は改良を指す。ゆえに、実用新案登録の対象となる考案の標的は物品の形状、構造又は装置のみに限られ、その実用新案登録出願の標的には、方法、用途、生物材料又はその他の確定した形状を備えない物質は含まれない。

3. 意匠

「専利法」の規定によれば、意匠とは、物品の形状、模様、色彩又はこれらの結合

であって、視覚に訴える創作を指す。意匠権の範囲は図面に開示された全体のデザインを基準とし、図面や説明書等の出願書類を統括して指定する物品をもって、その権利を主張する。ゆえに、登録意匠の意匠権者は、図面に開示した物品の外観の形状及び模様を引き裂いたり又は分解したりすることはできず、形状又は模様の一部をその他の部分から引き裂いたり分解したりして、その意匠権を主張することもできない。

4.商標

かつて、台湾においては、商品商標と役務標章(サービスマーク)の区別があった。しかし、国際的な立法の趨勢を参考にし、2003年商標法改正により、それらを統合して「商標」と呼ぶことにした。同時に、立体商標及び音響商標の保護が導入された。一方、連合商標・防護商標の制度は廃止された。

商標は文字、図形、記号、色彩、音、立体形状又はこれらの結合で構成することができる。また、前述の商標は、その商品又は役務の関連消費者に、それが当該商品又は役務を表彰する標識であると認識させることができ、且つそれによって他人の商品と区別できるものでなければならない。つまり、商標としての商品自他識別性を具えていなければならない。

台湾において商標所有権者・使用者及び消費者の利益を保護し、産業の発展を促進するために、商標制度が定められており、商標権の取得については登録主義を採っている。したがって、台湾で商標専用権を取得するには、法律に従って登録出願し、商標主管機関の審査を経て初めて商標所有権が取得でき、商標権の範囲内で他人の使用を排除できる。商標権の存続期間は登録日から10年であり、その後10年毎に更新登録により権利維持できる。また、登録主義では、原則的に既登録の商標のみを保護しているが、例外として未登録の周知・著名商標も保護されている。

台湾では商標権付与後の異議申立制度が採用されている。現行商標法によると、商標登録査定が公告されてから、三ヶ月以内であれば、利害関係の有無に拘わらず、商標登録が不適法であると認める場合、何人でも異議申立てを行うことができる。また、商標の登録が、法の規定に違反してなされた場合、商標が登録されてから5年以内であれば、利害関係人又は商標審査官は、商標主務官庁に対し、その登録の無効を求める審判を請求することができる。但し、悪意で他人の周知・著名商標を先取りして登録したものについては、この制限を受けない。

5.公平取引法及び営業秘密法

公平取引法(日本の不正競争防止法及び独占禁止法に相当)は1991年2月4日に公布され、1999年02月03日、2000年04月26日及び2002年02月06日の3度の法改正を経て、現在に至る。公平取引法は取引の秩序及び消費者の利益を保護し、公正

な競争を確保し、国民経済の安定及び繁栄を促進するために制定されたものであり、同法によって保護する価値ある著名表示（登録済の周知・著名商標を含む）が、同法21条、24条に保護されている。また、周知・著名商標の権利侵害について、商標法改正前も改正後も公平取引法が適用された結果、違反の責任は商標法上の責任より重くなるので、登録周知・著名商標が侵害された場合にも、公平取引法で侵害救済を求めている。

営業秘密法は1996年1月17日に公布され、これまで法改正を行ったことはない。営業秘密法は、営業秘密を保障し、産業倫理及び競争秩序を維持し、社会の公共利益を調和させるために制定された。営業秘密法の保護対象は、方法、技術、製造過程、調合、プログラム、設計、又はその他の生産、販売又は経営に用いられる情報である。また、当該情報は次の要件に符合しなければならない。

一般的に当該情報に関わる人の知るところではないもの。

その秘密性のため、実際に又は潜在的に経済的な価値を有するもの。

保有者が既に合理的な秘密保護措置を採っているもの。

以上両法はいずれも台湾市場の公平な取引の秩序及び社会の信義誠実を維持するために、制定されたものである。公平取引法で保護の権利が侵害された場合、民事責任の他、刑事責任及び行政責任を請求できるのに対し、営業秘密法には、民事責任のみを請求できる。

6. デジタルコンテンツ

情報科学技術産業の急速な発展及び情報のデジタル化に伴い、各国は徐々にデジタルコンテンツ産業がもたらすビジネスチャンスを重視するようになり、並びに、大量の人材を投入してデジタルコンテンツ産業の研究及び推進開発に努めている。したがって、デジタルコンテンツ産業が引き起こす各方面の議題、たとえばデジタルコンテンツ産業の管理及び保護は、探求に値するテーマである。韓国、日本では、デジタルコンテンツ産業の競争力及び生存環境を守るために、該産業について既に特定法を制定している。こうした各国の動向に鑑み、台湾立法院は近日中に、デジタルコンテンツにつき、特定法を制定するか否かについて決議を行い、デジタルコンテンツ産業業者のために、そのあるべき保障及び権益を勝ち取ることによって、台湾のデジタルコンテンツ産業の順調な成長を図ろうとしている。

7. コンピュータプログラム

コンピュータプログラムとは、1組の指令の結合にすぎず、それ自体は専利要件、たとえば「自然法則の運用」及び「産業上の利用可能性」に合致しない。したがって、

コンピュータプログラム自体は専利権を獲得できないとする見解が、国際社会において主流となっている。しかし、該発明が、コンピュータのハードウェアがコンピュータプログラムを執行することを介して達成されたものである場合には、おそらく、自然法則を利用し、かつ産業上の利用に供することのできる発明と見なされ、専利権を取得することができる。

8.半導体集積回路回路配置設計

集積回路 (Integrated Circuit、IC と略称) は半導体チップ (semiconductor chip) とも呼ばれ、現代の科学技術発展の重要な基礎であり、その運用範囲が日々拡大していくにつれ、集積回路は一般の人々の日常生活及び将来における科学技術産業の発展にとって、必要不可欠なものとなり、かつ絶大な影響力をもつようになった。集積回路配置の設計開発には高度な技術と莫大な費用を要するのに対し、集積回路配置のコピーは非常に容易であるため、各国は新たな創作を奨励するために、集積回路配置について、立法による保護を検討せざるをえなかった。台湾でも 1995 年 7 月に、集積回路配置創作者の権益を守るため、立法院において「集積回路回路配置保護法」が可決されている。

「専利法」及び「集積回路回路配置保護法」の関係について言えば、「専利法」及び「集積回路回路配置保護法」はいずれも技術革新と関係があり、また、これら両者はいずれも産業の発展の促進をその目的としている。しかし、集積回路配置の創作方法と革新の程度はいずれも「専利法」の要求する新規性及び進歩性を備えることが難しく、ゆえに「専利法」の保護対象となることができない。現行の「専利法」には、集積回路の回路配置及び電子回路の配置はいずれも「専利権」(日本の「発明特許権」「実用新案権」「意匠権」に相当)の保護を受けることができない、とする明文規定が置かれている。

第2章 専利法（発明）

1.保護対象

「専利法」の規定によれば、発明とは、自然法則を利用した技術的思想の創作のうち高度なものを指す。ゆえに、動物や植物、及び動物や植物を生み出す主な生物学的方法、人体又は動物の病気の診断、治療又は外科手術の方法、或いは公序良俗又は公衆衛生を害するものはいずれも特許を受けることができない。

2.登録要件

2-1 産業上利用可能性

「専利法」の規定により、特許を付与する要件には産業上の利用可能性が含まれており、即ち、該特許を出願する客体は、実用性を備え、かつ産業上実施可能な状態に達していなければならない。実用性とは、人間が日常生活の実際的な用途に使用できることを指し、産業上実施可能な段階とは、該特許は運用、動かすことのできるものであり、かつ、それによって一般の人が、発明人が明細書に記載した方法で特許の目的を達成できる状態を指す。発明特許が現有の技術よりも進歩した効果を備える必要があるか否かに関し、学説上の見解と実務上の見解は異なっており、実務において特許審査官は時に、発明の原理を説明するよう発明特許出願人に対し要求し、或いは、特許出願に係る新発明が現有技術に比べ更なる効果を備えていることを要求する。しかし、ある学者は「特許出願に係る発明が産業上の利用性を有するか否かは、係争特許明細書の記載を見るべきであり、それが現有の技術に比べ更なる効果を備えているか否かを見るべきではない」との見解を示している。

2-2 新規性

(1)原則

新規性（Novelty）とは、発明創作が新奇で、かつ未だ公知の技術となっていないことを指す。各国が新規性について採用する認定基準は全て同じというわけではなく、絶対新規性と相対新規性に分類される。前者は、発明又は創作が公開されて他人に知られた又は他人が知りうる状態で公然使用された場合には、世界中、公開方式及び公開地点を問わず、全て、その新規性は喪失したものと見なされ、かかる制度はヨーロッパ各国、カナダ、日本等で採用されている。これに対して後者は、公開方式及び公開地点によって、その新規性を決定するものであり、さらに、世界のいずれかの国で刊行物が発行され、かつ該国国内で公然使用された場合、該国国内で刊行物が発行され、かつ公然使用された場合、の2種類に分類することができ、かかる制度は韓国やオーストラリア等で採用されている。台湾「専利法」の規定によれば、出願前に既に刊行物に記載され又は公然使用をされたもの及び出願前に既に一般の人によく知られていたものは全て新規性を喪失し、特許を取得することができない。このこと

から、台湾でも絶対新規性制度が採用されていることがわかる。

新規性の認定は、原則として、該発明特許が出願された日を基準とするが、各国の特許法制にはいずれも新規性喪失の猶予期間(新規性喪失の例外)が設けられており、特定の公開事情については、その公開後、一定期間内であれば、依然として特許出願を提出することが認められている。台湾で採用されている猶予期間は6ヶ月である(下記参照)。

(2)新規性喪失の例外

特許出願人が、研究、実験のため、政府が主催する展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため、出願人の意図に反して漏洩した場合、出願人が前記事実の生じた日から6ヶ月(即ち、上記の「猶予期間」)内に特許出願を提出した場合、新規性喪失の例外を構成し、その出願案がその他の特許要件を満たしているのであれば、特許主務官庁は、その特許出願につき、依然として特許を付与しなければならない。

2-3 進歩性

「専利法」の規定によれば、該特許出願が属する技術分野の通常知識を有する者が出願前の従来技術により容易に思いつく場合、「専利法」により特許を受けることができない。これが即ち進歩性の規定である。一般的な技術者が、現有の技術知識を応用して、ルーチンワークにおける日常的な問題を解決できる場合、該一般的な技術知識は「専利法」の保護を受ける必要性を備えない。ゆえに、該特許出願が、該技術の通常の技術知識を有する者が従来技術により容易に思いつくものである場合、特許権を取得することはできない。

2-4 先願主義

「専利法」の規定によれば、同一の発明につき、2以上の特許出願案がある場合、その一番先に出願したものについてのみ発明特許を付与することができる。特許制度には、先発明主義と先願主義がある。前者は、発明した者が特許権を取得できることを指し、たとえ先に発明した者が後から出願したとしても、それが先に発明した事実を証明しさえすれば、依然として特許権を取得することができる(例:アメリカ)。後者は、先に特許出願した者が特許権を取得できることを指し、台湾では先出願主義が採用されている。しかし、後出願者の主張する優先日が、先出願者の出願日より早い場合には、先出願主義の例外を構成し、当該後出願者は依然として特許権を取得することができる。

2-5 発明特許を受けることのできない物品

動物や植物、及び動物や植物を生み出す主な生物学的方法。但し、微生物学的方法はこの限りでない。

人体又は動物の病気の診断、治療又は外科手術の方法。
公序良俗又は公衆衛生を害するもの。

3.発明特許を受けるまでの手続概要

3-1 発明特許出願手続

発明特許出願の手続き過程の概要は、次のとおりである。

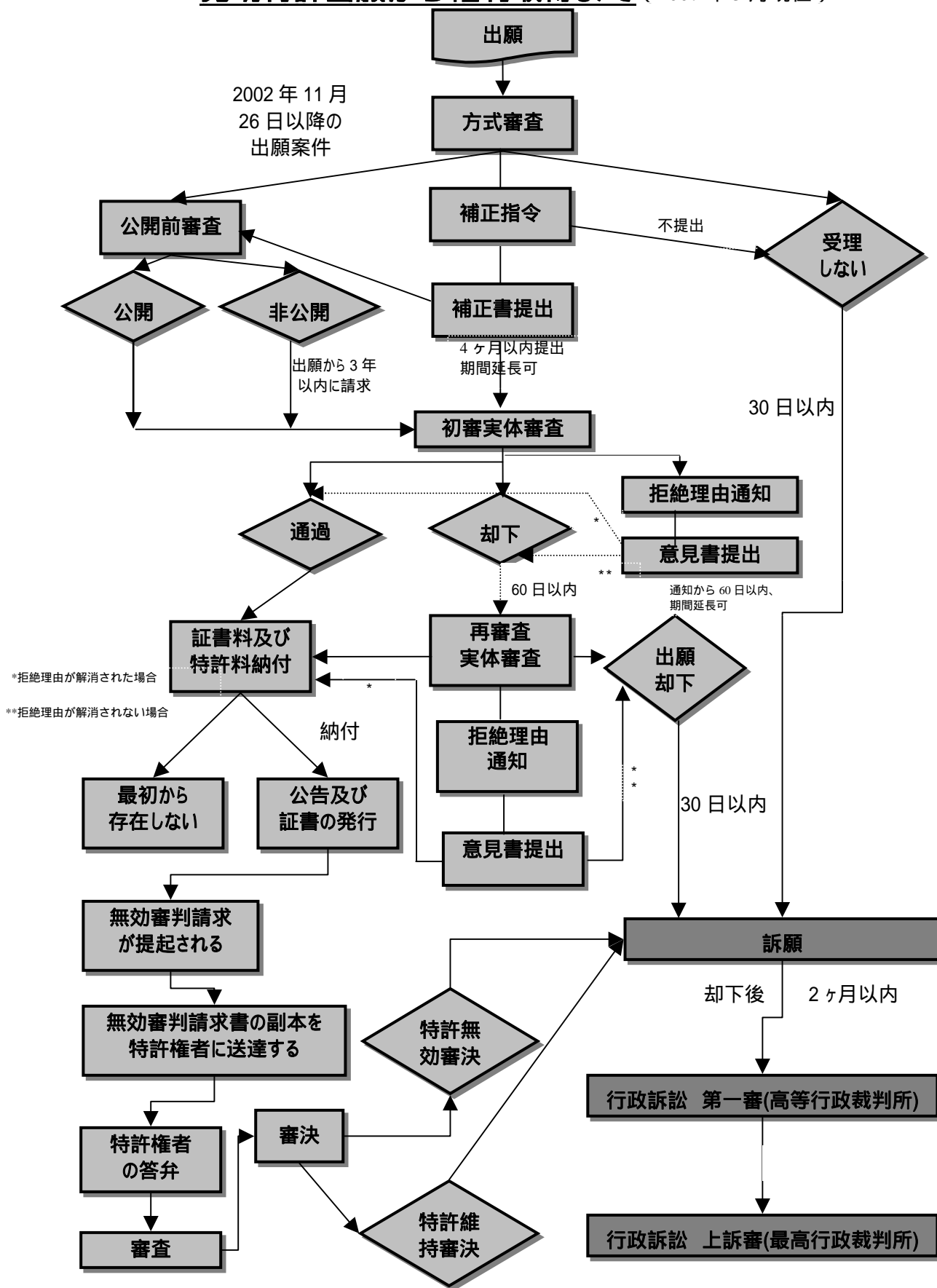
- (1) 発明特許出願は、特許出願権者が願書、明細書、必要な図面を備えて、特許主務官庁にこれを提出する。
- (2) 出願してから約 10-20 日以内に、審査官は出願書類、手続きの仕方に対し、法律で規定されたものを備えているかどうかの方式審査を行う。出願書類又は手続きに不備がある場合、出願人（代理人）に、四ヶ月の期限を定めて補正するよう通知し、期間延長が可能である。当該期限を過ぎても補正されない場合には、主務官庁は当該出願を受理しない。
- (3) 特許主務官庁が、発明特許出願書類を受理した後、審査の結果、手続きに、規定に合致しない箇所がなく、かつ公開すべきでない事情がないと認めた場合、出願日から 18 ヶ月後に該出願を公開しなければならない。
- (4) 何人も、発明特許出願日から 3 年以内に、特許主務官庁に対し、その発明特許出願につき、実体審査を請求することができる。特許主務官庁は、審査請求の事実を、特許公報に掲載しなければならない。
- (5) 審査官は法律に規定された不登録事由の有無の初審実体審査を行う。所定の不登録事由がある場合、この登録拒絶理由を出願人（代理人）に通知し、60 日間の期間を定めて意見書の提出機会を与える。
- (6) 出願について審査した後、査定書を作成し、特許出願人又はその代理人に送達しなければならない。拒絶査定する場合、査定書に理由を記さなければならない。発明特許出願人は、拒絶査定に不服がある場合、査定書送達の日から 60 日以内に理由書を備えて再審査（実体審査）を請求することができる。但し、出願手続きの不適法又は出願人不適格の理由により、出願が受理されなかった場合、或いは却下された場合は、法律により行政救済を提起することができる。再審査の結果、拒絶理由があると認めた場合には、査定前にまず先に、60 日間の期限を指定し、当該期限までに意見書を提出するよう出願人に通知しなければならない。
- (7) 特許出願された発明につき、審査の結果、拒絶理由がない（拒絶理由があったが、解消されたことを含む）と認めた場合、特許を許可し、その特許請求の範囲及び図面を公告しなければならない。特許出願された発明は、許可査定後、出願人は査定書送達後 3 ヶ月以内に証書料及び 1 年目の特許料を納付しなければならず、これらの費用が納付された後はじめて公告される。期間が満了しても前記費用を納付しなかった場合、公告を行わず、その特許権は最初から存在しなかったものとする。特許出願された発明は、公告の日より発明特許権を付与し、証書を交付

する。

- (8) 許可査定された特許が、次の各号のいずれかに該当する場合、特許主務官庁は、無効審判請求により又は職権で、その発明特許権を取り消し、並びに期限を指定して特許証を返還させなければならず、返還することができない場合には、特許証の取消を公告しなければならない。

特許権を許可することのできない理由がある場合、
特許権者の属する国が中華民国国民の特許出願を受理しない場合、
発明特許権者が発明特許出願権者ではない場合、
利害関係者に、特許権の取消により回復できる法律上の利益がある場合。

発明特許出願から権利取得まで (2007年3月現在)



3-2 書面出願制度

現行の「専利法」の規定によれば、特許に係る出願及びその他の手続は電子方式で行うことができ、その施行日及び規則は主務官庁が定める。しかし、関連草案はまだ可決されていないため、現在、特許出願人が特許出願又はその他の関連事項を処理しようとする場合には、依然として、書面をもって、特許主務官庁に対し、これを行わなければならない。

3-3 在外者の特許管理人

中華民国国内に住所又は営業所がない者は、特許出願及び特許に関する事項の処理について、代理人に委任してこれを行わなければならない。代理人は、法律に別段の規定がある場合を除き、弁理士でなければならない。しかし、現在、「専利師法」(「弁理士法」)は未だ可決されておらず、実務上は依然として「専利代理人管理規則」(「特許代理人管理規則」)に規定されている特定の資格を有する「専利代理人」が特許出願関連業務に従事する。

3-4 必要書類

「専利法」の特許出願手続きについての規定によれば、特許出願権者は特許出願時に、次の書類を提出しなければならない。

- (1) 願書、明細書、必要な図面。出願権者が雇用者、譲受人又は相続人である場合、発明者の氏名を明記し、かつ雇用、譲受又は相続を証明する書類を添付しなければならない。
- (2) 明細書には、発明の名称、発明の説明、要約及び特許請求の範囲を記載しなければならない。
- (3) 優先権を主張しようとする者は、外国での出願日及びその出願を受理した国を願書に記載しなければならない。出願日から 4 ヶ月以内に、前項の外国政府が受理を証明した特許出願書類を提出しなければならない。
- (4) 生物材料又は生物材料を利用する発明特許を出願しようとする場合、出願人は遅くとも出願日までに該生物材料を特許主務官庁指定の国内寄託機関に寄託し、並びに、寄託機関、寄託日及び寄託番号を願書に明記し、並びに、出願日から 3 ヶ月以内に寄託証明書を提出しなければならない。

3-5 優先権主張

特許出願人が、同一の発明について、WTO 加盟国において又は中華民国と相互に優先権を承認する外国において最初に法律に則って特許出願し、かつ最初の特許出願の日から 12 ヶ月以内に中華民国に特許出願をする場合、優先権を主張することができる。出願人が前項の規定により 1 出願において 2 以上の優先権を主張する場合、そ

の優先権期間の起算日は最先の優先日の翌日とする。外国の出願人が WTO 加盟国の国民ではなく、かつその所属する国と中華民国とが相互に優先権を承認していない場合、WTO 加盟国又は互恵関係にある国の領域内に住所又は営業所を有していれば、第 1 項の規定により優先権を主張することができる。優先権を主張した場合、その特許要件の審査は、それが提出した優先日を基準としなければならない。

3-6 特殊な出願

(1) 分割出願

特許を出願した発明が、実質上 2 以上の発明である場合、特許主務官庁の通知又は出願人の請求により、出願を分割することができる。該分割出願は、原出願の再審査の査定前に行わなければならない。分割出願が許可された場合にも、原出願の出願日を出願日とする。優先権がある場合、優先権を主張ことができ、かつ原出願で既に完成した手続から審査を続行しなければならない。

(2) 出願変更

出願の変更は、他種類間での変更と、同種類内での変更とに分類することができる。発明特許出願を変更する場合、他種類の出願に変更する態様には、発明特許出願を実用新案登録出願に変更するもの、発明特許出願を意匠登録出願に変更するもの、実用新案登録出願を発明特許出願に変更するものがある。同種類内で変更する態様には、追加発明を独立発明に変更するものがある。（「追加発明」制度は、既に 2001 年の法改正によって廃止された。同制度廃止時の経過措置について、改正専利法が施行される（2001 年 10 月 26 日）前に提出された追加発明特許出願で、査定がまだ確定していない、又は当該追加発明特許出願の特許権がまだ存続している場合、改正前の追加特許に関する規定により取り扱う。）

(3) 二重出願（改正草案、まだ可決していない）

二重出願（「一案二請」）とは、同じ技術内容で同時に実用新案登録及び発明特許を出願するもので、現在、二重制度を許可している国には、ドイツ等が挙げられる。台湾經濟部知的財産局（以下「知的財産局」という。「知的財産局」は日本の特許庁に相当する。）は、2005 年に各界から二重出願制度に対する意見をまとめて検討し、また、2006 年 12 月 26 日には公聴会を招集した後、「専利法」改正草案を公布して、実用新案登録と発明特許の「二重出願」を認める条文を追加した。「専利法」草案の規定によれば、同一の出願人は同一の技術内容に対し、同じ日に発明特許及び実用新案登録を出願することができる。実用新案登録には方式審査が採用されており、発明特許よりも比較的早く権利を取得することができるため、出願人は発明特許を受けてから、実用新案登録を放棄することができる。

知的財産局は、「同一の技術内容につき重複して『専利』を受けることができない

ことは基本原則であるが、今回、同一の出願人が同一の技術内容に対し実用新案登録及び発明特許を同時に出願する旨の規定を新たに追加した理由は、実用新案登録には方式審査が採用され、比較的早く権利を獲得することができるのに対し、発明特許は実体審査を経るため、審査に比較的長い時間を要するものの、獲得した権利は（実用新案権より）堅固である、という双方の特性を、権利者のために活かすことにある。即ち、『専利法』草案に二重出願制度を新たに追加したねらいは、『専利権』を重複して付与しないという原則のもと、出願人の権利が早期に法的保護を受けることができるようにすることにある」と述べている。

3-7 出願補正の手続き

方式審査時に、特許主務官庁は職権により、四ヶ月の期限（二ヶ月の期間延長可）を定めて、明細書又は図面を補充補正するよう出願人に通知することができる。出願人は出願日（優先権主張の場合、優先日）から15ヶ月以内に自発的に明細書又は図面の補正・訂正を行うことができる。なお、補正・訂正を行う際、最初に提出した中文明細書又は図面が開示する範囲を超えてはならない。

3-8 出願公開

特許主務官庁が、発明特許出願書類を受理した後、審査の結果、手続に規定に合致しない箇所がなく、かつ公開すべきでない事情がないと認めた場合、出願日から18ヶ月後に該出願を公開しなければならない。特許主務官庁は、出願人の請求により、その出願を早期公開することができる。

3-9 実体審査の請求

何人も、発明特許出願日から3年以内に、特許主務官庁に対し、その発明特許出願について実体審査の請求をすることができる。法により分割出願、又は発明特許への出願変更を行う場合、該実体審査請求期間を過ぎていれば、分割出願又は出願変更を行った日から30日以内に、特許主務官庁に実体審査の請求をすることができる。前記規定により行った実体審査の請求は取り下げることができない。前記規定の期間内に実体審査を請求しなかった場合、該発明特許出願は取り下げられたものとみなす。

3-10 実体審査

特許主務官庁が発明特許出願案について実体審査を行う際には、特許審査官を指定してこれを審査しなければならない。「実体審査」とは、出願案の内容が特許要件に合致しているか否かについて審査を行うことを指し、技術及び法律を総合した審査作業である。

(1) 拒絶理由

審査官は、「専利法」に定められる不登録事由を発見した場合、この拒絶理由を出願人(又は代理人)に通知し、60日間の期間を定めて意見書を提出する機会を与える。出願人が不登録事由を克服できない場合、審査官は特許を付与しない旨の査定(拒絶査定)を行わなければならない。下記のいずれかに該当するものは、発明特許を受けることができない。

発明が、自然法則を利用した技術的思想の創作でない場合、
新規性、進歩性又は産業上の利用可能性を備えていない場合、
特許出願された発明が、先に出願され前記発明の出願後にはじめて公開又は公告された発明特許又は実用新案に添付された明細書又は図面に記載されている内容と同じである場合、
発明特許保護対象ではないものを客体(標的)として特許出願する場合、
明細書に、発明名称、発明の説明、要約及び特許請求の範囲が記載されていない、
或いは、発明の説明における開示が明確かつ十分でないため、該発明が属する技術分野の通常知識を有する者がその内容を理解しかつそれに基づいて実施することができない場合、
生物材料又は生物材料を利用する発明特許を出願し、出願人が出願日までに該生物材料を特許主務官庁指定の国内寄託機関に寄託しなかった、或いは、出願日から3ヶ月以内に寄託証明書を提出しなかった場合、
同一の発明について2以上の特許出願があった場合、後から出願したもの、或いは、出願日、優先日が同日で協議が成立しなかったもの、
一発明一出願原則に違反する場合、
出願人が明細書又は図面を補充、補正する際、出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超える場合。

(2) 審査過程中の補充及び補正の提出

実体審査時に特許主務官庁は職権により、期間(約2ヶ月、延長可)を定めて、明細書又は図面を補充訂正するよう出願人に通知することができる。出願人が、瑕疵・欠落があるため原文明細書の補正又は中文明細書を訂正する必要があると考える場合、特許主務官庁に対し、理由を述べて実体審査する際に参照してもらうよう要請することができる。審査官は補正・訂正する必要があると認めた場合、指令を下す。この段階においては、出願人は審査官の指令通知によってのみ、補正・訂正することができる。

(3) 審査結果

出願案の審査後、査定書を作成し、出願人又はその代理人に送達しなければならない。審査の結果、特許が付与されない場合、査定書には理由を記載しなければならない。

3-11 面談及び実験等

特許主務官庁は、発明特許の審査の際、請求により又は職権で、期限を指定して次の各号の事項を行うよう出願人に通知することができる。

特許主務官庁に出頭して面談に応じる。

必要な実験を行い、模型又は見本を追加する。

3-12 優先審査

特許主務官庁は、発明特許出願書類を受理した後、審査の結果、手続に規定に合致しない箇所がなく、かつ公開すべきでない事情がないと認めた場合、出願日から 18 ヶ月後に該出願を公開しなければならない。特許主務官庁は、出願人の請求により、その出願を早期公開することができる。発明特許の出願が、次の各号のいずれかに該当する場合、公開しない。

出願日から 15 ヶ月以内に取り下げる場合、

国防上の機密又はその他の国家安全に係る機密に関する場合、

公序良俗を害する場合

発明特許出願案が公開された後、特許出願人でない者が商業上の実施者である場合、特許主務官庁は、請求により、これを優先的に審査することができる。出願人が優先審査を請求する場合、関連証明書類を提出しなければならない。

3-13 早期公開特許の補償金制度

発明特許出願人は、出願案の公開後、かつて発明特許出願内容について書面による通知を行ったにもかかわらず、通知後かつ公告前に依然として該発明を業として実施し続けた者に対し、該発明特許出願の公告後、適当な補償金の支払いを請求することができる。既に公開されている発明特許出願であることを明らかに知りながら、公告前に業として該発明を実施し続けた者に対しても、補償金を請求することができる。補償金の請求権は、その他の権利の行使を妨げない。かつ、該請求権は、公告日から 2 年以内に行使しなければ、消滅する。

3-14 日本語で出願した場合の誤訳訂正

3-14-1 中文明細書の補正期間及び審査における基準明細書

専利法 25 条 4 項の規定により、明細書及び必要な図面が外国語で提出され、かつ特許主務官庁が指定する期間内に中国語による翻訳文が提出された場合、当該外国語の明細書及び必要な図面が提出された日を出願日とする。指定された期間内に提出しなかった場合、出願を受理しない。但し、受理しないという処分が下される前に提出した場合、提出した日を出願日とする。つまり、特許審査については中文明細書を基準とするため、原文をもって出願する場合、後日中文明細書を提出しなければならない。提出期間は指令を受けてから 4 ヶ月以内、その後 2 ヶ月の期間延長が可能である。

この期間内に中国語の翻訳文を提出しない場合、出願は受理されないが、審査官が「受理しない」という処分を下す前であれば、中文明細書の提出が認められる。この場合、提出日を出願日とするので、出願日に変更されるのみならず、優先権の主張もできなくなる可能性がある。

前述の通り、原文(日本語或いは英語)明細書で優先権を主張して出願する場合、出願後の 6 ヶ月以内(指令を受けてから 4 ヶ月以内、その後 2 ヶ月の期間延長可能)に中文明細書を提出しなければならず、また基準となる明細書は中文明細書である。

3-14-2 各段階における誤訳訂正

A、出願日(優先権主張の場合、優先日)から 15 ヶ月以内の場合

中文明細書を提出した後、中文明細書に誤訳がある、又は原文明細書を補充・補正する場合、専利法 49 条 2 項の規定により、出願人は出願日(優先権主張の場合、優先日)から 15 ヶ月以内に自発的に明細書又は図面の補正・訂正を行うことができる。留意されたいのは、専利法の法文に言う「明細書」とは中文明細書(基準明細書)を指し、原文明細書は参考資料として存在していることである。したがって、原文明細書の補正又は中文誤訳の訂正は、提出した中文明細書(最初の中文明細書)又は中文図面が開示する範囲を超えてはならない。

B、出願日(優先権主張の場合、優先日)から 15 ヶ月を過ぎ、査定前の場合

専利法 49 条 3 項に以下の通り規定されている。

「出願人は発明特許を出願した日から 15 ヶ月以降も、次の各号の期日又は期間内に限り、明細書又は図面を補正・修正することができる。

実体審査を請求するとき。

出願人以外の者が実体審査を請求した場合、当該出願について実体審査を行う旨の通知送達後 3 ヶ月以内。

特許主務官庁が査定前に通知した意見書提出期間内。

再審査請求時、又は再審査理由書を補充提出することができる期間内。

以上のように、専利法によると、出願人は特許出願日(優先権を主張する場合には優先日の翌日から起算する)から 15 ヶ月以内に出願人が最初に中文明細書の主張した範囲内で自発的に明細書又は図面の訂正を行うことができるが、15 ヶ月を過ぎた場合、専利法 49 条 3 項を除き、出願人の補正・訂正申請は認められない。したがって、実体審査時〔15 ヶ月を過ぎ、かつ査定前(拒絶理由の応答期間を含む)〕に、出願人が誤訳を発見した、又は原文明細書を補正する場合、早急に特許主務官庁に対し、かかる要請を行う。このような要請をもって審査官の注意を引き、審査官は必要があると認める場合、期間を定めて、説明・補正するよう出願人に通知する。この時期には、出願人はその指令通知によってのみ補正・訂正でき、その他の方法はない。

中文の誤訳については、顯然たるタイプミスであり、かつ修正した後、元の権利範囲を超えない場合、審査官は出願人の要請で指令通知を送達する可能性が高い。例えば、原文は a+b+c であるが、中訳文は a+b+c' となっているような場合、或いは、原文は a+b+c であるが、中訳文は a+b+c+d となっている場合が挙げられる。

なお、法的には中文明細書が基準明細書であり、審査時には中文明細書のみを審査し、原文明細書を審査しないため、原文に記載されていないものを翻訳文に入れても拒絶理由又は無効理由にならない。

C、査定後

専利法 64 条には、発明特許を取得した後の修正につき、次の通り定めている。「発明特許の権利者は、次の各号のいずれかの事項についてのみ、特許明細書又は図面の訂正を請求することができる。

特許請求の範囲の縮減。

誤記の事項の訂正。

不明瞭な記載の釈明。

前項の訂正は、出願当初の明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはならず、かつ特許請求の範囲の実質を拡大又は変更してはならない。」

実務上、訂正審判の審査は厳しくなっており、単に翻訳ミスがあるという理由をもって訂正申請をする場合、クレームの実質変更又はクレーム範囲の拡大になるという理由で、却下される可能性が高い。訂正申請を認めてもらうには、明細書もしくはクレームに不一致或いは不明瞭があるという理由をもって行ったほうが認められる可能性が高い。

D、再審査時

前述の通り、専利法 49 条 3 項 4 号の規定により、再審査請求時、又は再審査理由書を補充提出することができる期間内であれば、明細書又は図面を補正、訂正することができる。

以上をまとめると、基準明細書は中文明細書であり、特許の権利範囲は中文明細書を基準とする。誤訳の訂正、原文明細書の補正が容認される難しさは、出願日(優先権主張の場合、優先日)から 15 ヶ月以内、15 ヶ月以降、特許査定後と、だんだん増していく。

以上の説明を次のように示す。



4.権利の取得と維持

4-1 特許公告

特許出願に係る発明を審査した結果、特許を付与しない（拒絶査定）事情がないと認められた場合、特許を付与しなければならず、並びに特許請求の範囲及び図面を公告しなければならない。特許出願に係る発明は、許可査定後、出願人は査定書送達後3ヶ月以内に証書料及び1年目の特許料を納付しなければならず、前記の費用が納付された後はじめて公告される。期間が満了しても該費用を納付しなかった場合、公告を行わず、その特許権は最初から存在しなかったものとする。

4-2 公告特許のファイルヒストリ

公告された特許案につき、何人も、その査定書、明細書、図面及び全てのファイル資料の閲覧、抄録、撮影又はコピーを申請することができる。但し、特許主務官庁が法により秘密保持義務を有する場合には、この限りでない。

4-3 特許料及び証書料の納付

(1)納付期限

特許が許可された場合、発明特許権者は証書料及び特許料を納付しなければならない。特許権存続期間の延長、延期を請求する場合、延長、延期された期間内においても、特許料を納付しなければならない。

発明特許料は公告の日から起算し、1年目の特許料は、査定書送達後3ヶ月以内に納付しなければならず、2年目以降の特許料は、期間が満了する前に該費用を納付しなければならない。また、特許料数年分を一括納付することができ、特許料が変更された際には、その差額を納付する必要はない。

(2)特許料金の追納及び減免

発明特許の2年目以降の特許料につき、特許料を納付しなければならない期間内に

納付しなかった場合、期間満了後 6 ヶ月以内にこれを追納することができる。但し、その場合、規定された特許料の倍額を納付しなければならない。発明特許権者が自然人、学校又は中小企業である場合、特許主務官庁に対して特許料の減免を申請することができる。

4-4 発明特許権の存続期間

現行の「専利法」の規定によれば、発明特許権の存続期間は、発明特許出願日から起算して 20 年をもって満了とする。

権利存続期間一覧表

発明特許	発明特許権の存続期間は、出願日から起算して 20 年をもって満了とする。
実用新案	実用新案権の存続期間は、出願日から起算して 10 年をもって満了とする。
意匠	意匠権の存続期間は、出願日から起算して 12 年をもって満了とする。
連合意匠	連合意匠権の存続期間は、原意匠権の期限と同時に満了とする。

4-5 特許権の内容

(1) 物品発明特許権者の特許権の内容

物品発明特許権者は、「専利法」で別段の規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに、該物品を製造、販売、販売の申し出、使用をすること、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。

(2) 方法発明特許権者の特許権内容

方法発明特許権者は、本法で別段の規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに、該方法を使用すること、及び該方法をもって直接製造した物品を使用、販売の申し出、販売をすること、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。

4-6 特許権存続期間の延長

(1) 延長登記の対象

医薬品、農薬又はその製造方法に係る発明特許権の実施が、「専利法」以外のその他の法律の規定により許可証を取得しなければならず、かつその取得に特許出願の公告日から 2 年以上の期間を要する場合、特許権者は特許権の存続期間につき、1 回に

限り、2年から5年までの延長を申請することができる。但し、延長を許可する期間は、中央目的事業主務官庁から許可証を取得するために必要な期間を超えてはならない。許可証を取得するための期間が5年を超える場合も、その延長期間は5年までとする。

(2)申請の手続き

出願人は特許権存続期間を延長する場合、申請書に証明書類を添付し、最初に許可証を取得した日から3ヶ月以内に、特許主務官庁に提出しなければならない。但し、特許権の存続期間の満了する6ヶ月以上前に、これを行わなければならない。

4-7 補正申請

発明特許権者は、特許権取得後、特許明細書又は図面を補正しようとする場合、特許請求の範囲の縮減、誤記の事項の訂正、不明瞭な記載の説明等の事項についてのみ、これを行うことができる。発明特許権者が補正を申請する場合、出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはならず、かつ特許請求の範囲の実質を拡大又は変更してはならない。

5.異議申立及び無効審判請求制度

立法院は2003年1月3日に「専利法」改正案を可決し、特許異議申立手続きを廃止した。現在、特許許可が不当である、或いは、特許権の取得につき「専利法」の規定に違反すると認める場合には、わずかに、法により無効審判提起ができるのみである。以下に、無効審判請求制度について説明する。

5-1 特許無効審判請求提出要件

(1)無効審判請求者の資格

既に特許権を取得した特許出願案について、何人も証拠を備えて無効審判請求を提起することができる。但し、無効審判請求を提起する際に主張する事情が「特許出願権が複数の者の共有するものであるのに、共有者全員により出願が提出されなかった」又は「特許権者が特許出願権者ではない」である場合、これらは特許権の帰属に関する紛争であるため、利害関係者のみが無効審判請求を提起することができる。

(2)無効審判請求事由

発明特許の出願権が共有であるのに、共有者全員により出願が提出されなかった場合、
発明特許が「専利法」の発明に関する定義に違反し、産業上の利用性、新規性、進歩性等の発明特許の基本3要件を備えていない、新規性の擬制喪失、又は法定の発明特許を付与しない項目に属する、

明細書又は図面が「専利法」の法定記載要件に違反する、
発明が先出願原則に違反する、
明細書又は図面の補充、補正が出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えている場合、
特許権者の属する国が中華民国国民の特許出願を受理しない場合、
特許権者が特許出願権者ではない場合、
上記 及び の事情を主張する者は、特許出願案の利害関係者に限る。

(3)無効審判請求期間

特許出願案は特許査定後、公告の日から特許権が付与されるので、公告の日から無効審判請求を提起することができる。特許権の存続期間満了後又は消滅後、原則として、無効審判請求の標的とすることができない。しかし、利害関係者は、特許権の取消により回復できる法律上の利益がある場合、特許権の存続期間満了後又は消滅後も、無効審判を請求することができる

5-2 特許無効審判請求に対する審査

特許主務官庁は、無効審判請求書を受理した後、無効審判請求書の副本を特許権者に送達しなければならない。特許権者は副本送達後 1 ヶ月以内に答弁しなければならず、予め理由を説明して延期が許可された場合を除き、期限を過ぎても答弁がない場合は直ちに審査する。特許主務官庁は、無効審判を審査する際、請求により又は職権で、特許権者に、特許主務官庁に出頭し面談に応じるよう、或いは、必要な実験を行い、模型又は見本を補充提出するよう、或いは、法により特許明細書及び図面を補正するよう通知することができる。

5-3 無効審判審決

(1)無効審判審決

無効審判の審決は行政処分であり、無効審判請求案については、関連する審査手続き終了後、審決書を作成して、特許権者及び無効審判請求者に送達しなければならない。無効事由が成立しなかった場合、「無効審判不成立」の審決（「特許維持」審決）を作成しなければならない。無効事由が成立した場合、「無効審判成立及びその特許権を取消す」旨の審決（「特許無効」審決）を作成しなければならない。無効審判請求案が書類等に完備し、方式審査を経て、実体審査に送られた後、当該案件について実体審査を行う必要がない場合、たとえば、無効審判請求案に「一事不再理」（「同じ事由について再度審理しない」の意）の事情がある場合、特許権の取消が確定した場合...等、実体審査を行う必要がないときには、全て『無効審判請求却下』の審決を行う。

(2)無効審判の審決に不服である場合の救済

無効審判の審決は行政処分であり、無効審判請求者又は被無効審判請求者（即ち、無効審判請求を受けた特許の特許権者）が無効審判の審決に不服である場合、無効審判審決書受領後 30 日以内に、法により、特許主務官庁の上級機関である経済部に対し、訴願を提起することができる。経済部の訴願決定に不服である場合には、さらに、行政訴訟法の規定により高等行政裁判所に行政訴訟を提起することができる。

6. 専利行政訴訟手続き

6-1 種類

現行法の規定によれば、知的財産局が専利出願に対して行った関連処分、たとえば、専利拒絶査定、優先権主張の却下、専利権の取消し、無効審判における無効審決又は維持審決、無効審判請求却下等の決定は全て行政機関の行政処分である。当事者が知的財産局の行った行政処分に不服である場合、行政救済手続きによって、まず訴願手続きを経た後、高等行政裁判所に対して、行政訴訟を提起することができる。

6-2 高等行政裁判所の判決に不服である場合

現行法の規定によれば、当事人が知的財産局の行った行政処分に不服である場合、訴願手続きを経た後、高等行政裁判所に対し行政訴訟を提起し、高等行政裁判所によって判決が作成された後、当事人が該判決に不服であれば、高等行政裁判所の判決の送達後 20 日以内に、行政訴訟法の規定により最高行政裁判所に対し救済を申し立てることができる。

6-3 訴訟手続きの中止

現行法の規定によれば、発明特許権に関する民事訴訟、出願案、無効審判請求案、取消案が確定する前、審判を停止することができる。裁判所は、法により審判停止の裁定を下す際、無効審判請求案提出の正当性に注意しなければならない。無効審判請求案が権利侵害訴訟案件の審理に関わる場合、主務官庁は優先的に審査することができる。しかし、民事・刑事訴訟の進行が無効審判請求等の案件の決定により引き延ばされることのないよう、裁判所は既に明確である争点について、自らこれを決定することができる。

6-4 「知的財産案件審理法」と「知的財産裁判所組織法」

(1) 「知的財産案件審理法」（「智慧財産案件審理法」）

台湾の知的財産訴訟手続きを改善するため、並びに知的財産訴訟案件裁判の専門性

を確立するため、立法院は2007年1月9日に「知的財産案件審理法」を可決し、3月28日に公布された(なお、知財裁判所がいつからスタートするのは現段階では未定)。以下、「知的財産案件審理法」の規定を簡単に紹介させていただく。

知的財産民事、刑事及び行政訴訟に関する案件範囲を明確に規定し、かつ、知的財産民事、刑事及び行政訴訟の起訴、上訴及び抗告について、その管轄裁判所を明確に規定する。

裁判所は、知的財産案件の審理に際して必要であると認める場合、技術審査官に、専門知識に基づいて、当事人に説明又は質問し、証人又は鑑定人に直接質問し、本案件について裁判官に意見を述べ、及び証拠保全時に証拠調査に協力するよう命じることができる。

営業秘密：営業秘密に関わる事項は、非公開で審判することができ、並びに訴訟資料及び証拠の閲覧、抄録又は撮影を制限することができる。並びに請求により秘密保持命令を発することができ、かつ違反者に刑事制裁を加えることができ、これによって訴訟の促進及び営業秘密の保護の両者に配慮する。

訴訟停止の特別規定：知的財産民事及び刑事訴訟中、裁判所は、知的財産権を取消又は廃止すべき理由があるか否かの争点について、自ら決定しなければならず、並びに関連法規における訴訟手続き停止規定の適用を排除する。

暫定条項：「知的財産案件審理法」施行前に既に各級裁判所に係属していた知的財産案件につき、下記の暫定処理の規定を明確に定める。

- i その進行程度に応じて、原裁判所が「知的財産案件審理法」に定める手続きによりこれを終結し、それが既に法定手続きにより訴訟手続きが進められている場合、その効力は影響を受けない。
- ii 地方裁判所が既に行った裁判が、まだ上訴又は抗告裁判所に移送されていない場合、知的財産裁判所の第二審裁判所に送らなければならない。
- iii 刑事案件及びその附帯民事訴訟が「知的財産案件審理法」施行前に既に各級裁判所に係属していた場合、それ以後の訴訟手続きは、各該係属裁判所が「知的財産案件審理法」の規定により、これを終結しなければならない。但し、「知的財産案件審理法」施行前に既に法定手続きにより進められていた訴訟手続きの効力は影響を受けない。
- iv 「知的財産案件審理法」施行前、既に高等行政裁判所に係属していた知的財産行政訴訟事件は、その進行程度により、該裁判所は「知的財産案件審理法」に定める手続きによりこれを終結する。既に進行している手続きは、その効力を失わない。

知的財産裁判所は自ら専利の有効性を判断することができる。当事人が「知的財産権が、取消、廃止すべき理由を有する」と主張又は抗弁する場合、知的財産裁判所はその主張又は抗弁に理由があるか否かについて自ら判断しなければならず、民事訴訟法、行政訴訟法、商標法、専利法、植物品種及種苗法(植物品種及び種苗法)、その他の法律の訴訟手続きに関する規定を適用しない。裁判所は、

要と認める場合には、知的財産主務官庁に訴訟参加を命じる裁定を下すことができる。

(2) 「知的財産裁判所組織法」(「智慧財産法院組織法」)

台湾では同一の専利権について訴訟が発生する際には同時に行行政訴訟及び民事・刑事訴訟に関わる可能性が常にある。当事人が訴訟に費やす時間を短縮し、司法関連資源を集結させ、かつ知的財産権を専門とする裁判官に関連案件を処理させることで、適格妥当な審理効果を図るべく、司法院は 2004 年から知的財産裁判所設置計画に積極的に取り組み、並びに 2006 年には「知的財産裁判所組織法」草案が提出され、立法院は 2007 年 3 月 5 日に「知的財産裁判所組織法」を可決し、3 月 28 日に公布された。将来、知的財産裁判所は高等裁判所級として位置づけられ、それが管轄する審判事務には、知的財産権と関係のある民事訴訟事件、刑事訴訟案件及び行政訴訟事件が含まれるようになる。以下に、それぞれについて述べる。

民事訴訟事件：専利法、商標法、著作権法、光ディスク管理條例、営業秘密法、集積回路回路配置保護法、植物品種及び種苗法、又は公平交易法によって保護される知的財産権に関して生じる民事訴訟事件が含まれ、並びに本案と関係のある証拠保全手続き及び保全手続きが含まれる。

刑事事件：刑法の登録商標や商号を偽造又は模倣する罪、或いは偽造商標のついた品物の販売、展示、輸入する、或いは商品に虚偽不実の表示を行って該商品を販売する罪、或いは業務上知りえた商工業上の秘密を漏洩する罪、或いは公務上知りえた商工業上の秘密を漏洩する罪、或いは商標法、著作権法、公平交易法に違反する模倣冒用行為に関する案件、或いは地方裁判所が通常の手続き、略式の手続き又は協議手続きにより行った第一審判決を不服として上訴又は抗告された刑事事件が含まれる。但し、少年が上記刑事事件に関与した場合には依然として少年法廷が「少年事件処理法」の規定に基づいて処理する。

行政訴訟事件：専利法、商標法、著作権法、光ディスク管理條例、集積回路回路配置保護法、植物品種及び種苗法、又は公平交易法における知的財産権に関する出願、取消又は廃止手続き、不正競争及びその他公法上の紛争によって生じた行政訴訟事件、及び強制執行事件。

第3章 専利法（実用新案）

1.保護対象

「専利法」の規定によれば、実用新案とは、自然法則を利用した技術的思想の、物品の形状、構造又は装置に係る創作を指す。したがって、実用新案創作の標的は物品の形状、構造又は装置に限られ、その出願標的には方法、用途、生物材料又はその他確定した形状を備えない物質は含まれない。

2.登録要件

2-1 積極的要件

産業上の利用可能性
新規性
創作性

2-2 消極的要件

実用新案登録出願に次のいずれかの事情がある場合、実用新案登録を受けることができない。

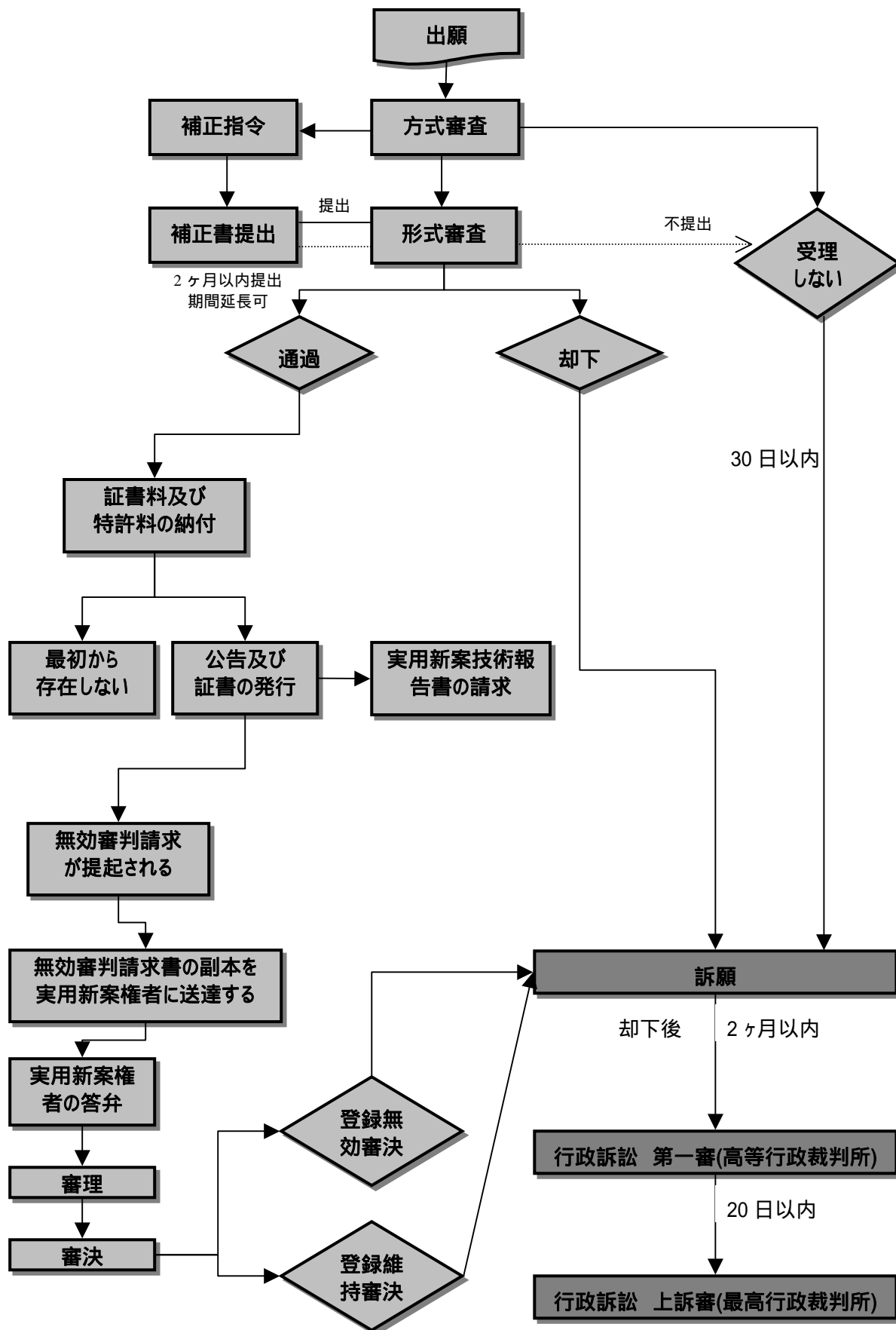
出願前に既に刊行物に記載され又は公然使用をされたもの、或いは出願前に既に一般の人によく知られていたもの、
研究、実験のため、政府が主催する展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため、出願人の意図に反して漏洩し、上記の事情に至った実用新案について、その事実が生じた日から6ヶ月以内に出願した場合、
実用新案が、公序良俗又は公衆衛生を害する場合、
登録出願に係る実用新案が物品の形状、構造又は装置に属していない場合、
登録出願に係る実用新案が開示形式に反する場合、
登録出願に係る実用新案が「一発明一出願」に反する場合、
実用新案の明細書及び図面に必要事項が開示されていない、或いはその開示が明らかでない場合。

3.実用新案登録を受けるまでの手続き概要

3-1 実用新案登録出願手続き

実用新案登録出願手続きは大体において発明特許出願手続きの規定を準用し、主務官庁は実用新案登録出願案を受理した後、まず方式審査を行う必要があり、その後、形式審査（いわゆる無審査実用新案登録制度）が行われる。実用新案登録の出願には形式審査が採用されており、この点が、発明の説明、要約、図面、特許請求の範囲等の内容及び特許請求の範囲が新規性、進歩性等の特許要件に合致しているか否かについて実体審査を行わなければならない発明特許出願案とは異なる。

実用新案登録出願から権利取得まで (2007年3月現在)



3-2 特殊な出願

(1)分割出願

実用新案登録出願が、実質上2以上の発明又は創作である場合、主務官庁の通知又は出願人の請求により、出願を分割することができる。該分割出願は、実用新案登録処分前に行わなければならない。

(2)出願変更

発明特許又は意匠登録を出願した後、これを実用新案登録の出願に変更する場合、或いは実用新案登録を出願した後、これを発明特許の出願に変更する場合、原出願案の出願日をその変更後の出願案の出願日とする。但し、原出願案について、許可査定書又は処分書が送達された後、或いは原出願の拒絶査定書又は処分書が送達された日から60日以上経っている場合には、出願変更を申請することはできない。

(3)二重出願

現在の「専利法」の規定によれば、同一の技術について発明特許及び実用新案登録を重複して出願することはできない。しかし、実用新案には形式審査が採用されるため、権利取得が比較的早いという利点があり、対する発明特許も、実体審査を行うため、権利保護面で比較的安定している強みがある。そこで、「専利法」の最新改正草案では、「専利権」を重複して付与しないという原則のもと、同一の出願人が同一の発明又は創作に対し、同じ日に発明特許及び実用新案登録を出願することを認めている。以上の改正内容の詳細は第2章第3-6節の説明を参照されたい。

3-3 補正の手続き

(1)補正時期

実用新案登録出願案の審査を速やかに完了し権利を付与するため、審査の結果、補正しなければならない場合、現在の実務では、出願書類が法定の補正不可事項に該当する場合を除き、その他の事項については、2ヶ月以内（優先権証明書類は出願日から4ヶ月以内）に補正するよう出願人に通知し、出願人が期限までに補正することができず期限を延長する必要がある場合、期間満了前に理由を明記して期限延長を申請し、知的財産局は原則上として2ヶ月の期限延長を認め、期間満了前に再度理由を明記して期限延長を申請する場合には原則として再度2ヶ月の期限延長を許可している。補正期間の合計は出願人が出願を提出した日から6ヶ月を超えないことを原則とする。期限を過ぎても補正しなかった場合には、受理しない旨の処分を下す。但し、該不受理処分が合法的に送達される前に補正した場合、実務上、（当該出願は）依然として受理される。

(2)補正の範囲

出願人は、補充又は補正を提出するとき、出願時に提出した原明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはならない。

3-4 形式審査

近年、各分野の科学技術及び製品のライフサイクルはますます短縮化する傾向にあり、こうした状況に対応するため、台湾では 2003 年 2 月 6 日に「専利法」を改正し、実用新案登録の実体審査制度を廃止して、新たに形式審査を採用し、早期権利付与を求める声に応え、これを実現した。関連条文規定は 2004 年 7 月 1 日に施行された。また、登録出願した実用新案につき、形式審査の結果、権利を付与できない事由があると認められた場合、理由を明記して処分書を作成し、出願人又はその代理人に送達しなければならない。

4.権利の取得と維持

4-1 登録料の納付及び公告

出願人が実用新案登録出願を提出した場合、実用新案権を付与する旨の処分書（即ち、登録許可査定書）送達後 3 ヶ月以内に証書料及び 1 年目の登録料を納付した後、はじめて公告される。期間が満了しても納付しなかった場合、公告せず、その実用新案権は最初から存在しなかったものとする。実用新案登録出願に係る実用新案は、公告日より実用新案権を付与し、証書を交付する。

4-2 権利の存続期間

実用新案権の存続期間は、出願日から起算して 10 年をもって満了とする。

4-3 実用新案権の内容

「専利法」の規定によれば、実用新案権者は、「専利法」に別段の規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに、該実用新案権に係る物品を製造、販売、販売の申し出、使用をすること、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。以上が実用新案権の権利内容である。

5.無効審判請求制度

5-1 請求者

何人も、実用新案権を取得した実用新案について、実用新案権権利存続期間内に無効審判請求を提起することができる。

5-2 請求期間

実用新案が実用新案登録出願権者ではない者によって登録出願が提出され、真の実用新案登録出願権者が該実用新案登録の公告日から2年以内に無効審判を請求し、かつ無効審判で取消しが確定した日から60日以内に出願した場合、該実用新案登録出願権者ではない者の出願日を該登録出願権者の出願日とする。利害関係者は、実用新案権の取消しにより回復できる法律上の利益がある場合、実用新案権の存続期間満了後又は消滅後も、無効審判を請求することができる。

6.実用新案技術報告

6-1 意義

実用新案登録は形式審査制度を採用しており、つまり、実用新案登録出願案に対し、従来案の検索及び実体要件に合致しているか否かの判断を行わず、該実用新案は形式審査を通過しさえすれば即、登録査定が下され、並びに登録料納付通知を出願人に送達する。係争実用新案権の有効性は未だ実質的に確認されていないため、「専利法」には「実用新案権者が実用新案権を行使する際には実用新案技術報告を提示して警告しなければならない」と規定されており、これによって、実用新案権者が容易に取得した実用新案権を口実に訴訟を乱発することを回避することができる。このほか、形式審査を経た実用新案権について、その実体要件が存在しているか否かは、原則として、当事人が判断するものである。先行の技術文献と比較し、新規性等の要件を有するか否か、当事人が判断するのが難しい場合には、主務官庁に対し、実用新案技術報告を請求し、客観的判断の依拠とすることができる。

6-2 内容

(1)出願人

実用新案登録出願に係る実用新案の公告後、何人も、法により、主務官庁に対し、該実用新案の実用新案技術報告を請求することができる。主務官庁は、前項の実用新案技術報告請求の事実を、「専利公報」に掲載しなければならないほか、審査官を指定して実用新案技術報告を作成させなければならない、並びに該審査官は該報告に署名しなければならない。

(2)出願事由

実用新案登録出願に係る実用新案が、出願前に既に刊行物に記載されたり、又は公然使用をされたり、又は出願前に既に一般の人によく知られていたものである場合、

実用新案登録出願に係る実用新案が、研究、実験のため、或いは政府が主催する

展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため、或いは出願人の意図に反して漏洩し、上記の事情に至り、かつその事実が生じた日から 6 ヶ月以内に出願した場合、

実用新案登録に係る実用新案が、それが属する技術領域の通常知識を有する者が出願前の従来技術により明らかに容易に完成することができる場合。

(3)時期

実用新案権消滅後も実用新案技術報告を請求することができる。出願人が、実用新案権者でない者が業として該実用新案を実施していることを明記し、かつ関連証明書類を添付する場合、主務官庁は 6 ヶ月以内に実用新案技術報告を完成しなければならない。

(4)実用新案技術報告請求書

出願人は、主務官庁に実用新案技術報告を請求する場合、請求書に必要事項を記載して提出しかつ手数料 NT\$5,000 を納付しなければならない。

(5)実用新案技術報告の効力

実用新案技術報告は、実用新案権者が権利を主張する際の参考依拠であり、決して行政処分ではなく、たとえ不服があっても、行政救済を提起することはできず、実用新案権者の権利行使時の参考とすることができるだけにすぎない。他人が該実用新案に登録許可を付与すべきでない事由があると認めるのであれば、無効審判手続きを通してその登録を取り消さなければならない。

第 4 章 専利法（意匠）

1. 保護対象

意匠とは、物品の形状、模様、色彩又はこれらの結合であって、視覚に訴える創作を指す。意匠権の保護標的は物品の外観に応用されるもので、視覚に訴える形状、模様、色彩又はこれらの 2 つ又は 3 つの結合であるが、音声、匂い又は触覚等に係る創作は含まれない。登録出願に係る意匠は前記の意匠に関する定義に合致してはじめて「専利法」に規定される意匠となり、合致しなければ登録を許可することはできない。しかし、登録出願に係る意匠がたとえ意匠の定義に合致しても、法定の意匠登録を付与できない事項に属している場合には、依然として登録を許可することができない。

2. 登録要件

2-1 産業上の利用性

「専利法」の規定によれば、産業上利用することのできる意匠は全て法により出願し意匠登録を受けることができる。したがって、意匠登録に係る意匠は、産業上利用することができてはじめて意匠登録の要件に合致し、これが即ち産業上の利用性である。産業上の利用性は意匠登録取得要件の 1 つであり、それは意匠登録の本質的な規定で、検索を行う必要なく即座に判断できるので、通常、出願案が新規性及び進歩性を備えるか否かを審査する前に、先に判断しなければならない。

2-2 新規性

新規性とは、登録出願に係る意匠と同一又は類似する意匠が従来技術の一部を構成していないことを指す。新規性は意匠登録取得要件の 1 つであり、登録出願に係る意匠が新規性を有するか否かは、通常、該意匠が産業上の利用性を備えていることが確認された後、はじめて審査される。

登録出願前に同一又は類似の意匠が既に公開され、一般の人によく知られている意匠、或いは別の先出願案に既に開示されている意匠は、登録許可する必要がない。したがって、登録出願に係る意匠と同一又は類似の意匠が出願前に既に刊行物に記載されたり、又は既に公然使用されたり、又は既に一般の人によく知られていた場合には、意匠登録を受けることができない。意匠登録出願に係る意匠が、その出願より先に出願され、かつその出願後はじめて公告された意匠登録出願に添付されている図面説明書の内容と同一又は類似である場合、意匠登録を受けることができない。

2-3 新規性喪失の例外

「専利法」は登録意匠につき、法定の新規性喪失の例外事情として、政府が主催す

る展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため、或いは、出願人の意図に反して漏洩したものの、計 2 号の事情を定めている。登録出願に係る意匠が出願日前に前記法定の新規性喪失の例外事情のいずれかを有し、出願日前に同一又は類似の意匠が既に刊行物に記載されたり、又は既に公然使用されたり、又は既に一般の人によく知られていた場合、出願人がその事実が生じた日から 6 ヶ月以内に出願し、出願と同時に該事実及び該事実が生じた期日を明記し、並びに指定された期間内に証明書類を提出するのであれば、該事実と関係のある技術によって、登録出願に係る意匠の新規性が喪失することはない。

2-4 創作性

意匠制度は出願人に専有かつ排他的な意匠権を付与するものであり、出願人が意匠を公開するのを奨励することによって、一般の人が該意匠を利用することができるようにする制度である。技術工芸に貢献のない先行意匠については、意匠特許権を付与する必要はない。したがって、登録出願に係る意匠が、該意匠の属する技術分野の通常知識を有する者が出願前の先行技術工芸により容易に思いつくものであれば、意匠登録を受けることはできない。

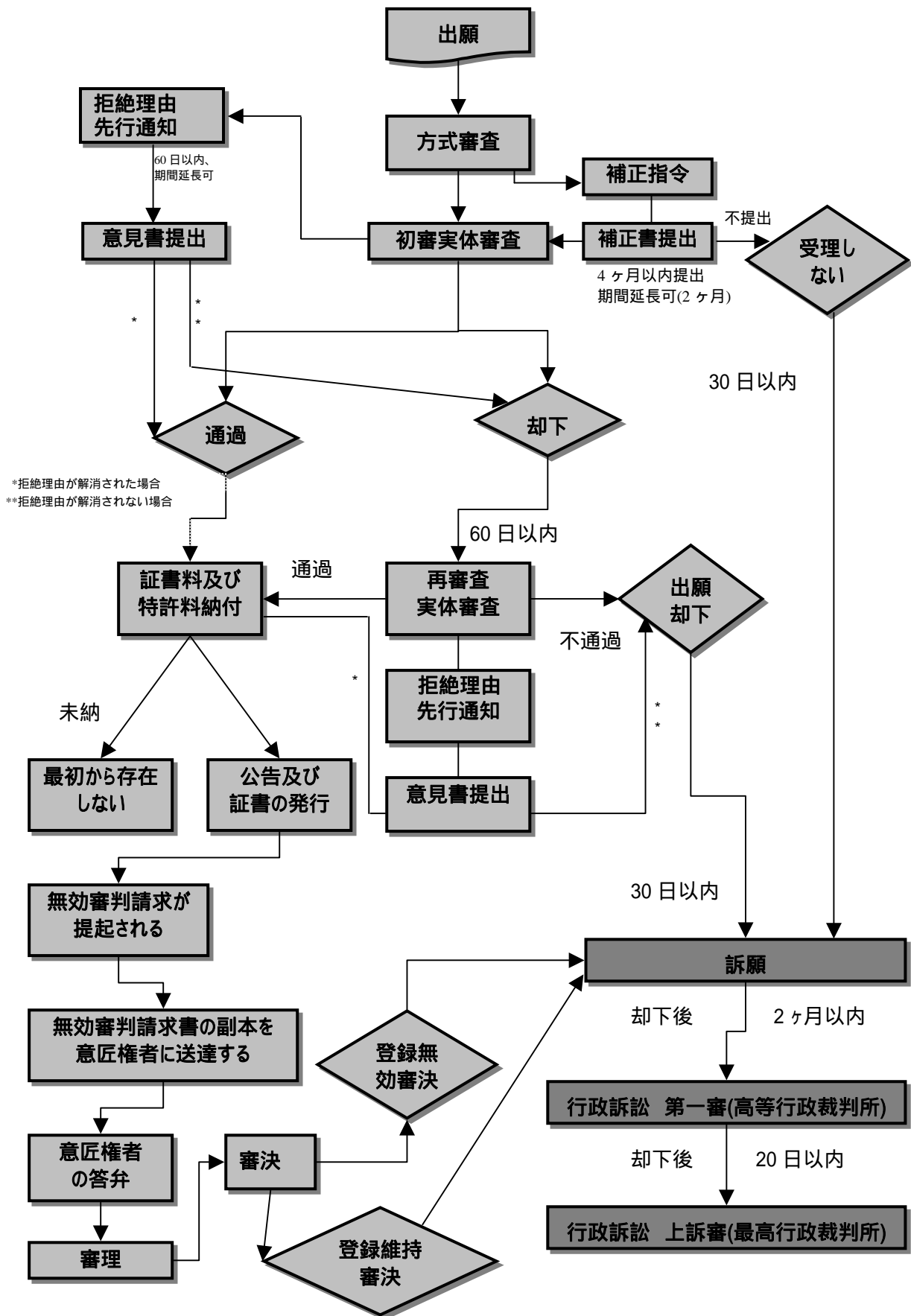
2-5 意匠登録を許可することのできない意匠

以下の登録出願に係る意匠は、意匠登録を受けることができない。単に機能上不可欠な設計からなる物品造形、或いは単なる芸術的創作又は美術工芸品、或いは集積回路の回路配置及び電子回路の配置、或いは公序良俗又は公衆衛生を害する物品、或いは党旗、国旗、国父（孫文）の肖像、国の紋章、軍旗、印章、勲章と同一又は類似である物品。

3.意匠登録を受けるまでの手続概要

意匠登録の出願は、意匠登録出願権者が願書、図面説明書を備えて、主務官庁にこれを提出し、並びに、願書、図面説明書が全て揃った日を出願日とする。したがって、意匠登録出願に必要な書類は願書及び図面説明書であり、発明特許及び実用新案登録にはこのほかに明細書を備える必要があり、これが意匠登録と発明特許及び実用新案との主な相違点である。

意匠登録出願から権利取得まで (2007年3月現在)



3-1 必要書類

意匠登録の出願は、意匠登録出願権者が願書、図面説明書を備えて、主務官庁にこれを提出しなければならない。出願権者が雇用者、譲受人又は相続人である場合、創作人の氏名を明記し、かつ雇用、譲受又は相続を証明する書類を添付しなければならない。その出願書には以下の事項を明記しなければならない。

意匠を施す物品の名称、

創作人の氏名及び国籍、

出願人の氏名又は名称、国籍、住（居）所又は営業所。代表者がいる場合には代表者の氏名も記載しなければならない、

特許代理人に委任する場合、その氏名、事務所、

新規性の猶予期間（新規性喪失の例外）を主張する場合、事実及びその事実が生じた期日を明記しなければならない、

国際優先権を主張する場合、それぞれ最初に登録出願した国、又は WTO 加盟国の国民が国際条約又は地域条約により出願した日。

3-2 優先権の主張

「専利法」の規定によれば、優先権主張に関する法定期間は、意匠の場合、外国において最初に登録出願した日から 6 ヶ月以内であり、期限を過ぎたら優先権を主張することはできない。これは、外国において最初に専利出願又は登録出願した日から 12 ヶ月以内であれば優先権を主張できる発明又は実用新案よりも短い。

3-3 特殊な出願

(1) 分割出願

専利又は登録を出願した発明又は創作が、実質上 2 以上の発明又は創作である場合、主務官庁の通知又は出願人の請求により、出願を分割することができる。分割出願は意匠登録原出願案の再審査の査定前に行わなければならない。

(2) 出願の変更

原則として、意匠登録出願の出願変更は全て、発明特許出願及び実用新案登録出願の出願変更に係る規定を依拠とするが、意匠登録が初審査で登録が許可されなかった場合、出願人は査定書が送達された後、法定期間内においてのみ再審査請求又は出願変更請求のいずれかを行うことができる。登録出願意匠が再審査でも登録が許可されなかった場合、出願人は再審査査定書が送達された後、法定期間の 40 日以内に訴願を提起するか、又は 60 日以内に出願変更を請求するか、いずれか 1 つを選択して行うことができる。

出願変更の態様は、他種類間での変更と、同種類内での変更とに分類することができる。意匠を他種類に変更する態様には、発明を意匠に変更するもの、実用新案を意匠に変更するもの、意匠を実用新案に変更するものがある。同種類内で変更する態様には、独立意匠を「連合意匠」に変更するものと、「連合意匠」を独立意匠に変更するものがある。

(3)連合意匠

「連合意匠」とは、同一人がその原意匠に基づいて創作し、かつ構成が類似しているものを指す。したがって、「連合意匠」の登録出願人と原出願案の出願人は同一人でなければならない。「連合意匠」登録を出願する場合、願書に原意匠の出願番号を記載しなければならない。並びに原意匠登録出願案の図面説明を1部添付しなければならない。「連合意匠」登録出願が登録許可を受けた場合、新たに意匠登録証を発行せず、原出願案の登録証に注記を加え、改めて登録料を納付する必要もない。その意匠権存続期間は原意匠権の存続期間が満了するまでとする。

3-4 補正手続き及び訂正申請

(1)補正手続き

主務官庁が意匠登録を審査するとき、請求により又は職権で期限を定めて図面説明を補充又は補正するよう出願人に通知することができる。したがって、登録意匠の補充又は補正もまた、請求によるもの、又は職権によるもの、2種類の状況がある。かつ、審査中にこれを行うことができ、この点は発明特許及び登録実用新案と異なる。

(2)訂正申請

訂正とは、既に「専利権」取得後の明細書、図面又は図面説明について修正することを指す。これは、審査中の補充又は補正とは異なる。これによれば、訂正申請は、許可査定、費用納付、証書受領並びに公告を経て「専利権」を取得した後、はじめて提出することができる。許可査定の後、費用を納付して証書を受領するまでは、補充、補正又は訂正制度の適用はない。登録意匠の訂正事項は、図面説明中の誤記又は不明瞭な事項を訂正するものに限る。

3-5 実体審査

台湾は意匠登録の審査について、職権により実体審査を行う制度を採用している。したがって、主務官庁が意匠登録出願を受理した後、方式審査を経て登録出願書類が全て揃っていることが確認されれば、出願人に、実体審査手続きを行うよう通知しなければならない。

4.権利の取得及び維持

4-1 登録料及び証書料の納付

登録出願された意匠は、許可査定後、出願人は査定書送達後3ヶ月以内に証書料及び1年目の登録料を納付しなければならず、前記の費用が納付された後、はじめて公告される。期間が満了しても前記費用を納付しなかった場合、公告を行わず、その意匠権は最初から存在しなかったものとする。登録出願に係る意匠は、公告の日より意匠権を付与し、証書を発行する。

4-2 登録料の追納

登録意匠の2年目以降の登録料を、登録料を納付すべき期間内に納付しなかった場合、期間満了後の6ヶ月以内に追納することができる。但し、その納付金額は規定の登録料の倍額とする。この規定は発明特許、登録実用新案と同じである。

4-3 存続期間

意匠権の存続期間は、出願日から起算して12年をもって満了とする
「連合意匠」権の存続期間は、原意匠権の存続期間満了と同時に満了する。

5.行政訴訟手続き

5-1 種類

「現行法」の規定によれば、知的財産局が意匠登録出願に対して行った関連処分、たとえば意匠登録拒絶査定、優先権主張の却下、意匠権の取消し、無効審判における無効審決又は維持審決、無効審判請求却下等の決定は全て行政行為であり、即ち行政処分である。当事者が知的財産局の行った行政処分に不服である場合、行政救済手続きによって、まず訴願手続きを経た後、高等行政裁判所に対して、行政訴訟を提起することができる。

5-2 高等行政裁判所の判決に不服である場合

「現行法」の規定によれば、知的財産局が行う関連処分に不服である場合、訴願を経た後、高等行政裁判所に対し行政訴訟を提起することができ、また高等行政裁判所が判決を作成した後、当事人が不服である場合、高等行政裁判所判決が送達された後20日以内に、行政訴訟法の規定により最高行政裁判所に対し救済を提起することができる。

5-3 訴訟手続きの中止

「現行法」の規定によれば、発明特許権に関する民事訴訟は、出願案、無効審判案、

取消案が確定する前に、審判を停止することができる。裁判所が法により審判停止の裁定を下すとき、無効審判案提出の正当性に注意しなければならない。無効審判請求案が権利侵害訴訟案件の審理に関わる場合、主務官庁は優先的に審査することができる。しかし、民事・刑事訴訟の進行が無効審判請求等の案件の決定により引き延ばされることのないよう、裁判所は既に明確である争点について、自らこれを決定することができる。

5-4 「知的財産案件審理法」及び「知的財産裁判所組織法」

詳細は第 2 章第 6-4 節の規定を参照されたい。

第5章 商標法

1.保護対象

商標法の保護対象は「商標」である。法上の「商標」とは、事業者が自己の商品、役務を他人の商品・役務と区別するために、商品・役務について使用する文字、図形、記号、色彩、音、立体形状又はこれらの結合で構成する標識である（商標法2条、5条）。つまり、事業者が自己の取り扱う商品又は役務を表彰するために、商標権を取得しようとする者は、登録出願をすることができ、また商標の構成については、平面に表現される文字、記号、色の組合せ又はその結合といった二次元（平面商標）のもののほか、音響商標及び立体商標も認められている。

かつて、台湾においては、商品商標と役務標章（サービスマーク）の区別があった。ただし、国際的な立法の趨勢を参考に、2003年商標法改正により、それらを統合して「商標」と呼ぶことにした。同時に、立体商標及び音響商標の保護が導入された。

以上のように、現行商標法は、商品・役務における視覚表示（平面・立体）及び聴覚表示を保護対象としている。営業表示、企業表示、嗅覚表示は、保護対象から除かれている。

2.登録要件

2-1 商標の成立性

商標は文字、図形、記号、色彩、音、立体形状又はこれらの結合で構成することができるが、動的、嗅覚的商標は登録を受けることはできない。

2-2 積極的登録要件

商標法5条2項には、「商標は、その商品又は役務の関連消費者にそれが当該商品又は役務を表彰する標識であると認識させることができ、且つそれによって他人の商品と区別できるものでなければならない。」と定めている。つまり、商標登録の積極的要件は、商標としての識別力（特別顕著性）を要することである。「商標としての識別性」とは、商標の持つ本質的機能として、その商標により消費者が何人の業務に係る商品・サービスであるかを認識できる機能をいう。

「商標識別性審査要点」によると、識別力のある商標及び識別力のない商標をそれぞれ次のように例示している。

識別力のある商標

独創的商標： 知恵で独創したものであり、既存の語彙もしくは物事を援用していないもの。（例えば、「PANASONIC」、「SONY」をテレビ、録

音機に使用する。)


随意的商標：既存の語彙もしくは物事を援用したが、指定商品・役務とは全然関係がないもの。(例えば、「APPLE」をコンピュータに使用する。)

暗示的商標：商標が、商品又は役務の形状、品質、用途又はその他関連成分、性質、特性、機能又は目的等を仄めかすに留まり、業者間に必要とされるか又は通常それを以って商品の説明を行うものでない場合。


識別力のない商標

商品・役務の習慣上の通用標章もしくは通用名称(例えば、「食品」、「ビスケット」等の指定商品の通用名称)。

文字、図形、記号、色彩、音、立体形状又はこれらの結合で構成されたものは、商品・役務の形状、品質、用途又はその他の説明を表示するもの(例えば、「Best Selection & Healthy」を衣服、Tシャツ、スポーツウェアに使用する)

簡単な線又は単純な基本的幾何図形(例えば、「」を、葉巻、たばこ等の商品に使用する。)

デザイン性がなく、且つ意味のないアラビア数字(例えば、「12345」を、ランプ等の商品に使用する。)

商品・役務の飾りに使用されたものと思われやすい図案(例えば、を、お皿に使用する。)

流行語又はスローガン、広告用語、広告性のある図案(例えば、「心の改革」を、薬品に使用する)

慣用の諺、祝詞、記述の用語、口癖(例えば、「財源広進」《注：祝詞、お金がどんどん入るといふ意味》を、祭具に使用する。)

国名、広く知られた地理的名称。(例えば、「ナイジェリア」を、テレビに使用する。)

企業、機構、組織の名称全体。(例えば、「台北市コンピュータ組合連合会」をコンピュータ等商品に使用する)

デザインされていないありふれた氏姓。(例えば、「唐氏」をキャンデ - に使用する。)

よく見られる宗教の標章。(例えば、「卍」を子供服等に使用する。)

一般的取引習慣では、指定商品の規格番号として考えられるもの。(例えば、「X200」を自動車、バイクの部品等商品に使用する。)

書籍の名称であって、書籍を指定商品とする。(例えば、「Treasure Island」)

テレビゲームの名称であって、電子ゲーム機又はゲームのプログラムを記憶させたテープ・磁気ディスク・光ディスク・基板等の商品を指定商品とする。(例えば、「西遊記」)

映画、テレビ・ラジオ番組、歌曲の名称であって、映画、録音済ビデオテープ、録音済ビデオディスク、録音済磁気テープ、録音済光ディスクを指定商品とする。

(例えば、「早く帰ってほしい」《注：台湾の歌の曲名》を、録音済テープに使用する。)

(商標としての識別力なき商標は、上記に掲げる例示に限らない。)

ただし、商標法 23 条 4 項により、商品・役務の形状、品質、用途もしくはその他の説明を表示するもの(商標法 23 条 1 項 2 号)又は商標としての識別力のないもの(商標 5 条 2 項)であって、出願人により使用され、且つ取引上すでに当該出願人の商品・役務を識別する標識となっている場合は、登録を受けることができる。また、2003 年商標法改正以降は、著名な地理表示を団体商標又は証明標章として登録を受けることが可能である。

2-3 消極的登録要件

商標法 23 条 1 項には、商標の不登録事由を規定している。次の各号のいずれかの事情に該当する商標は、登録することができない。

第 5 条の規定に合致しないもの(自他商品識別力を備えていないもの)。

商品又は役務の形状、品質、用途又はその他の説明を表示するもの。

指定する商品又は役務の慣用標章又は名称であるもの。

商品又は包装の立体形状が、その機能を確保するために必要であるもの。

台湾の国旗、国の紋章、国璽、軍旗、軍の徽章、印章、勲章又は外国の国旗と同一又は類似のもの。

国父(孫文)又は国家元首の肖像又は氏名と同一のもの。

台湾の政府機関、又は展覧的な性質を有する集会の標章又はこれらが授与する表彰状等と同一又は類似のもの。

国際的な組織又は国内外の周知の組織の名称、記章、徽章、標章と同一又は類似のもの。

正マーク(日本の G マークに相当)又はこれと同じ性質を有する国内外の査証マークと同一又は類似のもの。

公序良俗を害するもの。

公衆にその商品又は役務の性質、品質又は産地について誤認、誤信させるおそれがあるもの。

他人の周知の商標又は標章と同一又は類似のもので、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれがあるもの、或は周知の商標又は標章の識別性又は信用を損なうおそれがあるもの。但し、出願人が商標又は標章の所有者の同意を得て登録出願する場合は、この限りでない。

同一又は類似の商品又は役務についての他人の登録商標或はそれらについて他人が先に出願した商標と同一又は類似のもので、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがあるもの。但し、当該登録商標又は先に登録出願された商標の所

有者の同意を得て登録出願する場合は、これら両者の商標及び指定商品又は指定役務が同一である場合を除き、この限りでない。

同一又は類似の商品又は役務について他人が先に使用している商標と同一又は類似のものであって、出願人が当該他人との間に契約、地縁、業務上の取引又はその他の関係を有することにより、当該他人の商標の存在を知っている場合。但し、当該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。

他人の肖像又は周知の氏名、芸名、ペンネームを有するもの。但し、当該他人の同意を得て登録出願したものはこの限りでない。

周知の法人、商号又はその他の団体の名称を有し、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれのあるもの。

商標が他人の著作権、専利権又はその他の権利を侵害し、判決によりそれが確定したものの。但し、当該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。

台湾又は台湾と商標の保護を相互に承認する国家又は地区に係る酒類の産地表示と同一又は類似のもので、酒類商品への使用を指定するもの。

2-4 先願主義

商標法 18 条には、「2 人以上の者が同日に同一又は類似の商標を以って、同一又は類似の商品又は役務についてそれぞれ個別に登録を出願した結果、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがあり、また時間の前後を判断することができない場合、各出願人の協議によりこれを定める。協議が成立しない場合は、抽選によりこれを定める。」と定めている。以上のように、先願主義を採っており、同一又は類似商品に、同一又は類似の商標を以って出願し、混同を引き起こすおそれがある場合、最も先に出願した者を権利者として登録すべきであるとされている。ただし、優先権が主張された場合には例外となる。ちなみに、商標の出願日は一般的に、知的財産局に実際に提出された日であるが、商標法第 4 条による優先権を主張する場合、その登録出願日は優先日を基準とする。

3.登録を受けるまでの手続概要

3-1 商標登録出願

自己の商品又は役務を表彰するために、商標権を取得しようとする者は、登録出願をすることができる。自然人、法人又はその他の組織はいずれも商標出願することができる者である。商標の構成については、平面に表現される文字、記号、色の組合せ又はその結合といった二次元（平面商標）のもののほか、音声商標及び立体商標も認められている。商品区分については、国際商品分類（ニース分類）が導入されており、商品区分（商品と役務を含めて）はニース分類と一致し、都合 45 区分に分けられている。しかし、サブ・クラスの内容は、国際商品分類のそれとは少々異なっている。なお、一出願多区分出願制度を採用しており、出願者が同じ商標を異なる区分の商品

又は役務において出願する場合、一つの出願として行うことができる。政府手数料については、区分ごとに、商品を 20 個まで指定する場合、その基本料金は NT\$3,000 で、出願区分数と関係なく、料金に変わりはない。(20 個を超える場合、指定商品が 21 ~ 60 個の場合には政府料金 NT\$2,000、指定商品が 61 個以上の場合には NT\$6,000 が加算される。なお、第 35 類乃至第 45 類の役務における出願は、役務の数とは関係しない)。

商標出願から登録までの一般的な流れ及び注意点は次の通りである。

主務官庁に定めた書式による願書、見本、及び添付書類(委任状、優先権証明書等)を主務官庁へ提出する。願書に指定商品・指定役務の記入について、クラス・ヘッディングというような概括的な表現が認められていない現行実務では、しかるべく具体的な指定商品名を列挙しなければならない。

出願してから 6-8 月以内に、審査官は商標登録出願書類、手続きの仕方に対し、法律で規定されたものを備えているかどうかの審査(いわゆる「方式審査」)を行う。出願書類又は手続きに不備がある場合、出願人(代理人)に、期限を定めて補正するよう書面又は電話により通知する。当該期限を過ぎても補正されない場合には、主務官庁は当該商標出願を受理しない。(商標法 9 条)

方式審査を経て、次に審査官は法律に規定された不登録事由の有無の審査(いわゆる「実体審査」)を行う。商標法 5 条、23 条 1 項所定の不登録事由がある場合、この登録拒絶理由を出願人(代理人)に通知し、30 日間の期間を定めて意見書の提出機会を与える。

不登録事由がない、又は拒絶理由が克服された場合、登録査定及び登録料納付書が送達される。なお、登録料は NT\$2,500 で一括払い又は 2 回分割払いのいずれかを選ぶことができる。一括払いの場合には、登録査定書到達の翌日から 2 ヶ月以内にこれを納付し、2 回分割払いの場合には、登録査定書到達の翌日から 2 ヶ月以内に、まず 1 回目の登録料 NT\$1,000 を納付し、登録後、3 年目の期間満了前 3 ヶ月の間に 2 回目の登録料 NT\$1,500 を納付する。

登録料納付後、商標公報に登録の公告がされ、商標権の設定登録がされると同時に、登録証書が発行され商標権利者(代理人)に交付される。

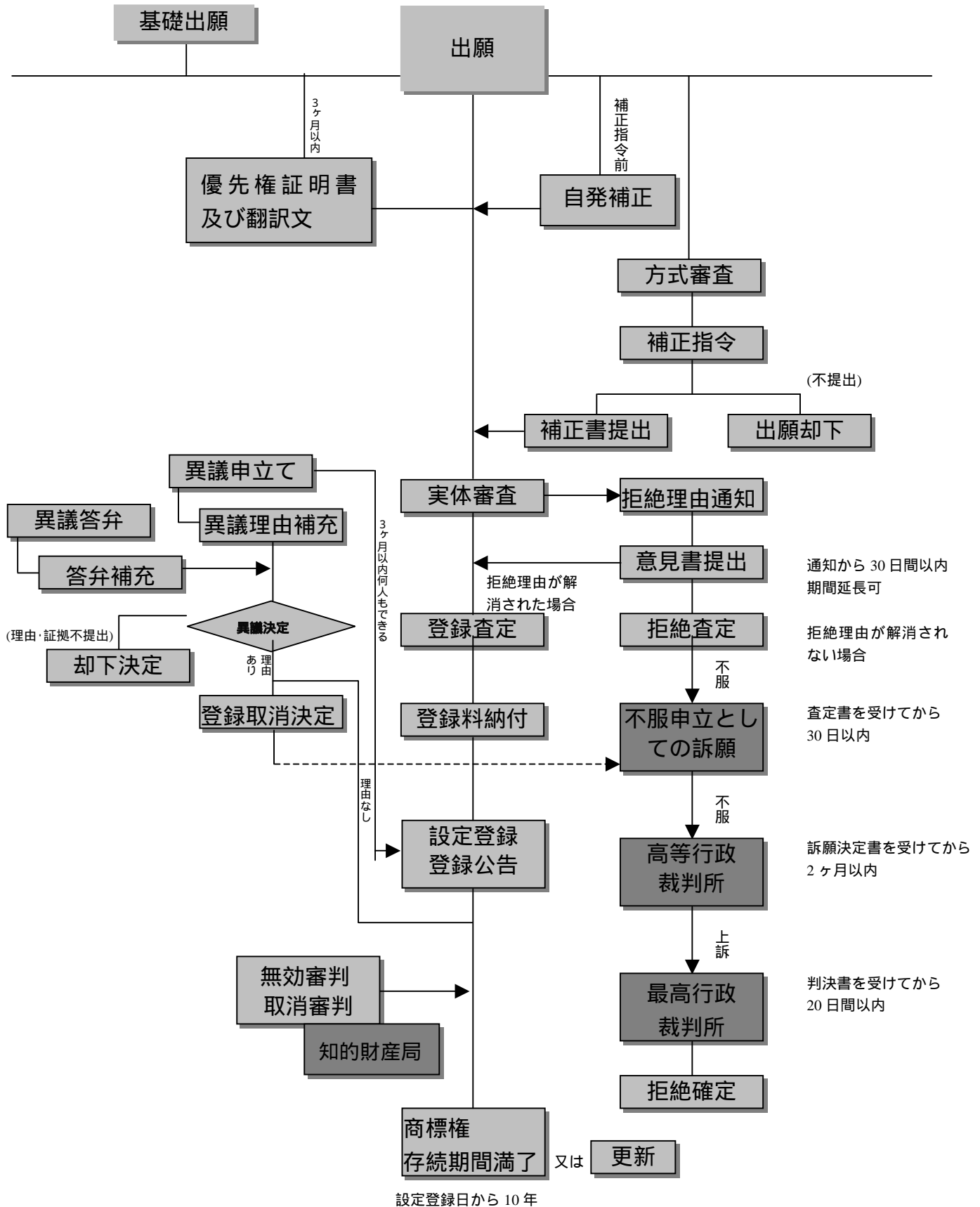
以上のように、現行商標に関する法令等によると、商標の新規登録出願が提出された後、審査(方式審査、実体審査)に通れば、登録査定を受けることとなり、この登録査定を受けてから 2 ヶ月以内に登録料を納付すれば、商標権の設定登録がされ、商標公報に公告されるとともに、登録証書が発行される。商標登録出願の審理は、特殊な事情がない限り、通常出願してから登録査定または拒絶査定を受けるまでに約十ヶ月を要する。

商標の登録出願に不登録事由があると認められた場合、拒絶理由通知が発行される。

この拒絶理由通知に対し、出願人は意見書を提出して反論することができる。意見書を提出しても拒絶理由を克服できなければ、拒絶査定が発行されることになる。この拒絶査定に対し、訴願、行政訴訟などを通じて不服申立てを行うことが可能である。一方、何人も、商標登録公告の日から 3 ヶ月以内に、商標主務官庁に対して異議を申立てることができる。また、異議期間が経過した後は、利害関係人であれば、商標主務官庁に対し、無効審判請求を提出することができる。商標登録出願の審査手順については、次の「商標出願から登録までのフローチャート」をご参照いただきたい。

商標出願から権利取得まで

(2007 年 3 月現在)



3-2 必要書類

二次元商標（平面商標）登録の出願をしようとする者は、次の書類を備え、それらを商標主務官庁に提出しなければならない。

願書

出願人の名称及び住所、提出日、商標、指定商品・役務及びその区分
優先権を主張する場合、基礎出願の出願番号、出願日、国名を記入しなければならない

委任状（記名、捺印で可、公・認証不要）

出願人の住所、名称又は代表者に変更がなければ、記名捺印してから 5 年間は、既に提出された同一の委任状を援用できる。

商標見本

5 枚、サイズは 5cm × 8cm を超えてはならない。（カラーである場合は、モノクロームの商標見本も 2 枚添付する）

音響商標、立体商標の登録を出願しようとする者は、以上の書類の他、次の点に留意する

・音響商標の登録出願の場合、

願書にその旨明記し、且つ五線譜、数字譜又は説明描写を以って表示するとともに、その音声記録された光ディスクを添付しなければならない。五線譜、数字譜で表示する場合、関連説明を記さなければならない。

・立体商標の登録出願の場合、

願書にその旨明記するとともに、立体形状で図形を表示し、且つ関連説明を記載しなければならない。立体形状を明確に表現するために、出願人は同時に 5 枚以下の、異なる角度で同比率の図面又は見本を提出することができる。商標主務官庁が必要であると認めた場合は、出願人にこれらの提出を命ずることができる。前述の立体形状に権利を主張しない部分が含まれている場合、権利を主張する部分は実線で描写しなければならず、また、権利を主張しない部分については破線で表示するとともに、専用しない旨表明しなければならない。

特殊な出願である証明標章、団体標章、団体商標の場合は、下記の 3-4 にてそれぞれ説明する。

3-3 優先権主張

台湾はパリ条約の加盟国ではないが、2002 年から WTO の加盟国となっている。WTO TRIPs 協定を遵守することが WTO の加盟国に義務付けられているため、同協定の 2 条に従い、WTO の全加盟国に優先権を主張できる権利を与える。したがって、WTO の加盟国又は台湾と相互に優先権を承認している国において合法的に登録出願

した商標を、その出願人が当該外国における最初の出願日の翌日から 6 ヶ月以内に台湾に登録出願した場合、当該外国の出願に基づく優先権を主張することができる（商標法 4 条）。前述の規定に基づき優先権を主張する者は、出願と同時に優先権を主張する旨の声明を提出し、且つ願書に当該商標の外国での出願日及び当該出願を受理した国名を記載しなければならない。また、出願人は、出願日から 3 ヶ月以内に、先述の当該外国政府が出願受理を証明した出願書類を提出しなければならない。以上の規定に違反した場合、優先権を失う。また、優先権を主張する場合、その出願日は優先日を基準とする。

3-4 特殊な出願

(1) 証明標章

証明商標とは、証明する能力を有する法人、団体又は政府機関が、他人の商品又は役務の特性、品質、精密度、産地又はその他の事項に証明を与えるため、専用する標章である。なお、証明標章の出願人が、証明しようとする商品又は役務に係る業務に従事している場合、登録出願することはできない。また、証明標章の出願人の資格は制限されており、前述の「他人の商品又は役務を証明する能力を有する法人、団体又は政府機関」が、出願時出願人の有する、証明資格又は証明能力に係る証明書類を提出しなければならない。

WTO TRIPs 協定の地理的表示の保護に関連する規定に従い、地理的表示保護を強化し、2003 年の商標法改正の際、同法 72 条に産地証明標章が追加されたので、地名、地理的範囲及び地理的表示も証明標章として登録できるようになった。（例えば、池上米）

(2) 団体標章

法人資格を有する組合、協会又はその他の団体が、その組織又は会員籍を表彰するために、標章を専用しようとする場合は、団体標章の登録出願をしなければならない。団体標章登録の出願は、法定事項を明記した出願書を以って、並びに団体標章の使用規範（構成員資格及び団体標章の使用管理方法を明記したもの）を添付して、商標主務官庁に対しこれを出願しなければならない。

(3) 団体標章

団体商標登録出願する際には、商品又は役務の区分及び名称を記載した出願書をもって、並びに団体商標の使用規範（構成員資格及び団体標章の使用管理方法を明記したもの）を添付して、商標主務官庁へ提出する。

3-5 方式審査

上記 3-1 にて述べた通り、商標登録出願の審査は方式審査と実体審査に分けられている。方式審査では主に出願手続き・書類が完備しているかどうかを審査し、実体審査においては、方式審査を経た商願について受理された出願内容を確定し、その商標自体が商標としての商品自他識別性を具えているか、法定の不登録事由があるか、商標登録可能なものかの審査を行う。

方式審査において、商標出願の書類又は手続きに不備がある場合、補正する必要がある。補正の手続きについて、下記の通り述べる。実体審査の詳細については、後述の 3-6 をご参照いただきたい。

(1) 補正時期

商標登録出願後、出願人が自ら出願に不備があることに気付いた場合、自発補正することができる。なお、審査作業をスムーズにさせ、早期登録を図るために、自発補正手続きをとったほうがよい。

一方、審査官は、審査を始めた後、補正が必要だと判断した場合は、出願人（代理人）に補正を行うよう通知する。出願人は、補正指令通知を受領してから所定期間（通常は 30 日間であるが、60 日間の場合もある。なお、主務官庁に要請すれば、期間延長ができる。）内に、指定された内容に基づき補正を行い主務官庁に提出する。所定期間満了後、補正が行われなかったときは、出願は受理されないことになる。かかる補正の回数の制限は規定されていない。

(2) 補正の範囲

書類の補正：委任状、優先権証明書類等。

指定商品の補正：商品名の表現法は、範囲が広すぎる（例：電子製品）、又は不明確（ソフトウェアを使った商品）である場合、審査官より、具体的な商品名に変更するよう求められる。新製品であれば、商品の説明書又はカタログ等を添付する場合がある。

指定商品の減縮：指定商品・指定役務は、商標登録出願後に追加することはできないが、指定商品・指定役務の縮減はできる。よって、実体審査では、指定商品と同一・類似する商品において、他人の同一・類似商標が存在するため登録拒絶を受けた場合、抵触する商品が非主力商品であれば、当該商品を削除することにより、拒絶理由を克服することができる。

誤記の訂正

出願人、代表者又は住所の中国語表記の補正、修正

政府料金の補正

留意されたいのは、商標の態様は、登録出願後、変更することができないことである。なお、現行実務では、以上の補正は、そもそも出願の必要書類、事項又は第三者

に不測の損害が発生しないように便宜措置として認められるものである。したがって、出願人の補正手続に対し、主務官庁は受理決定又は却下決定を下さない。出願人の補正が商標に関する法令と合致していない場合、審査官は同一事項につき再度出願人に書類、指定商品の表現法等の補正を求めることができる。

(3) 出願分割と出願変更

出願分割と出願変更制度は補正手続とは異なるが、補正と類似の機能を果たしている。

出願人は使用を指定した商品又は役務について、商標主務官庁に対し、自発出願人より又は審査官の拒絶理由通知に対応する過程において、2以上の登録出願への分割を請求することができる。なお、この場合、原登録出願日を出願日とする。（商標法 21 条）。

一方、出願人の名称、代表者、住所の変更又は商標譲渡による変更は、主務官庁に出願変更の届け出をしなければならない。（商標法 20、22 条）

3-5 実体審査

(1) 拒絶理由

方式審査を経て、主務官庁は受理された商標登録出願に対し、商標に関する法令に従って審査を行う。出願から審理完了までスムーズに進行した場合は、約十ヶ月を要する。

商標法には以下の拒絶理由がある。

A、商標としての自他識別性（5 条 2 項、23 条 4 項）を備えていない

商標が、その商品又は役務の関連消費者にそれが当該商品又は役務を表彰する標識であると認識させることができず、且つそれによって他人の商品と区別できない。

B、商標法 23 条 1 項各号のいずれかの事情に該当する

第 5 条の規定に合致しないもの。

商品又は役務の形状、品質、用途又はその他の説明を表示するもの。

指定する商品又は役務の慣用標章又は名称であるもの。

商品又は包装の立体形状が、その機能を確保するために必要であるもの。

台湾の国旗、国の紋章、国璽、軍旗、軍の徽章、印章、勲章又は外国の国旗と同一又は類似のもの。

国父（孫文）又は国家元首の肖像又は氏名と同一のもの。

台湾の政府機関、又は展覧的な性質を有する集会の標章又はこれらが授与する表彰状等と同一又は類似のもの。

国際的な組織又は国内外の著名な組織の名称、記章、徽章、標章と同一又は類似のもの。

正マーク（日本の G マークに相当）又はこれと同じ性質を有する国内外の査証マークと同一又は類似のもの。

公序良俗を害するもの。

公衆にその商品又は役務の性質、品質又は産地について誤認、誤信させるおそれがあるもの。

他人の著名な商標又は標章と同一又は類似のもので、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれがあるもの、或は著名な商標又は標章の識別性又は信用を損なうおそれがあるもの。但し、出願人が商標又は標章の所有者の同意を得て登録出願する場合は、この限りでない。

同一又は類似の商品又は役務についての他人の登録商標或はそれらについて他人が先に出願した商標と同一又は類似のもので、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがあるもの。但し、当該登録商標又は先に登録出願された商標の所有者の同意を得て登録出願する場合は、これら両者の商標及び指定商品又は指定役務が同一である場合を除き、この限りでない。

同一又は類似の商品又は役務について他人が先に使用している商標と同一又は類似のものであって、出願人が当該他人との間に契約、地縁、業務上の取引又はその他の関係を有することにより、当該他人の商標の存在を知っている場合。但し、当該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。

他人の肖像又は著名な氏名、芸名、ペンネームを有するもの。但し、当該他人の同意を得て登録出願したものはこの限りでない。

著名な法人、商号又はその他の団体の名称を有し、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれのあるもの。

商標が他人の著作権、専利権又はその他の権利を侵害し、判決によりそれが確定したものの。但し、当該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。

台湾又は台湾と商標の保護を相互に承認する国家又は地区に係る酒類の産地表示と同一又は類似のもので、酒類商品への使用を指定するもの。

原則として商標類否判断時点は審査時であるが、上記、～及びは出願時である。（商標法 23 条 2 項）

(2) 意見書及び補充書の提出

商標の登録出願に不登録事由があると認められた場合、拒絶理由通知が発行され、拒絶理由に承服できない場合には、指定期間内にこの拒絶理由通知に対し、意見書を提出して反論することができる。指定期間は 30 日間であるが、延長が可能である。なお、意見書を提出した後で、査定を下す前に克服に役立つ資料を見つけた場合、更に意見補充書を提出できる。

(3) 登録査定及び拒絶査定

実体審査の結果、不登録事由がない、又は意見書の提出等により拒絶理由が克服された場合、直ちに登録査定が下される。ちなみに、現行商標法は、商標登録出願手続の時間を短縮するため、権利付与後の異議申立制度が採用されている。

一方、拒絶理由がある場合、意見書を提出しても拒絶理由を克服できなければ、拒絶査定が発行されることになる。この拒絶査定に対しては、訴願、行政訴訟などを通じて不服申立てを行うことが可能である。

(4) 登録公告及び異議申立て

登録査定を受けてから 2 ヶ月以内に登録料を納付すれば、商標権の設定登録がされ、商標公報に公告されるとともに、登録証書が発行される（商標法 26 条）。商標登録査定が公告されてから、三ヶ月以内であれば、利害関係の有無に拘わらず、商標登録が不適法であると認める場合、何人でも異議申立てを行うことができる（商標法 40 条）。

4. 権利の取得と維持

4-1 登録料の納付

商標の登録査定を受けた後、出願人が登録料を納付してはじめて商標公報に登録の公告がなされ、商標権の設定登録がされると同時に、登録証書が発行されることとなる。登録料は NT\$2,500 で、一括払い又は 2 回分割払いのいずれかを選ぶことができる。一括払いの場合には、登録査定書到達の翌日から 2 ヶ月以内に NT\$2,500 を納付し、2 回分割払いの場合には、まず 1 回目の登録料 NT\$1,000 を納付し、登録後、第 3 年目の期間満了前の 3 ヶ月以内に 2 回目の登録料 NT\$1,500 を納付する。つまり、商標存続期間の 10 年間で 2 期（1 年目、4 年目）に分けて登録料を納入することができるのである。

4-2 存続期間

商標登録者は、登録を受けた日から商標権を取得する。商標権の存続期間は、登録日より 10 年間である。存続期間は更新登録により 10 年ずつ延長できる。

4-3 存続期間更新登録

商標権の更新登録は、期間満了前の 6 ヶ月から期間満了後の 6 ヶ月の間に行わなければならない（28 条）。但し、期間満了後の更新登録は政府料金が割増で徴収される。なお、書換え制度を採用していないため、更新後も旧商品区分から新商品区分への書き換えは行われない。

(1) 更新登録手続き

登録証書への裏書きも取りやめとなったため、必要書類として、委任状さえ提出すれば手続きがとれる。

(2) 審査

商標に関する使用状況の審査はなく、また上述(1)の通り、審査が簡素化されている。よって、主務官庁への更新登録出願はほぼ許可されることになっている。

(3) 法改正に伴う留意点

前述の通り、商標権の更新登録は、期間満了前の6ヶ月から期間満了後の6ヶ月の間に行わなければならない。ただし、防護商標制度は2003年商標改正法で廃止されたため、更新登録する際は、基本商標（正商標）に変更しなければならない。また、更新期限は期間満了日までとなっており、期間満了日以降の更新登録は認められないので、注意を要する（87条）。

(4) 更新登録の効果

商標が期間満了の際、更新登録出願を行えば、更に10年間存続することとなる。すなわち、10年ごとに更新登録出願を行えば、商標権は半永久的に有効存続することとなる。

5.異議申立て

現行商標法は、商標登録出願手続の時間を短縮するため、権利付与後の異議申立制度が採用されている。つまり、主務官庁の審査結果は、不登録事由がなく、又は解消されれば、登録査定が下される。出願人が所定期限内に登録料を納付すれば、商標権の設定登録がされ、商標公報に公告されるとともに、登録証書が発行される（商標法26条）。

5-1 異議申立ての要件

(1) 申請できる者

何人でも異議申立てを行うことができる。

(2) 申立期間

商標登録査定が公告されてから、三ヶ月以内であれば、利害関係の有無に拘わらず、商標登録が不適法であると認める場合、異議申立てを行うことができる。また、異議申立理由書の作成又は証拠資料の収集に時間が必要である場合、ひとまず申立期間内に異議申立てを行い、然る後、理由書と証拠資料を主務官庁が指定する所定期間内（約30-45日間）に補充することができる。

5-2 異議申立てに対する審査

異議申立ての審査は商標紛争案を担当する審査官一人で行う。異議申立人が商標主務官庁へ異議申立書及び理由があることを裏付けできる証拠資料を添付し提出した後、主務官庁より被異議申立人に送付し、その答弁を求めることとなる。仮に、被申立人が指定された期限内に答弁理由を提出した場合、当該答弁理由は申立人側（代理人）に送達され、この答弁理由に対する反論の提出を求められることになる。知的財産局は、双方より提出された主張及び証拠資料を基に審理する。被異議申立人が指定の期限内に答弁理由を提出しなかった場合、知的財産局は申立人より提出された異議申立書及びその証拠資料を根拠に審理し、審決を下すことになる。

5-3 異議審決

(1) 異議審決

上述のように、異議申立理由に対する答弁と答弁理由に対する反論が行われ、審査官は双方の書類提出が完了してから、当該異議申立案件の審理を始める。したがって、審判を起こしてから審決が出るまでには、通常五ヶ月から八ヶ月を要し、ケースによっては一年近くかかることもある。審査官が異議申立人の主張・理由を認めれば、異議成立の審決を下す。異議申立人の主張・理由を認めない場合、異議不成立の審決を下す。

(2) 異議審決に対する不服申立て

異議申立ての審決に対し不服のある当事者は、審決書を受け取ってから 30 日以内に不服申立ての訴願を、主務官庁の上級機関である経済部へ提出することができる。30 日以内に不服申立ての訴願が提出されない場合、審決の効力が確定される。

異議確定後の登録商標については、何人も、同一の事実、同一の証拠及び同一の理由に基づいて無効審判を請求することはできない。

6. 商標審判手続き

6-1 種類

商標に対する審判の種類は 商標登録無効審判と商標登録取消審判に分けられる。商標権利範囲確定審判が 2003 年法改正により廃止され、権利範囲に係る紛争があった場合、司法機関により判断されることになっている。なお、拒絶査定に対し不服がある場合、日本では特許庁長官に拒絶査定不服審判を請求するのに対し、台湾では主務官庁の上級機関である経済部訴願委員会に不服申立て（訴願）を行う。したがって、現行商標実務では、商標権利範囲確定審判や拒絶査定不服審判等はない。

6-2 商標登録無効審判

(1) 請求人

請求人の資格を持っているのは、登録商標に対する利害関係を有する者及び審査官である。つまり、商標の登録が法定事項に違反してなされた場合、利害関係人又は審査官は、商標主務官庁に対し、その登録の無効審判請求を提出することができる。

(2) 無効事由

商標の登録が商標法 23 条 1 項又は 59 条 4 項の規定する情況に違反してなされた場合、その登録の無効審判請求を提出することができる。商標法 23 条 1 項 (A) 又は 59 条 4 項 (B) の規定は下記の通りである。なお、台湾における主な商標紛争は、外国における周知・著名商標が台湾企業等に先取りされることである。したがって、23 条 1 項 12 号、13 号及び 14 号が引用されるケースが多い。(23 条 1 項 12 号は周知商標と同一・類似商標の登録禁止、13 号は同一・類似商品における同一・類似商標の登録阻却、14 号は契約又は業務等の関係で、他人の商標の存在を知っている場合、当該他人の商標が使用する商品・役務に同一・類似商標の登録ができないこと)

A 商標法 23 条 1 項については、第 5 章 3-5 実体審査の(1)の B を参照されたい。

B 第 59 条 4 項 の規定については、登録商標に次の事情 (57 条 1 項 1 号、6 号) があり、その登録が取消された場合、原商標権者は取消された日から 3 年間、原登録図案と同一又は類似の商標を同一又は類似の商品又は役務において登録し、又は譲受し、又は使用許諾を受けることができない。商標主務官庁の処分前に、商標権の放棄を声明した場合も、同様であるとしている。

勝手に登録商標を変更し又は付記を加え、他人が同一又は類似の商品又は役務において使用している登録商標と同一又は類似させ、関連消費者に混同誤認を生じさせるおそれのある場合。(57 条 1 項 1 号)

商標を使用した結果、他人の著作権、専利権又はその他の権利を侵害し、裁判所の判決で侵害が確定した場合。(57 条 1 項 6 号)

なお、商標登録前に、他人の著作権、専利権又はその他の権利を侵害し、登録後に裁判所の判決で侵害が確定した場合、利害関係人又は審査官は、商標主務官庁に対し、その登録の無効審判請求を提出することができる。

(3) 請求期間

登録商標に対する無効審判の請求できる期間は、商標が登録されてから 5 年以内である。但し、悪意で他人の周知・著名商標を先取りして登録した場合、この除斥期間の制限を受けない。

(4) 無効審決確定の効力

無効審判案件につき審決により無効審判が成立した場合、その登録は無効になる。但し、審決時に、当該情況がすでに存在しない場合、公益及び当事者の利益を参酌した後、不成立の審決を下すことができる。

無効審判の審決が確定された場合、その商標権は最初からなかったものと見なす。なお、何人も、同一の事実、同一の証拠及び同一の理由に基づいて無効審判を請求することはできない。

6-3 商標登録取消審判

(1) 取消事由

A、商標登録後、次の各号のいずれかの情況に該当する場合、商標主務官庁は、職権で又は利害関係人の請求により、その登録を取消することができる（商標法 57 条 1 号）。なお、取消の事由が、登録商標の使用を指定する一部の商品又は役務にのみ存在する場合、当該一部の商品又は役務についてその登録を取消することができる。

勝手に登録商標を変更し又は付記を加え、他人が同一又は類似の商品又は役務において使用している登録商標と同一又は類似させ、関連消費者に混同誤認を生じさせるおそれのある場合。なお、使用許諾を受けた者が以上の行為をなし、商標権者は当該行為を明らかに知っていた、又は知っていたはずであるにもかかわらず、反対を表明しなかった場合も同様とする。

正当な事由なく使用せず、又は使用を停止し続けて、すでに 3 年が経過した場合。但し、使用許諾を受けた者が使用する場合は、この限りでない。

第 36 条の規定により、適当な区別表示を付していない場合。但し、商標主務官庁の処分前に区別表示を付し、且つ混同誤認が生じるおそれのない場合は、この限りでない。

商標がすでにその指定商品又は指定役務に係る慣用標章、名称又は形状となっている場合。

商標が実際に使用された場合、公衆がその商品又は役務の性質、品質又は産地を誤認誤信するおそれがある場合。

商標を使用した結果、他人の著作権、専利権又はその他の権利を侵害し、裁判所の判決で侵害が確定した場合。

B、標章権者又は使用許諾を受けた者が、証明標章、団体標章又は団体商標を不当に使用し、他人又は公衆に損害が生じた場合、商標主務官庁は、何人かを問わずその請求により、又は職権でその登録を取消することができる。

上記にいう不当な使用とは、次の各号のいずれかの情況を指す。

証明標章を商標として使用する、或は証明標章権者の商品又は役務に関連する物品又は書類上に標示する。

団体標章又は団体商標の使用が、社会公衆に当該団体の性質を誤認させる。

前条の規定に違反して、移転、使用許諾、又は質権の設定をする。

標章の使用規範に違反する。

その他の不当な方法による使用。

(2) 請求人

取消審判は利害関係人に限って請求するものではなく、何人でも登録商標に対する取消審判を請求することができる。なお、主務官庁は職権により、取消理由がある登録商標に対し、取消審判を通じ、当該登録を取消することができる。

(3) 取消審決確定の効果

商標の登録を取消すべき旨の審決が確定したときは、原則として商標権はそれ以降消滅する。登録商標の態様を変更して使用し、他人の登録商標と類似させたこと、又は商標を使用した結果、他人の知的財産権を侵害したことを理由（取消事由 A の と ）として、その登録が取消された場合、原商標権者は取消された日から 3 年間、原登録商標の態様と同一又は類似の商標を同一又は類似の商品又は役務において登録し、又は譲受し、又は使用許諾を受けることができない。商標主務官庁の処分前に、商標権の放棄を声明した場合も、同様である。

6-4 審決に対する不服

主務官庁である知的財産局が判断を下した審決に対し、審決書送達日の翌日から起算して 30 日以内に、上級機関の経済部へ不服申立て（訴願）を提出することができる。また、経済部の審決に対し不服であれば、訴願決定書送達日の翌日から起算して二ヶ月以内に、高等行政裁判所へ行政訴訟を提起することができ、高等行政裁判所の判決に対し判決書送達日の翌日から起算して 20 日以内に最高行政裁判所へ上告を提起することができる。最高行政裁判所の判決に対し更に上訴することはできない。

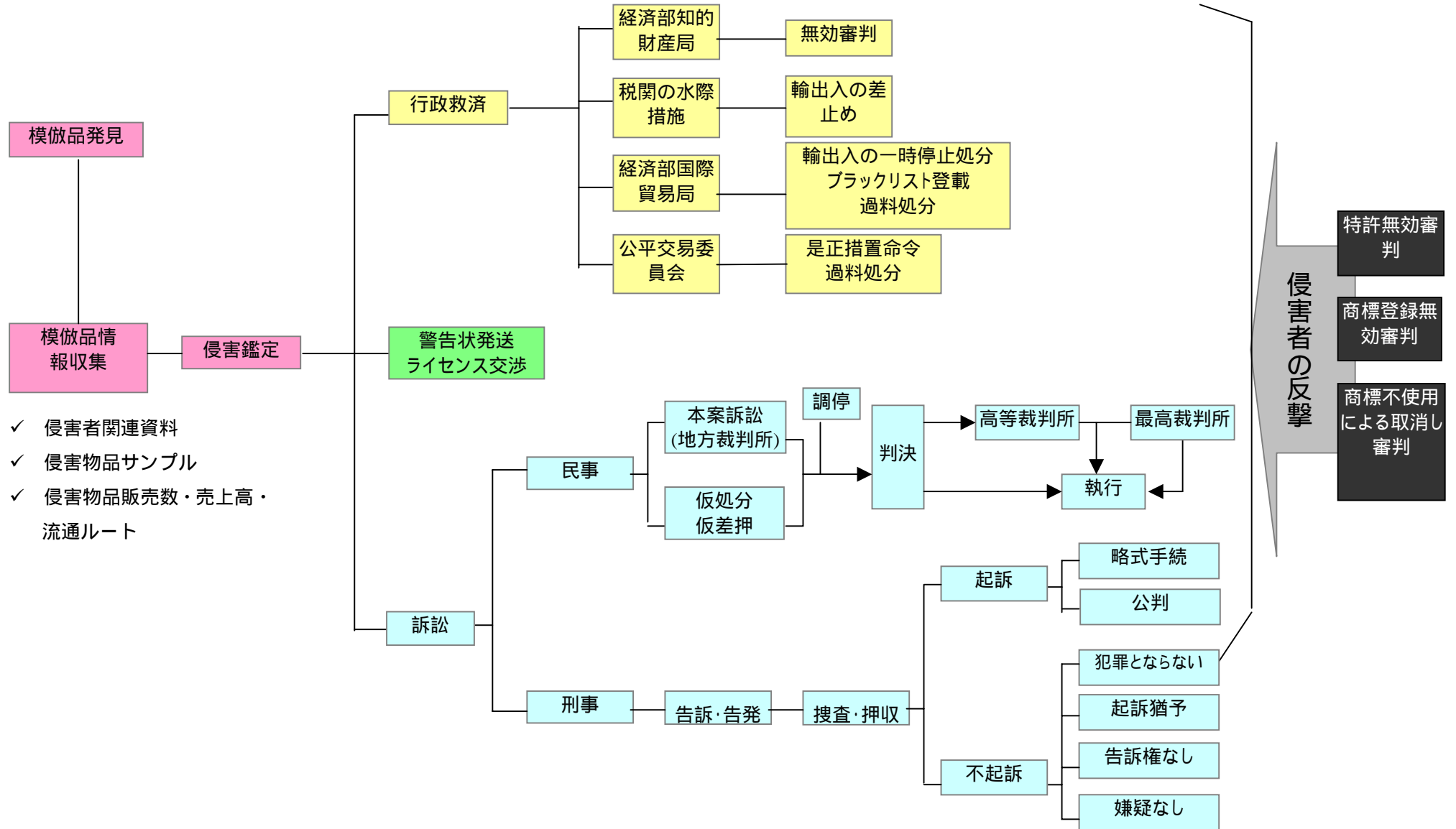
6-5 訴訟手続きの中止

無効審判請求又は異議申立ての手續進行中、商標権に関する民事又は刑事訴訟が提出された場合、審決の確定前に、その訴訟手續の進行を停止することができる。

第 II 編 模倣に対する救済

知的財産権侵害事件が発生した場合、侵害者に対し、民事訴訟や刑事訴訟を提起して、侵害者の責任を追及することができる。模倣に対する救済手段に、民事訴訟と刑事訴訟のほか、行政救済制度もある。行政救済には、侵害事件発生後の制裁だけではなく、侵害者による不当な権利取得の排除や知的財産権侵害物品の摘発についても各々制度が設けられている。権利者は当該行政救済制度を民事訴訟や刑事訴訟等と併せて活用すれば、権利を一層守ることができる。

本編では、まず、侵害者による不当な権利取得の排除(知的財産局による審判制度)、知的財産権侵害物品の摘発(税関による水際処置)、及び行政制裁(台湾經濟部国際貿易局及び公平交易委員会による救済措置)等の行政救済制度から説明を始め、続いて、民事訴訟と刑事訴訟の手続きを紹介することにする。



第 1 章 模倣に対する行政救済

1. 知的財産局による審判制度

知的財産局による審判制度は、専利権、商標権などを付与・維持すべきか否かにつき、公衆による審査の性質を持つほか、他人の発明、考案、意匠又は商標を模倣するなどの専利権、商標権侵害事件においても防衛手段として活用されている。付与された専利権、商標権に無効の事由がある場合、行政官庁である知的財産局に無効審判請求を提起し、専利権や商標権を無効にさせることができる。

無効審判の審決を不服とする場合、当該審決は性質上行政処分に該当するので、不服の申立ては、行政処分不服申立ての手続き、すなわち、訴願を通じて行うこととなる。訴願は知的財産局の上級行政機関である台湾經濟部に提起する。訴願の決定を不服とする場合、行政裁判所に行政訴訟を起こすことができる。

1-1 知的財産局による審判の種類及び内容

知的財産局による審判には、専利無効審判及び商標無効審判がある。他人の専利や商標を模倣して既に登録された案件を巡る紛争は、専利無効審判や商標無効審判を通じて解決する。これらの審判は請求人と被請求人が対立する（当事者対立）構造を取っており、登録されている専利や商標に無効の事由があるか否かは審判において判断される。一方、専利権や商標権を巡る紛争に関わる専利や商標の保護範囲を確認するための審判は知的財産局に存在しない。すなわち、知的財産局は、専利実施形態や商標使用形態、商標使用商品が当該特許発明の技術範囲や商標・商品の類似範囲に属するか否かについて、審判を通じて判断しない。特許実施形態や使用形態が当該特許発明の技術範囲や商標類似範囲に属するか否かは、台湾で、侵害訴訟が起こされて初めて裁判所で判断されることとなる。ちなみに、専利侵害訴訟の場合、専利実施形態が当該専利権の範囲に属するか否かについて、裁判所が技術上の意見を求めようとする場合、知的財産局ではなく、第三者の専門機関に鑑定を依頼するのが現在のやり方である。以下に、専利無効審判及び商標無効審判の内容を説明する。

(1) 専利無効審判

意義

特許発明、登録実用新案、登録意匠に無効の事由がある場合、それを理由に専利権を権利付与当時に遡って無効にさせる制度である。

請求できる者

専利無効審判は「冒認出願」を理由とする場合を除き、何人も証拠を添えて請求することができる。ちなみに、「冒認出願」とは「専利出願権が複数の者が共有するものであるのに、共有者全員により出願が提出されなかった」又は「専利権者が専利出願権者ではない」場合をいう。これらは専利権の帰属に関する紛争であるため、利害関係者のみが無効審判請求を提起することができる。

また、審査官も職権により専利無効審判を請求することができる。

専利権の存続期間満了後又は消滅後、原則として、それを無効審判請求の標的とすることができない。しかし、利害関係者は、専利権の取消により回復できる法律上の利益がある場合、専利権の存続期間満了後又は消滅後も、無効審判を請求することができる

無効事由

以下のことは専利の無効事由とされる。（台湾専利法第 67、107、128 条）

- ・ 専利出願権が共有であるのに、共有者全員により出願が提出されなかった場合
- ・ 発明、考案、意匠が「専利法」に定める定義に違反し、産業上の利用性、新規性、進歩性等の専利の基本 3 要件を備えていない、新規性の擬制喪失、又は法定の専利を付与しない項目に属する場合
- ・ 明細書又は図面が「専利法」の法定記載要件に違反する場合
- ・ 発明、考案、意匠が先出願原則に違反する場合
- ・ 明細書又は図面の補充、補正が出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えている場合
- ・ 専利権者の属する国が中華民国国民の専利出願を受理しない場合、
- ・ 専利権者が専利出願権者ではない場合

無効の効果

無効事由が成立した場合、「無効審判成立及びその専利権を取消す」旨の審決、すなわち、「専利無効」審決を作成しなければならない。このような審決が確定した場合、その専利権の効力は最初から存在しなかったものとみなす（台湾専利法第 73 条、並びに 108 条・129 条により、73 条を準用）。

ちなみに、専利権に関する民事訴訟について、無効審判が確定するまで、審理を中止させることができ、また、無効審判が権利侵害訴訟の審理に関連する場合、知的財産局は、優先的にこれを審査することができる（台湾専利法第 90 条）。

(2)商標登録無効審判

意味

法定の登録要件に反して登録された商標に対し、利害関係人又は審査官の請求によりその登録を無効にさせる制度である。

請求できる者

- ・ 利害関係人
- ・ 審査官

無効事由

登録商標に以下の事由がある場合、無効審判の対象となる。

- ・ 商標図案は台湾商標法第 5 条の規定に合致しない場合
- ・ 商標図案は商品又は役務の形状、品質、用途又はその他の説明を表示する場合
- ・ 商標図案は指定する商品又は役務の慣用標章又は名称である場合
- ・ 商標図案は商品又は包装の立体形状が、その機能を確保するために必要である場合

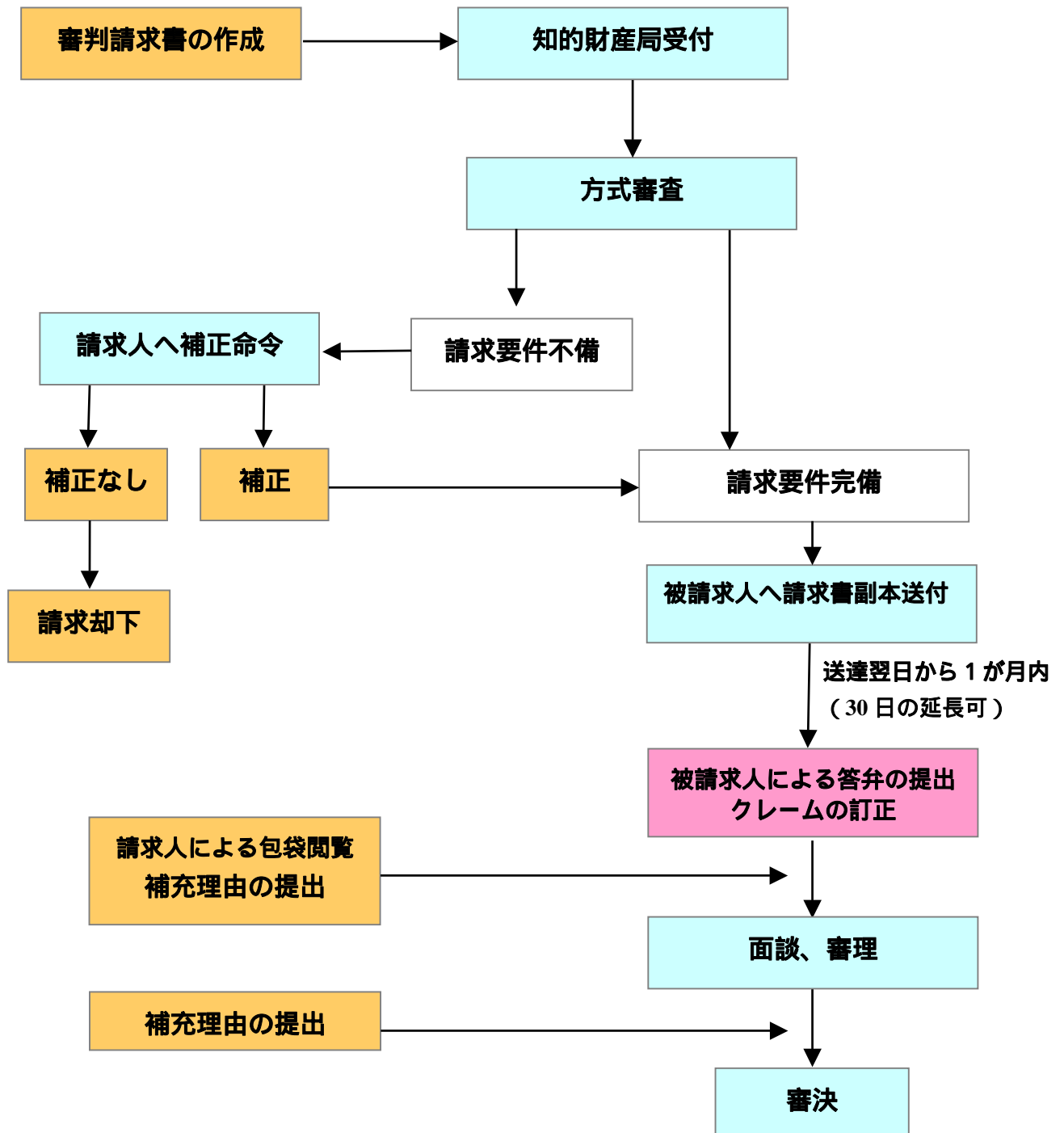
- ・ 商標図案は台湾の国旗、国の紋章、国璽、軍旗、軍の徽章、印章、勲章又は外国の国旗と・同一又は類似の場合。
- ・ 商標図案は国父（孫文）又は国家元首の肖像又は氏名と同一の場合
- ・ 商標図案は台湾の政府機関、又は展覧的な性質を有する集会の標章又はこれらが授与する表彰状等と同一又は類似の場合
- ・ 商標図案は国際的な組織又は国内外の著名な組織の名称、記章、徽章、標章と同一又は類似の場合
- ・ 商標図案は正マーク（日本の G マークに相当）又はこれと同じ性質を有する国内外の査証マークと同一又は類似の場合
- ・ 商標図案は公序良俗を害するものに該当する場合
- ・ 商標図案は公衆にその商品又は役務の性質、品質又は産地について誤認、誤信させるおそれがある場合
- ・ 商標図案は他人の著名な商標又は標章と同一又は類似のもので、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれがある場合、或は著名な商標又は標章の識別性又は信用を損なうおそれがある場合。但し、出願人が商標又は標章の所有者の同意を得て登録出願する場合は、この限りでない
- ・ 商標図案は同一又は類似の商品又は役務についての他人の登録商標或はそれらについて他人が先に出願した商標と同一又は類似のもので、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。但し、当該登録商標又は先に登録出願された商標の所有者の同意を得て登録出願する場合は、これら両者の商標及び指定商品又は指定役務が同一である場合を除き、この限りでない。
- ・ 商標図案は同一又は類似の商品又は役務について他人が先に使用している商標と同一又は類似のものであって、出願人が当該他人との間に契約、地縁、業務上の取引又はその他の関係を有することにより、当該他人の商標の存在を知っている場合。但し、当該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。
- ・ 商標図案は他人の肖像又は著名な氏名、芸名、ペンネームを有する場合。但し、当該他人の同意を得て登録出願したものはこの限りでない
- ・ 商標図案は、著名な法人、商号又はその他の団体の名称を有し、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれのある場合
- ・ 他人の著作権、専利権又はその他の権利を侵害したもので、判決によりそれが確定した場合。但し、当該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない
- ・ 商標図案は台湾又は台湾と商標の保護を相互に承認する国家又は地区に係る酒類の産地表示と同一又は類似のもので、酒類商品への使用を指定する場合
- ・ 商標図案は台湾商標法第 59 条 4 項の規定に合致する場合

無効の効果

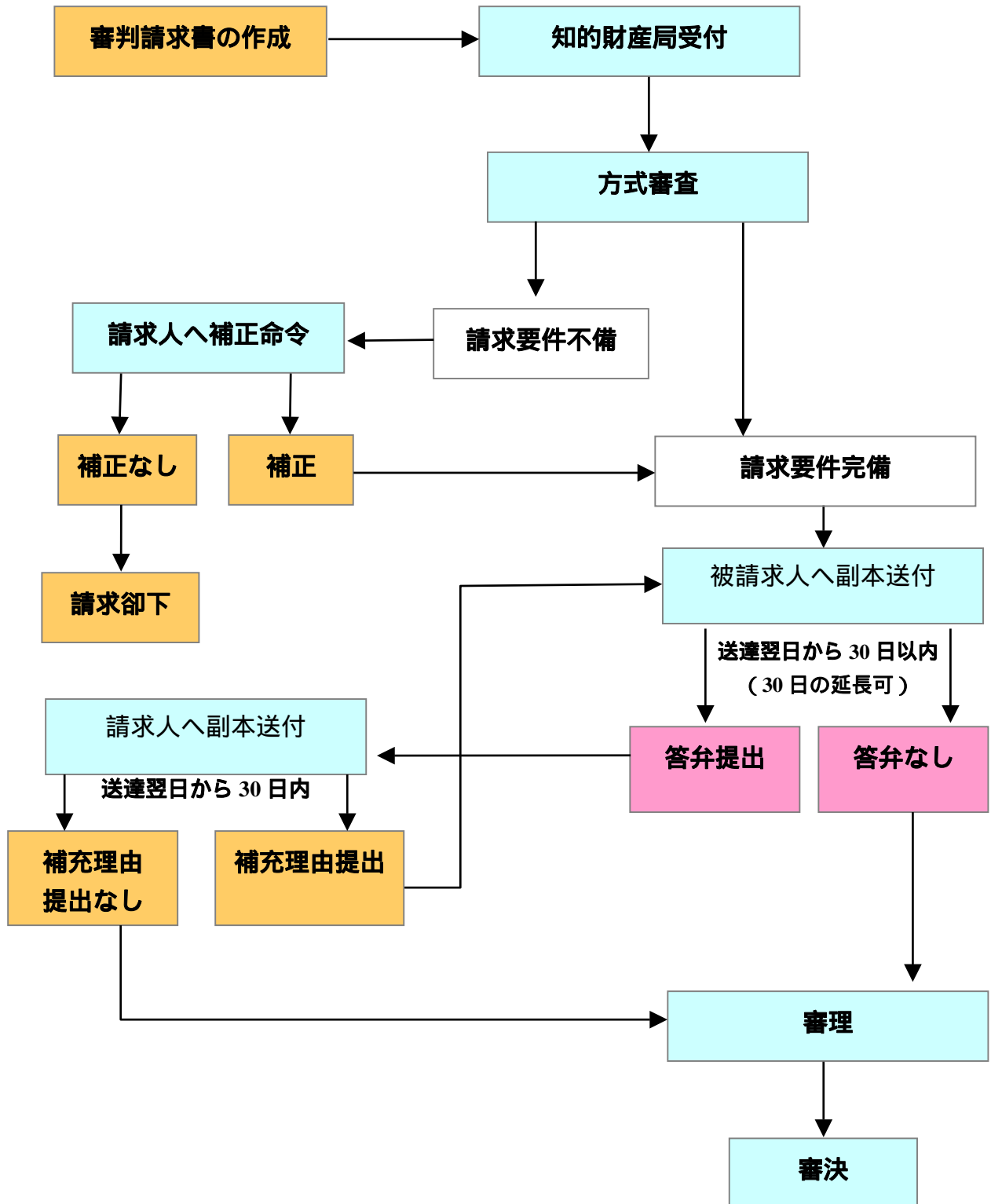
無効審判の審決が確定された場合、その商標権は最初からなかったものと見なす。

1-2 知的財産局による審判の手続き

(1) 審判手続のフローチャート
 専利無効審判



商標無効審判



(2) 審判の請求（専利及び商標は共通）

審判請求書

審判請求は、以下の記載がある審判請求書を証拠資料と共に知的財産局に提出して行う。

- ・ 無効審判の対象（専利又は商標の名称、登録番号）
- ・ 請求人及び被請求人の氏名、国籍及び住所（法人の場合、その名称、営業所及び代表者）
- ・ 代理人の氏名、住所（代理人による請求の場合）
- ・ 請求の理由

審判請求に必要な書類、資料の補正

審判請求に必要な書類、資料は法令の規定に違反し、その補正が認められる場合、知的財産局は期限を定め、請求人に補正の機会を与えなければならない（専利法施行細則第 9 条、商標法第 9 条 1 項）。

補正が認められる事項として以下のものが挙げられる。

- ・ 審判請求書の記載が完備されていない場合
- ・ 請求理由又は証拠資料が完備されていない場合
- ・ 代理人による請求の場合、委任状が欠如している場合
- ・ 所定の手数料が納付されていない場合
- ・ その他法令に定められている方式に違反する場合

審判請求書の受理

審判請求書が知的財産局に提出された後、先ず提出された資料に関する方式審査が行われる。提出される資料が不備で補正できる場合、請求人に補正を通知する書簡を発送する。請求人が所定期間内に補正をしない場合、審判請求は却下される。また、審判請求で提出された資料が完備している場合、審理が開始される。

(3) 審理（専利及び商標は共通）

書面による審理

無効審判は原則として書面をもって審理する。したがって、無効審判請求書のほか、被請求人による答弁も書面により提出される。但し、専利無効審判の場合、当事者は面談、実験等を用いて説明を補充、強化することができる。

処分権主義

専利審判については、審判手続の開始、審判範囲の特定、審判手続の終了については、請求人の自律的な判断に委ねられる。したがって、原則としては、審理の対象は申立てがなされた請求項に限られる。

(4) 審判の終了（専利及び商標は共通）

審判は審決又は請求人による審判請求の取下げにより終了する。

審決の意味

審決は、知的財産局が審判請求に対し法定の方式により作成した判断である。

審決の種類

「無効審判請求却下」の審決：請求要件が不備な場合

「無効審判不成立」の審決（即ち「専利維持」又は「商標登録維持」審決）：無効事由が成立しなかった場合

「無効審判成立及びその専利権又は商標権を取消す」旨の審決（即ち「専利無効」又は「商標登録無効」審決）：無効事由が成立した場合

手続き

無効審判請求については、審査官は、関連する審査手続き終了後、審決書を作成して、専利権者又は商標権者及び無効審判請求者に送達しなければならない。

審決の効果

無効審判の審決は行政処分であり、無効審判請求者又は無効審判対象の専利又は商標の権利者が無効審判の審決を不服とする場合、無効審判審決書受領後30日以内に、法により、知的財産局の上級機関である経済部に対し、訴願を提起することができる。経済部の訴願決定に不服がある場合には、さらに、行政訴訟法の規定により高等行政裁判所に行政訴訟を提起することができる。審決が確定した場合、「無効審判不成立」の審決につき、同一事実及び同一証拠に基づき再び審判を請求することはできない（台湾専利法第67条4項、商標法第55条）。また、「無効審判請求却下」の審決については、実体審査が行われていないため、「同一事実及び同一証拠に基づき再び審判を請求することはできない」という制限を受けない。

審判費用

無効審判の対象により、一件あたりの政府手数料は以下のように異なる。

発明特許の場合：NT10,000

実用新案の場合：NT9,000

意匠の場合：NT8,000

商標の場合：NT4,000

1-3 専利及び商標の再審

(1) 意義

審決等の行政処分につき、法定の救済期間が経過した後でも、再審理由に該当する場合は、処分を受けた者又は利害関係者は行政機関に対し、取消し、廃止又は変更を申立てることができる（行政手続法第128条）。

(2) 再審理由

- ・ 行政処分が依拠している事実がその後、処分を受けた者又は利害関係者に有利な変更が発生する場合
- ・ 新たな事実が発生した場合又は新たな証拠が発見された場合。ただし、斟酌された上でより利益のある処分を受けられるものに限る。
- ・ その他の行政訴訟法に定められる再審事由に相当し、且つ行政処分に影響を与えるに足る場合

(3) 再審請求の期間

再審の申立ては、法定の救済期間が経過して3ヶ月以内にこれを行うものとする。その事由が後に発生した場合又は後に知られた場合は、発生又は知った日から起算するが、法定の救済期間が経過して五年を超える場合は、申立を行うことはできない。

1-4 専利及び商標の訴訟・訴願

知的財産局による無効審判請求の審決を不服とする場合、高等裁判所に対し行政訴訟を提起することができる。但し、行政訴訟の先行手続きとして、知的財産局の上級機関である台湾經濟部に対し訴願手続きを取ることが必要とされる。

ちなみに、台湾の訴願手続きについて、以下のように説明する。

訴願を提起しようとする者は知的財産局より無効審判請求の審決などの行政処分を通知する書類を受け取った日から30日以内に、所定事項を記載した訴願書をもって処分機関である知的財産局を通じて經濟部の訴願審議委員会へ訴願を提起する。30日の訴願提出期限が遵守されているか否かは、訴願書の発送日ではなく、知的財産局に到達した日をもって計算する。なお、訴願理由については、前記の30日の訴願提出期限内に、まず先に訴願を提出したい旨記載した書面を提出し、後日理由を補充することが認められている。

經濟部の訴願審議委員会は知的財産局を通じて訴願書を受領すると、まず形式審査を行う。訴願書に不備があり、それが補正できる場合、20日間の期限を定め、訴願人に補正するよう命じる。訴願理由書の内容が完備している場合、知的財産局に答弁及び関連書類の提出を求める。訴願の審理については、訴願審議委員会会議にて書面によりこれを審理し、訴願審議委員会会議に出席した委員の過半数をもって決定を行う。

訴願の決定を不服とする場合、訴願決定書が到達した日の翌日から2ヶ月以内に高等行政裁判所に行政訴訟を提起することができる。

1-5 問い合わせ先

台湾知的財産局

住所：台湾臺北市大安區辛亥路二段185號3樓

電話：886-2-2738-0007

<http://www.tipo.gov.tw/>

台北高等行政裁判所

住所：台湾臺北市和平東路三段1巷1號

電話：：886-2-2702-7366

<http://tpb.judicial.gov.tw/>

2.税関による水際措置

知的財産権の保護策の一環として、台湾税関では、商標権、著作権、特許権、実用新案権及び意匠権を侵害する物品（以下「侵害物品」という）に対し、輸出入差止め措置が採用されている。輸出入差止め措置の実施は侵害された権利の種類により手続きが異なる。特許権、実用新案権、意匠権に係わる侵害物品の差止めは、先ず権利者（特許権、実用新案権、意匠権及びその専用使用権者を含む）が裁判所より当該侵害物品の輸出入を差し止める旨の仮処分を得なければならない。権利者はこの仮処分を得た後、専利侵害に係る輸出入メーカーの名称、貨物の名称、輸出入の税関及び期日、飛行機（船舶）の便名、コンテナ番号、貨物の保管場所及びその他関連する具体的な資料を税関に提出すれば、侵害物品の輸出入差止めをしてもらうことができる。これに対し、商標権、著作権について、商標権、著作権の侵害物品の輸出入を防止するため、税関に「商標権侵害物品及び著作権侵害物品の輸出入の摘発又は情報提供の申請」制度（以下「税関の登録制度」という）が設けられている。当該制度を利用し、税関で一定の登録手続きが終了すれば、商標権、著作権の侵害物品に対し、職権による輸出入差止めが行われる。以下に、税関の登録制度を説明する。

2-1 税関の登録制度

税関は常々、業務を遂行する際に知的財産権侵害物品の有無に注意を払っており、知的財産権侵害物品を発見した場合、自主的に侵害の内容に応じて事件を検察署、公平交易委員会又は台湾国際貿易局に移送する。しかし、日々の通関荷物数は余りにも膨大なので、普段の通関手続きを通じて侵害物品が発見されるのは稀である。

侵害物品の輸出入差止めの効果を高めるため、権利者が台湾登録商標又は台湾法の保護を受ける著作物につき台湾関税総局において税関登録を行うことができる。税関登録手続きが終了した後、基隆、台北、台中、高雄等台湾全国の各税関は登録

期間中（一年）に輸出入商品に対しサンプリングチェックを行い、登録されている情報と一致するものがあるかどうかを注意深くチェックする。輸出入申告された物品が商標権や著作権侵害の疑いがある（以下「侵害疑義物品」という）と判断された場合、税関は当該物品の輸出入を差し止めて登録済の権利者にその旨を通知する。

2-2 商標権・著作権侵害疑義物品の輸出入差止め手続き

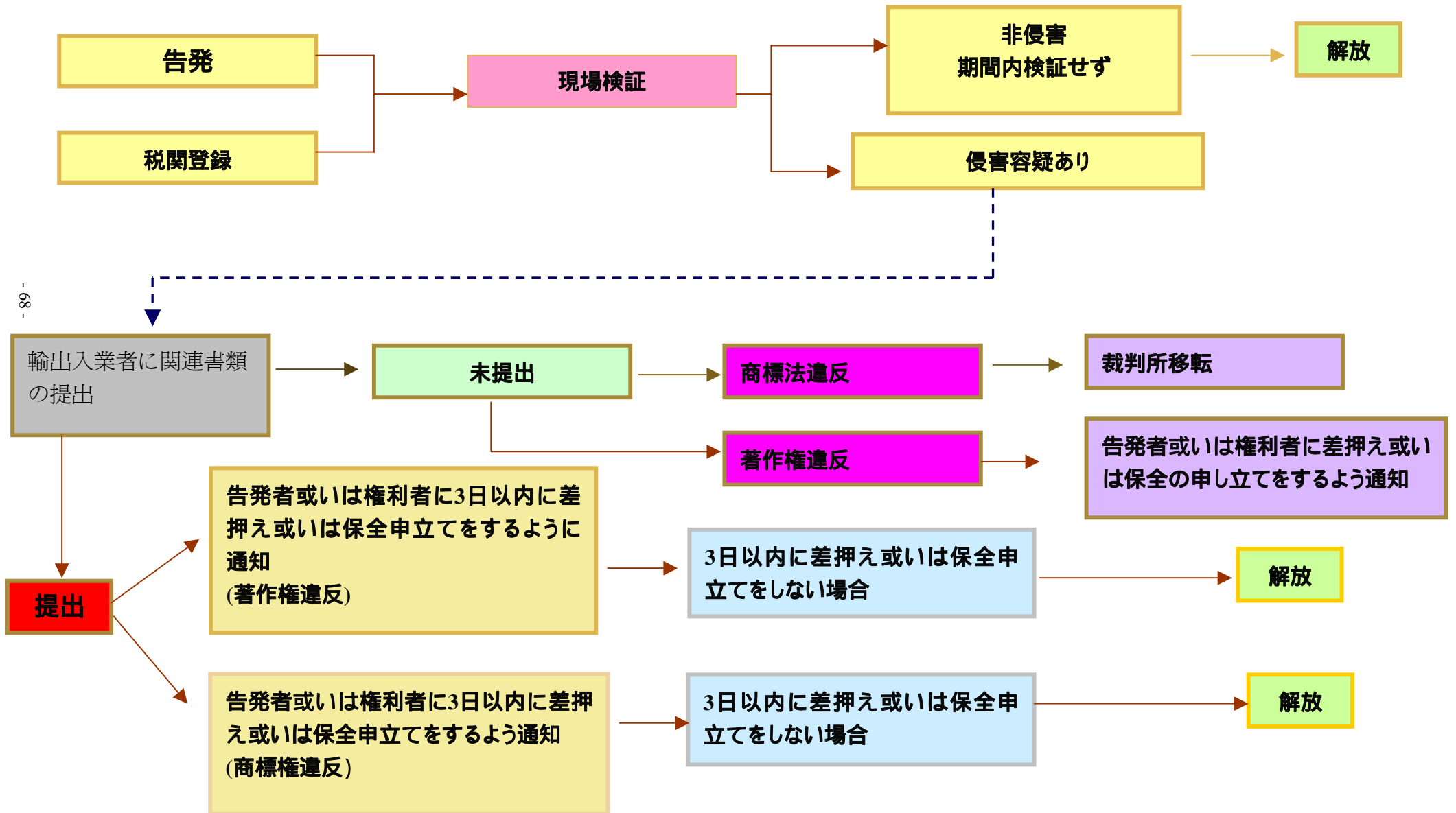
通関手続きにおいて侵害疑義物品が発見されたとき、税関は直ちにその情報を権利者に連絡する。権利者（又はその代理人）は税関よりその通知を受け取った時点から一定の時間（空便の場合は四時間、船便の場合は一日）内に指定の税関に赴き、製品真偽の認定を行い、それが模造品であると判断した場合、税関は輸出入者への通知等の一定の手続きを行った上で、侵害物品の輸出入を差し止め、事件を地方裁判所検察署又は司法警察機関に移転する。

また、権利者は、自ら侵害品の輸出入を発見したとき、その商標権又は著作権を侵害する物品の輸出入に対して、税関で差し止めるよう申立てることができる。輸出入差止めの申立ては書面で行い、更に侵害の事実を釈明し、且つ税関が見積った当該輸入貨物課税価格又は輸出貨物 FOB 価格に相当する保証金を担保として提供しなければならない。また、申立人は税関から差止めの受理を通知された日から 12 日以内に、権利侵害の本案訴訟を提起するとともに、税関に通知しなければならない。

2-3 商標権・著作権侵害物品の輸出入差止め手続き

知的財産権侵害物品は、台湾関税法第 15 条により輸入することができない。輸入された物品が知的財産権侵害物品である場合、当該事実は司法警察や検察機関に通報される。事件は司法警察や検察機関に移転され、輸出入が差し止められることとなる。しかし、物品が知的財産権侵害物品に該当するか否かの判断は容易ではないため、このようなルートによる輸出入差止めは殆どない。商標権・著作権者は、前記で説明した税関の登録制度や輸出入差止めの申立てを利用するのが殆どである。

2-4 税関登録による輸出入差止め手続きのフローチャート



2-5 税関登録に必要な書類・情報

- (1) 委任状（代理人による手続きの場合）
- (2) 台湾商標登録証書のコピー（コピーに「原本と一致している」旨記載した上で、社印を押す必要がある）
- (3) 台湾にライセンサーがあれば、その名称、住所、電話、ライセンスの範囲
- (4) 台湾輸入・販売代理店の名称、住所、電話及び代理業務の内容。
- (5) 侵害と疑われる商品の名称
- (6) 侵害品は台湾から輸出するものであるか、それとも台湾へ輸入するものであるか
- (7) 真正品及び模倣品を見分ける要点
- (8) 真正品が特定の港を経由して輸出入するのであれば(台湾桃園空港、基隆港、台中港、高雄港等)、その情報
- (9) 侵害品の輸出入に関する情報（ある場合）。例えば、特定の港より輸出入を行う等

2-6 その他の注意点

台湾知的財産局で登録済の商標のみが税関登録対象で、外国の登録商標や、台湾出願中の商標は登録対象外となる。税関登録の有効期間は一年間で、更新手続きにより一年毎に延長することができる。また、前記で報告したとおり、税関が侵害疑義物品を発見した場合、権利者は税関よりその旨の通知を受け取った時点から一定の時間（空便の場合は四時間、船便の場合は一日）以内に、連絡された税関に赴き、製品真偽の認定を行わなければならない。空便の場合、通関手続きは 24 時間行われるため、通知を受ける時間は予測できない。したがって、製品を鑑定できる専門家（又は代理人）が常時台湾に滞在するか、或いは真偽の鑑定方法の全てを代理人に提供する必要がある。

2-7 問い合わせ先

台湾関税総局

住所：台湾台北市大同区塔城街 13 号

電話：886-2-2550-5500

<http://web.customs.gov.tw/mp.asp?mp=1>

3.台湾經濟部国際貿易局による救済措置

台湾貿易法第 17 条により、製品の輸出入は、「台湾又はその他の国の法令により保護を受けている知的財産権を侵害してはならない。前記規定に違反した者は同法第

28 条により、台湾經濟部国際貿易から、警告、3 万台湾元以上 30 万台湾元以下の過料処分、又は一ヶ月以上一年以下の輸出入停止処分を受ける。

運用上、前記制裁は、権利者による告発ではなく、税関等の機関は「台湾又はその他の国の法令により保護を受けている知的財産権」が侵害された事実を発見した場合、事件を経済部国際貿易局に移転して初めて発動するのが現在のやり方である。台湾から商標権侵害物品が輸出されることを排除するために、台湾經濟部国際貿易局は、商標輸出監視制度 (Monitoring System for Export of Trademark Products) を実施している。

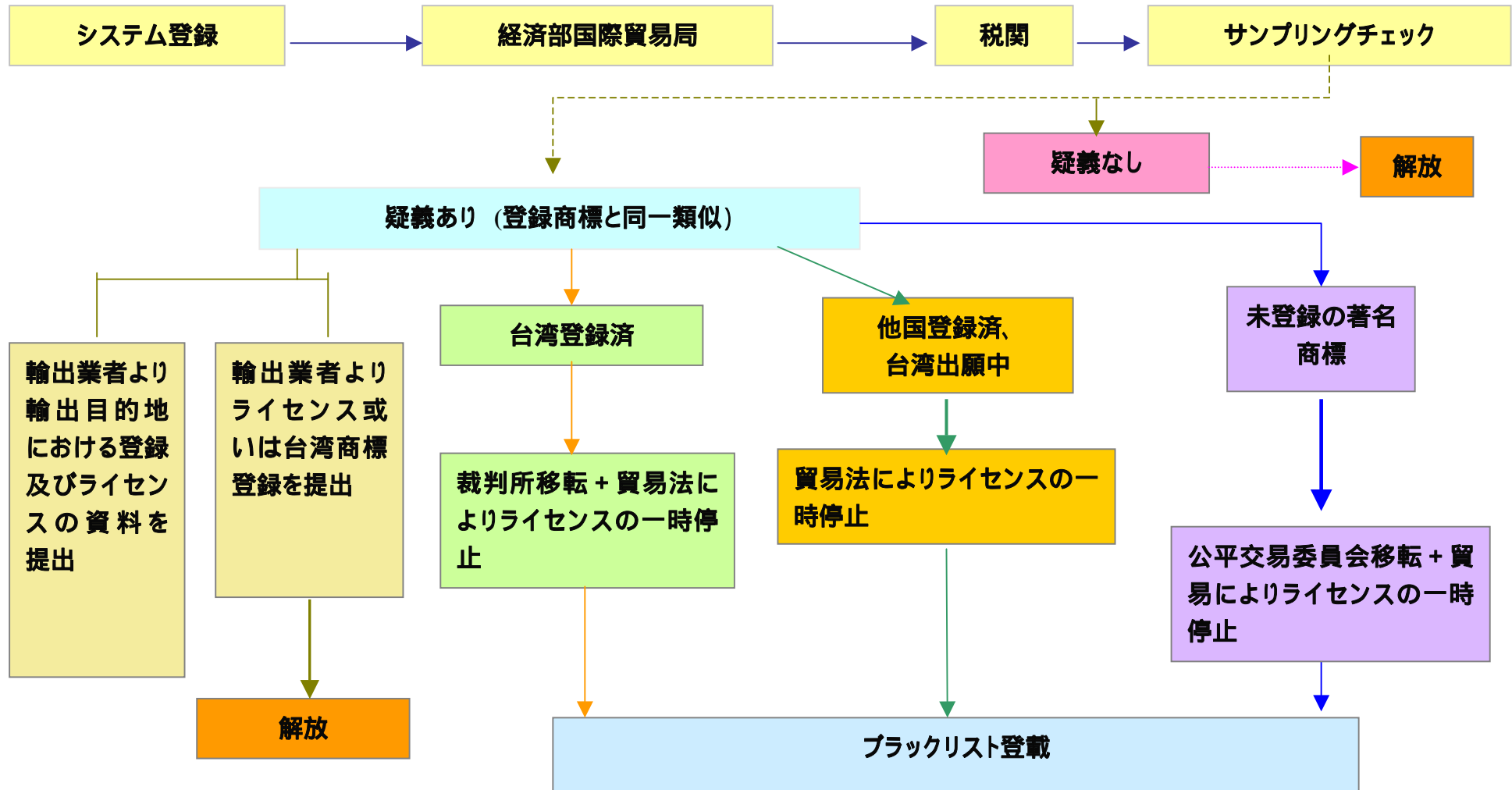
3-1 商標輸出監視制度

商標輸出監視制度により、台湾登録商標、外国で登録を受けている台湾出願中の商標、又は外国で登録を受けている著名商標について、商標権者は、台湾經濟部国際貿易局に対し一定の商品を指定した上で、登録手続きを行うことができる。このような手続きが完了した場合、商標の付されている商品 (以下「輸出商品」という) が輸出されようとする場合、台湾税関は、前記台湾經濟部国際貿易局登録済商標 (以下「登録済商標」という) の権利を侵害する疑いがあるか否かを確認するため、当該輸出商品を検査する。

輸出商品又はその包装等に登録済商標と同一又は類似の商標又は表記が表示され、且つ当該輸出商品が登録済商標に関わる指定商品と同一の類に属する場合、模倣ではないことが輸出人により証明されない限り、以下の措置が取られる。

- ・ 当該商品の輸出が差し止められる。
- ・ 事件は經濟部国際貿易局、検察署、公平交易委員会等々の機関に移送され、行政処分手続き及び刑事手続きが取られる。
- ・ 事件は商標権者又はその代理人に通知される。
- ・ 輸出人は特別な検査対象リスト (ブラックリスト) に記載され、同人に関わる輸出入品は税関で厳しくチェックされる。

3-2 商標監視システムによる商標権侵害物品輸出入差止め及び制裁の流れ



3-3 台湾經濟部国際貿易局登録に必要な書類・情報

・商標が台湾で登録されている場合

- (1) 台湾商標登録証書のコピー
- (2) 委任状（代理人による手続きの場合）
- (3) 一辺が 5cm を超えない大きさの商標見本 5 枚、及び商標の特徴、例えば外形、色彩、主要部分などを詳細に説明する書類
- (4) 台湾經濟部国際貿易局に登録しようとする商品名
- (5) 台湾經濟部国際貿易局に登録しようとする商標につきライセンシーがある場合、当該ライセンシーに関する以下の資料

会社統一番号（台湾法人の場合）

名称、住所、電話番号、ファックス番号

業種、例えば輸出業、製造業又は流通業など。

使用許諾に係わる商品

使用許諾に係わる商品の輸出目的国

使用許諾期間

・商標が外国で登録されており、台湾で出願中の場合

- (1) 外国登録証書（公証済又は認証済のもの）
- (2) 台湾商標主務官庁に提出した商標登録願書及び同機関が発行した受領書の写し
- (3) 委任状（代理人による手続きの場合）
- (4) 一辺が 5cm を超えない大きさの商標見本 5 枚、及び商標の特徴、例えば外形、色彩、主要部分などを詳細に説明する書類。
- (5) 台湾經濟部国際貿易局に登録しようとする商品名
- (6) 台湾經濟部国際貿易局に登録しようとする商標につきライセンシーがある場合、当該ライセンシーに関する以下の資料

会社統一番号（台湾法人の場合）

名称、住所、電話番号、ファックス番号

業種、例えば輸出業、製造業又は流通業など。

使用許諾に係わる商品

使用許諾に係わる商品の輸出目的国

使用許諾期間

・商標が外国で登録されており、台湾で著名商標となっている場合

- (1) 外国登録証書（公証済又は認証済のもの）
- (2) 登録しようとする商標の知名度を証明する書類
- (3) 委任状（代理人による手続きの場合）
- (4) 一辺が 5cm を超えない大きさの商標見本 5 枚、及び商標の特徴、例えば外形、色彩、主要部分などを詳細に説明する書類。
- (5) 台湾經濟部国際貿易局に登録しようとする商品名
- (6) 台湾經濟部国際貿易局に登録しようとする商標につきライセンスがある場合、当該ライセンスに関する以下の資料

会社統一番号（台湾法人の場合）

名称、住所、電話番号、ファックス番号

業種、例えば輸出業、製造業又は流通業など。

使用許諾に係わる商品

使用許諾に係わる商品の輸出目的国

使用許諾期間

3-4 台湾經濟部国際貿易局登録の留意点

商標輸出監視制度を利用して台湾經濟部国際貿易局へ登録できる商標は台湾登録商標、外国で登録を受けている台湾出願中の商標、又は外国で登録を受けている著名商標の三つの商標である。台湾經濟部国際貿易局登録の有効期間は、登録許可日から、当該台湾登録商標又は外国登録商標の商標権存続期間満了日までとなる。また、当該台湾登録商標又は外国登録商標の登録が更新された場合、証明資料を添付した上で台湾經濟部国際貿易局登録を更新することができる。なお、台湾經濟部国際貿易局登録には政府手数料が請求され、一件あたりの政府手数料は NT\$5,000 となる。一件の申請により、一つの商標で 10 グループの商品を指定することができる。グループ数が 10 を超える場合、1 グループにつき NT\$1,000 が加算される。ただし、

同一グループ内の商品である場合、その指定商品の数は制限を受けない。なお、同一グループとは、中華民国標準商品分類に掲載されている CCC コード (HS コード相当) の上六桁が同一の場合をいう。

3-5 台湾經濟部国際貿易局の処分に対する不服申立て

經濟部国際貿易局の制裁処分を受けた者は、当該処分に対し、異議を申立てて再審査を請求することができる。經濟部国際貿易局は異議申立書を受領した日の翌日から 20 日以内に再審査の決定をなさなければならない。再審査の決定を不服とする者は、再審査の決定を通知する書類を受け取った日の翌日から 30 日以内に、所定事項を記載した訴願書をもって、処分機関である經濟部国際貿易局を通じて、行政院へ訴願を提起することができる。

3-6 問い合わせ先

台湾經濟部国際貿易局(貿易服務組)
住所：台湾台北市中正區湖口街 1 號
電話：886-2-2351-0271
<http://www.trade.gov.tw/>

4. 公平交易委員会による救済措置

台湾では、取引の競争を妨害する行為を規制するため、「公平交易法」(日本の不正競争防止法に相当する)が制定されている。知的財産権侵害に関連するもので、競争を妨害する行為として、「他人の名前、商号、商標、商品の容器若しくは梱包、形態、又はその他他人の商品・役務等の表示の模倣行為」(以下当該模倣行為の目的商品を「侵害物品」という)が挙げられる。権利者は、自分の名前、商号、商標、商品の容器若しくは梱包、形態、又はその他他人の商品・役務等の表示が模倣された場合、台湾公平交易法第 20 条の違反を理由に、台湾公平交易委員会に告発状を提出し、侵害者による侵害商品の販売・製造、運送、輸出又は輸入手続を禁ずる行政措置を請求することができる。公平交易委員会による決定は行政処分に該当するので、訴訟判決と異なり、決定が下されると、不服があっても、執行力がすぐに生じる。

4-1 告発手続き

何人も「他人の名前、商号、商標、商品の容器若しくは梱包、形態、又はその他

他人の商品・役務等の表示の模倣行為」があると判断した場合、これを調査するよう公平交易委員会に書面で告発することができる。

4-2 公平交易法違反の効果

(1) 行政処分 是正、過料、解散、営業停止又は休業命令

公平交易委員会は、「他人の名前、商号、商標、商品の容器若しくは梱包、形態、又はその他他人の商品・役務等の表示の模倣行為」があると認定した場合、同委員会は期限を定めて当該行為の停止、改正又は必要な是正措置を採るよう命じるとともに、5 万台湾元以上 2 千 5 百万台湾元以下の過料に処することができる。指定した期限を過ぎても、当該違反行為が停止、改正されず又は必要な是正措置が採られない場合、引続き期限を定め、当該行為の停止、改正又は必要な是正措置を採るよう命じ、当該行為を停止、改正、又は必要な是正措置が採られるまで回数に照らして 10 万台湾元以上、5 千万台湾元以下の過料を連続して科すことができる。

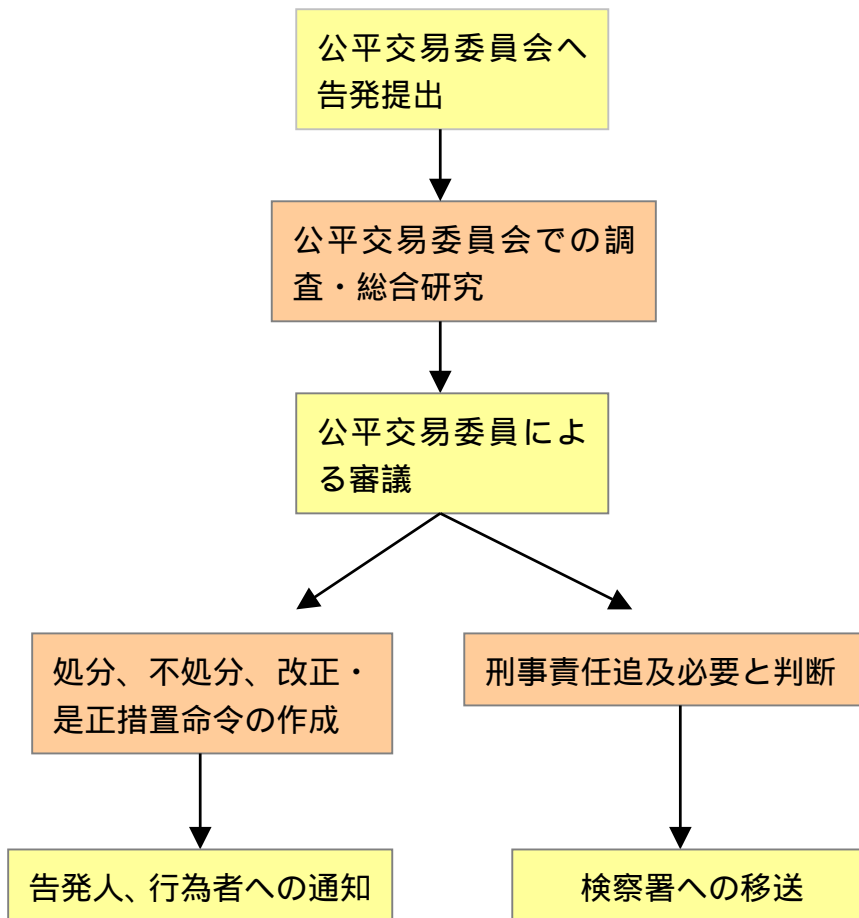
(2) 刑事処分

公平交易委員会が前記の期限を定めて、その違法行為の停止、改善、又は必要な更正措置を採るよう命じたにもかかわらず、指定された期限を過ぎても当該違反行為が停止、改善されず又は必要な更正措置が採られない場合、又は一旦停止後再び同様又は類似の違法行為がなされた場合、当該行為者は 3 年以下の懲役、拘留又は 1 億台湾元以下の罰金又はその併科に処する。

4-3 公平交易委員会による行政処分に対する不服申立て

公平交易委員会による是正、過料の処分を不服とする者は、公平交易委員会より行政処分を通知する書類を受け取った日の翌日から 30 日以内に、所定事項を記載した訴願書をもって、処分機関である公平交易委員会を通じて、行政院へ訴願を提起することができる。

4-4 公平交易委員会による調査のフローチャート



4-5 問い合わせ先

公平交易委員会

台湾台北市中正區濟南路 1 段 2 之 2 號 12 樓

電話：886-2-2351-7588

<http://www.ftc.gov.tw/>

第 2 章 模倣に対する民事的救済

1. 関連法律

知的財産権の侵害に対する民事的救済について、台湾においては通常の民事訴訟であると認められ、民事訴訟の一般原則が適用される。したがって、実体的な内容に関しては、専利法、商標法、民法などの法律に規定されているが、訴訟手続きに関しては、民事訴訟法及び同施行法などに規定されている。

2. 民事訴訟の対象となる侵害行為

2-1 専利権の侵害

専利侵害とは、専利権者の同意を得ずに、当該物品を製造、販売、使用又は輸入すること、又は当該方法をもって直接製造した物品を製造、販売、使用又は輸入することである。台湾専利法においてはアメリカ、ドイツ、日本とは異なり「直接侵害」と「間接侵害」に分けておらず、専利法第二章第七節の規定及び民法の損害賠償に関する規定によって侵害行為を定義する。以下は、通説の専利侵害判断方法及び専利侵害態様について説明する。

(1) 専利侵害判断方法

まず、対象となる物品専利又は方法専利の権利範囲を文言の解釈で特定する。次に、専利侵害判断理論である「全要件原則」と「均等論」によって、専利侵害として訴えられた物品又は方法と前述の特定された専利権範囲とを比較し、係争物品又は方法が前述の特定された専利権範囲に入れば、専利侵害を構成し、入らなければ、専利侵害を構成しないとする。

「全要件原則」とは、当該専利の構成要件的特徴を全てそのまま使用する場合、専利侵害を構成することをいう。

「均等論」とは、当該専利の構成要件的特徴の全部を使用するのではなく、ある要素が抜けていたり、付け加えられていたりするものの、当該専利の核心的特徴をそのまま使用して実質的に同一なものと評価される場合、専利侵害を構成することをいう。

(2) 専利侵害態様

専利直接侵害：第三者が専利権者の同意を得ずに、当該物品を製造、販売、使用又は輸入すること、又は当該方法をもって直接製造した物品を製造、販売、使用又は輸入することは、専利直接侵害を構成する。専利法第 84 条第 1 項の規定は、専利直接侵害の態様である。

専利誘引侵害：第三者が自ら当該物品を製造、販売、使用又は輸入すること、

又は当該方法をもって直接製造した物品を製造、販売、使用又は輸入することはしないが、専利直接侵害者を積極的に誘引することは専利誘引侵害を構成する。ただし、これは専利直接侵害が成立することを前提とする。専利法においては、この侵害態様を特に規定しておらず、実務上、民法第 185 条の「共同侵権行為」によって侵害者の責任を問う。

専利協助侵害：第三者が専利権者の許可を得ず、その物の重要な部品又は専用設備を製造、販売することは、専利協助侵害を構成する。ただし、これも専利誘引侵害の場合と同様に、専利直接侵害が成立することを前提とする。専利法においては、この侵害態様を特に規定しておらず、実務上、民法第 185 条の「共同侵権行為」によって侵害者の責任を問う。

2-2 商標権の侵害

商標法第 29 条第 2 項の規定により、下記に掲げる情況につき商標権者の同意を得なければ、商標権侵害を構成する。

(1) 同一領域での侵害

同一の商品又は役務において、その登録商標と同一の商標を使用する場合。

類似の商品又は役務において、その登録商標と同一の商標を使用することにより、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。

(2) 類似領域での侵害

同一又は類似の商品又は役務において、その登録商標と類似の商標を使用することにより、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。また、商標法第 62 条により、商標権者の同意を得ずに、次のいずれかの情況を有する場合、商標権の侵害と見なす。

他人の著名な登録商標であることを明らかに知りながら、同一又は類似の商標を使用し、又は当該著名商標中の文字を自己の会社名称、商号名称、ドメインネーム、或はその他の営業主体又は供給元を表彰する標識とし、著名商標の識別性又は信用を損なう場合。

他人の登録商標であることを明らかに知りながら、当該商標中の文字を自己の会社名称、商号名称、ドメインネーム、或いはその他の営業主体又は供給元を表彰する標識とし、商品又は役務に関連する消費者に混同誤認を生じさせる場合。

商標権侵害の例外

次に掲げる情況においては、商標法第 30 条の規定により、他人の商標権の効力による拘束を受けない。

善意且つ合理的に使用する方法で、自己の氏名、名称又はその商品又は役務の名称、形状、品質、用途、産地又はその他商品又は役務自体に関する説明を表示し、商標として使用しない場合。

商品又は包装の立体形状が、その機能を確保するために必要である場合。

他人の商標の登録出願日前に、善意で同一又は類似の商標を同一又は類似の商品又は役務に使用する場合。ただし、これは原使用の商品又は役務に限る。その場合、商標権者は、当該商標を使用する者に対して、適当な区別表示の付記を要求することができる。

2-3 不正競争行為の場合

(1) 商品主体、営業主体の混同行為；著名商標の使用行為

公平取引法第 20 条の規定により、事業者は、その営業上提供する商品又は役務につき、次に掲げる行為をしてはならない。

関連事業又は消費者に一般的に認識されている他人の氏名、商号又は会社の名称、商標、商品容器、包装、外観又はその他他人の商品を示す表示と同一又は類似するものを使用し、それをもって他人の商品と混同を生じさせること、又は当該表示を使用する商品を販売、運送、輸出或いは輸入すること。

関連事業又は消費者に一般的に認識されている他人の氏名、商号又は会社の名称、標章又はその他他人の営業、役務を示す表示と同一又は類似するものを使用し、それをもって他人の営業又は役務の施設又は活動と混同を生じさせること。

同一又は類似の商品について、未登録の外国の著名な商標と同一又は類似するものを使用すること、又は当該商標を使用する商品を販売、運送、輸出又は輸入すること。

前項の規定は、次の各号に掲げる行為に適用しない。

通常の使用方法で、商品自体の慣用名称又は取引上同類の商品の慣用表徴を使用すること、又は当該名称又は表徴を使用する商品を販売、運送、輸出又は輸入すること。

通常の使用方法で、取引において同種の営業又は役務の慣用名称その他表徴を使用すること。

善意で自己の氏名を使用すること、又は当該氏名を使用する商品を販売、運送、輸出又は輸入すること。

前項第 1 号又は第 2 号に定める表徴が関連事業又は消費者に一般的に認識される前に、善意でそれと同一又は類似するものを使用し、又は善意で当該表徴を使用する者からその営業とともに当該表徴を譲り受けて使用し、又は当該表徴を使用する商品を販売、運送、輸出又は輸入すること。

事業者は、他の事業者が前項第 3 号又は第 4 号の行為により、自己の営業、商品、施設又は活動が損害を受け、又は混同を生じるおそれがある場合は、他の事業者に対し、適当な表示を付すよう請求することができる。ただし、これは商品の運送しか行わない事業者には適用しない。

(2) 営業秘密侵害行為

公平取引法第 19 条第 6 号の規定により、脅迫、不当な誘引その他不正な方法をもって、他の事業者の生産販売上の秘密、取引相手の資料その他関連技術上の秘密を取得する行為で、それが競争を制限又は公正な競争を阻害するおそれがある場合は、事業者はこれをしてはならない。

(3) 不当ドメインネーム登録行為などの禁止

台湾の実務では不当ドメインネーム登録行為に関して、他人の著名商標或いは著名表記をもってドメインネームに登録する場合、公平取引法第 20 条及び第 24 条「本法にある規定以外にも、事業者はその他取り引きの秩序に影響を与えるに足る欺瞞的な又は著しく公正を欠く行為をしてはならない。」という規定に違反すると思われる。

3. 侵害に対する救済の種類及び内容

専利権、商標権の侵害、不正競争行為がある場合、その侵害者に対する権利としては、侵害の差止請求権と損害賠償請求権が最も重要である。なお、公平取引法第 20 条第 3 項の規定によると、他の事業者が公平取引法第 20 条第 2 項の第 3 号又は第 4 号の行為により、自己の営業、商品、施設又は活動が損害を受け、又は混同を生じるおそれがある場合は、他の事業者に対し、適当な表示を付すよう請求することができる。

3-1 侵害の差止請求権

侵害の排除を請求すること、また侵害のおそれがある場合、その防止を請求することができる権利をいう。

3-2 損害賠償請求権

故意又は過失により不法に他人の権利を侵害した場合、被侵害者は侵害者に対し、損害の賠償を請求することができる権利をいう。

3-3 不当得利返還請求権

民法第 179 条により、法律上の原因がなくて利益を受け、これがために他人に損害を及ぼしたときは、その利益を返還しなければならない。専利法に明文の規定はないが、理論上専利権者が不当得利返還請求権を有することは認められる。

3-4 信用回復請求権

専利法第 84 条第 4 項により、発明者は氏名表示権が侵害された場合、発明者の氏名表示又はその他名誉回復のために必要な処分を請求することができる。

4. 請求権発生の要件

4-1 専利・商標の場合

(1) 侵害の差止請求権

専利権・商標権は無体財産権或いは準物権であると認められ、それら権利に属する「排他性」という性質によって、専利・商標を侵害され、又は侵害のおそれがある場合、同請求権を行使することができる。つまり、侵害があった場合は、同請求権をもって侵害者に対し侵害行為の停止を請求することができる。実際の侵害ではなく、侵害のおそれがある場合、侵害のおそれのある客観的な事実があれば、侵害防止請求権を主張することができる。ちなみに、侵害の差止請求権の主張は、侵害者の故意又は過失を前提とせず、権利侵害又は侵害のおそれがあれば足りる。

(2) 損害賠償請求権

民法侵権行為の一般原理により、以下の要件を要する。

侵害行為

行為の違法性

違法な侵害による損害

侵害行為と損害発生との因果関係

侵害者の故意・過失

侵害者の責任能力

4-2 不正競争行為の場合

(1) 侵害の差止請求権

公平取引法第 30 条の規定により、事業者が本法の規定に違反し他人の権益を侵害するに致った場合は、被害者はその侵害の排除を請求することができる。侵害のおそれがある場合も侵害の予防を請求することができる。したがって、

専利・商標の場合と同様に、侵害があった場合、侵害者に対し侵害行為の停止を請求することができる。実際の侵害ではなく、侵害のおそれがある場合も、侵害のおそれのある客観的な事実があれば、侵害防止請求権を主張することができる。また、その侵害の排除・防止請求権の主張は、侵害者の故意又は過失を前提とせず、権利侵害又は侵害のおそれがあれば足りる。

(2) 損害賠償請求権

公平取引法第 30 条の規定により、事業者が本法の規定に違反し他人の権益を侵害するに致った場合は、損害賠償の責任を負う。同規定に鑑み、損害賠償請求権が発生する要件については、民法侵權行為の一般原理を適用する。上記の 4-1.(2) を参照。

(3) 適当な表示の請求権

公平取引法第 20 条第 3 項の規定により、事業者は、他の事業者の公平取引法第 20 条第 2 項の第 3 号又は第 4 号の行為により、自己の営業、商品、施設又は活動が損害を受け、又は混同を生じるおそれがある場合は、他の事業者に対し、適当な表示を付するよう請求することができる。

5.当事者適格

5-1 専利権に基づく場合

(1) 専利権者

発明者は、専利を出願し、査定公告された後、発明専利証書を受領し専利権を取得して、専利権者となる。専利権者は専利権が侵害される場合、損害賠償の請求、侵害排除の請求、又は侵害するおそれのある者に対し、その侵害防止の請求を行うことができる。

(2) 独占的通常実施権の許諾

独占的通常実施権(exclusive license)とは、専利権者が一定の時間及び領域内において、ライセンスを受けた者にのみ許諾する特定の専利を実施する権利をいう。専利権者は前述した特定の時間又は領域内でライセンシー以外の第三者に当該専利の独占的通常実施権を許諾することができず、自らも当該専利権の実施ができない。契約で別途規定がある場合を除き、独占的通常実施権者は専利権が侵害される場合、損害賠償の請求、侵害排除の請求、侵害するおそれのある者に対し、その侵害防止の請求を行うことができる。

(3) 非独占的通常実施権

非独占的通常実施権(non-exclusive license)とは、専利権者が一定の領域、期間内において、同一の専利又は製品を二人以上のライセンスを受ける者に実施権を許諾することができるほか、自らも当該専利権を実施することができる権利をいう。台湾の専利実施権の許諾に関する現行実務においては、かかる非独占的通常実施権がよく見られる。

5-2 商標権に基づく場合

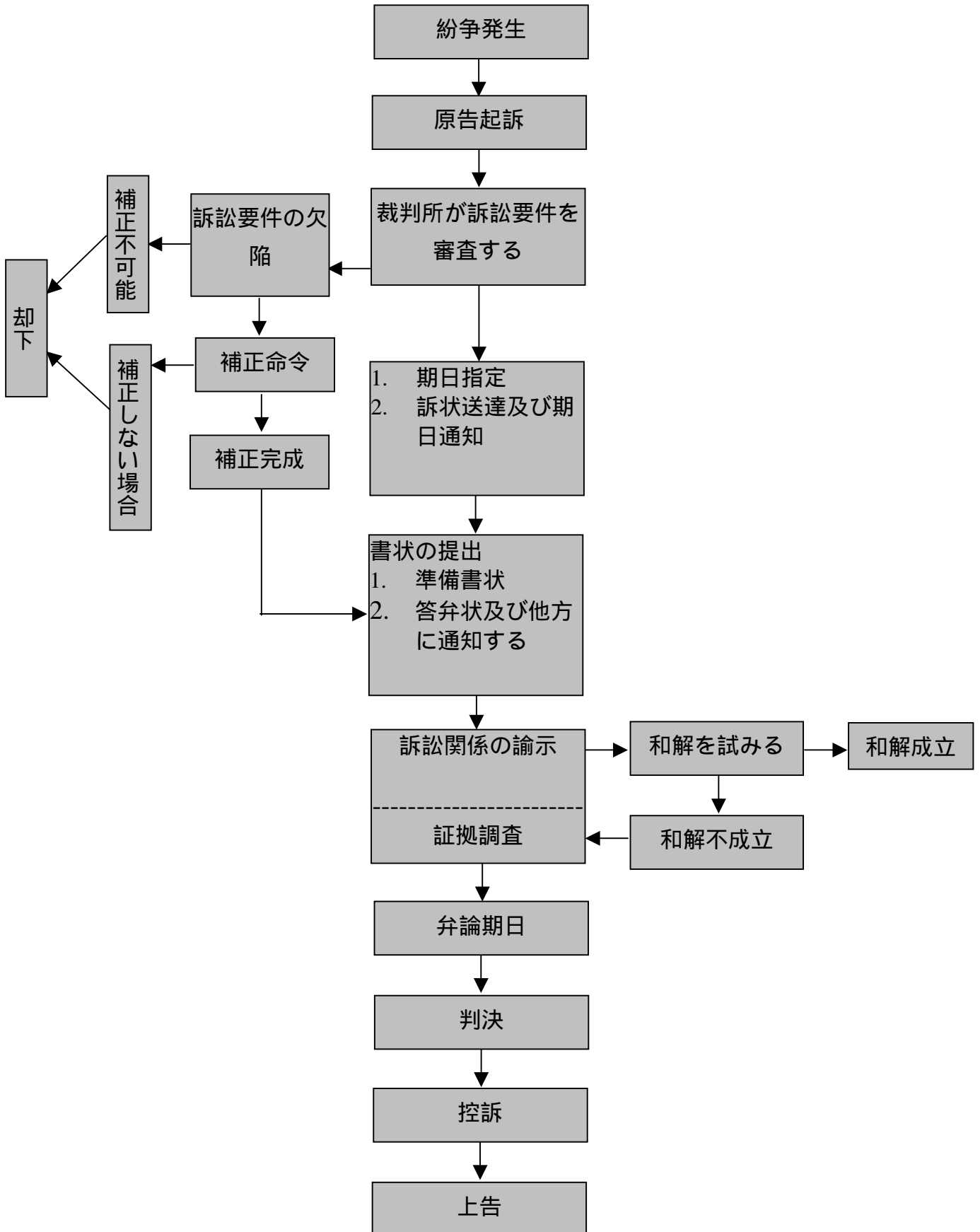
商標権を取得すれば、商標権者として侵害の排除・防止などを請求できる。第三者に商標の使用を許諾し、商標主務機関（知的財産局）に登録する場合、第三者は侵害の排除・防止などを請求できる。台湾には通常使用権と専用使用権の区別はない。

5-3 不正競争行為の場合

公平取引法第 30 条、第 31 条により、他人に侵害差止請求権及び損害賠償請求権を主張できるのは、他人が商品・役務の表徴を模倣し、権利の侵害があった場合、或いは権利の侵害のおそれがあった場合に限られる。つまり、その被害者は当該商品・役務の表徴の権利者に限られる。また、一般消費者については、公平取引法により、侵害の差止請求権及び損害賠償請求権を主張することができない。

6. 訴訟手続の概要

6-1 訴訟手続のフローチャート



6-2 裁判所に提出すべき書類

- (1) 訴状（判決を請求する事項、主張及び証拠を明記しなければならない。）
- (2) 訴訟代理人を委任した場合、委任状を提出しなければならない。その委任状には、会社印と代表者印を押捺する必要がある。また、外国法人の場合、委任状は公証或いは認証を受ける必要がある。

6-3 訴訟費用

- (1) 第一審訴訟費用：請求する訴訟標的の金額が 10 万台湾元以下であれば、訴訟費用は 1000 台湾元とする。10 万台湾元より多く 100 万台湾元以下の場合、訴訟費用は訴訟標的の金額の 1% とする。100 万台湾元より多く 1000 万台湾元以下の場合、訴訟費用は訴訟標的の金額の 0.9% とする。1000 万台湾元より多く 1 億台湾元以下の場合、訴訟費用は訴訟標的の金額の 0.8% とする。1 億台湾元より多く 10 億台湾元以下の場合、訴訟費用は訴訟標的の金額の 0.7% とする。10 億台湾元より多い場合、訴訟費用は訴訟標的の金額の 0.6% とする。
- (2) 第二審及び第三審の訴訟費用：上記第一審の計算基準に基づき、これに裁判費用の 50% を追加徴収する。

7. 提訴管轄

民事訴訟法の規定

知的財産権に関する訴訟は管轄裁判所に提起しなければならないが、その事物管轄は地方裁判所であり、どの地方裁判所に提起するかを定める土地管轄は、被告の所在地・法人の所在地（民事訴訟法第 1、2 条）のほか、特別審判籍として事務所・営業所在地、侵権行為地がある。また、被告が複数人である場合で、その住所が同一裁判所の管轄区域内にないときは、各住所地の裁判所がいずれも管轄権を有する。以下に、管轄権に関する民事訴訟法の規定を説明する。

- A. 訴訟は、被告の住所地の裁判所が管轄する。被告の住所地の裁判所が職権を行使することができないときは、その居所地の裁判所が管轄する。訴訟の原因事実が被告の居所地に発生したときは、その居所地の裁判所が管轄する。（民事訴訟法第 1 条第 1 項）
- B. 私法人その他訴訟当事者となることができる団体に対する訴訟は、その主たる事務所、又は主たる営業所の所在地の裁判所が管轄する（民事訴訟法第 2 条第 2 項）。

- C. 外国法人その他訴訟当事者となることができる団体に対する訴訟は、その中華民国にある主たる事務所、又は主たる営業所の所在地の裁判所が管轄する（民事訴訟法第 2 条第 3 項）。
- D. 事務所又は営業所を有する者に対して、その事務所又は営業所に関して訴訟をするときは、その事務所又は営業所の所在地の裁判所が管轄する。（民事訴訟法第 6 条）
- E. 不法行為に関して訴訟を提起するときは、行為地の裁判所が管轄することができる。（民事訴訟法第 15 条第 1 項）
- F. 共同訴訟の被告が複数人であり、その住所が同一裁判所の管轄区域内にないときは、各住所地の裁判所がいずれも管轄権を有する。ただし、第 4 条乃至前条により共同の管轄裁判所を定めているときは、その裁判所が管轄する。

8.主張・立証

8-1 専利権侵害訴訟等の場合

専利権とは、法律で規定する一定の期間内に専利権者が賦与される排他的効力を有する権利を言い、法律で別途規定のある場合を除き、他人が専利権者の同意を得ずに、当該専利物品の製造、販売、販売の申し出、使用、若しくは輸入すること、又は専利方法を使用することを専利権侵害と見なし排除することができる。専利権が侵害される場合、専利権者及び独占的通常実施権者は、損害賠償の請求、侵害排除の請求、又は侵害するおそれのある者に対し、その侵害防止の請求を行うことができる。専利権者及び独占的通常実施権者が前述した請求を行う場合、専利権を侵害する物品又は侵害するための原料、道具の廃棄又は他の必要な処置の請求を行うことができる。

(1) 専利権侵害の鑑定

知的財産の主務官庁が公布した専利権侵害鑑定要点によると、専利権侵害の鑑定の流れは次の二段階に分かれる：1) 専利請求の範囲を解釈する、及び 2) 解釈を経た専利請求の範囲と鑑定対象を比較する、である。解釈を経た専利請求の範囲と鑑定対象とを比較することは、1) 専利請求の範囲の技術特徴を解析する、及び 2) 鑑定対象の技術内容を解析する、ことが含まれる。実務上、専利権者はしばしば、専利権侵害要点に従い鑑定を行った専利権侵害鑑定報告を提出し、専利権侵害製品の技術特徴が専利物品の専利権範囲内に入ることを証明することを行う。

(2) 専利権侵害の証明

専利権侵害を証明するためには、専利権者が以下の事項について立証しなければならない：

係争専利権が有効であること。

専利権侵害者が確かに権利の侵害行為を行った事実。

専利権侵害者の故意又は過失。

したがって、専利権者又は独占的通常実施権者が前述の請求を行う場合、専利証書を提出し、専利製品又は専利方法が如何なる時間、場所、方法によって、製造、販売、販売の申し出、使用、若しくは輸入されるかについて、証拠を提出してはじめて専利侵害を証明することができる。

(3) 損害賠償の範囲

損害額の想定及び算定

専利権者が損害賠償を請求する場合、受けた損害及び失った利益の賠償を請求することができる。しかし、証拠又は方法を提供してその損害を証明することができない場合、専利権者は専利権の実施により通常に取得できる利益から、損害を受けた後に同一専利権を実施して得た利益を差し引き、その差額を損害金額とすることができる。また、専利権者は専利権侵害者が侵害行為により得た利益を選択することもできる。専利権侵害者がそのコスト又は必要な費用を立証できない場合は、当該物品を販売した全収入をもって、得た利益とする。

専利権者の精神的な損失及びその賠償

専利権者の業務上の信用及び名誉が権利侵害者の侵害により損害される場合、別途それに相当する金額の賠償を請求することができる。

損害賠償額の算定

権利侵害者の権利侵害行為が故意である場合、裁判所がその侵害状況に基づき、損害額以上の賠償を裁定することができるが、実損害額の三倍を超えることはできない。

(4) 文書の提出義務

文書の提出に関する規定

民事訴訟法により、当事者は下記の各文書を提出する義務を負う：

- a. 当事者が訴訟手続きにおいて引用したもの。
- b. 他方当事者が法律に従い、交付又は閲覧を請求できるもの。
- c. 他方当事者の利益のために作成したもの。
- d. 商業帳簿
- e. 本件訴訟に係る事項のために作成したもの

専利権者は、自らが請求を希望する書証、例えば、権利侵害者が所持する文書を権利侵害者が提出するよう裁判所に請求することができる。証明される事実の重要性、及び専利権者の請求が正当であると裁判所が認める場合、権利侵害者に対し文書を提出するよう裁定しなければならない。実務上、裁判所が損害賠償金額を計算する場合は、権利侵害者に対し、それに係る商業帳簿の提出を命じ、専利権侵害製品の販売により得た利益を証明するよう求め

ることがよく行われる。

文書の提出命令に従わないことの法律的效果

2007年1月7日に可決された知的財産案件審理法の規定によると、文書を所持する者が正当な理由なしに裁判所の文書提出命令に従わない場合、裁判所は適正な裁判を行うことに協力させるため、当事者に対し新台幣元3万元以下の過料を課することができ、必要に応じ強制処分を裁定することもできる。

8-2 商標権侵害訴訟の場合

(1) 一般の損害賠償

商標法第61条により、商標権者は、その商標権を侵害した者に対し、損害賠償及びその侵害の排除を請求することができる。侵害のおそれがある場合、侵害の防止を請求することができる。商標権侵害に対する最も有効な救済手段は、侵害の差止請求権の行使である。そして、商標権侵害行為に有効適切に対応するには、まず民事訴訟法に基づく仮処分申請を提出することが考えられる。仮処分については、本章の11-1を参照。なお、商標法第70条により、外国法人又は団体は認可・許可を受けた者に限らず、本法に規定される事項について、告訴、自訴又は民事訴訟を提起することができる。

また、損害賠償の計算については、商標法第63条により、次の三つの方法のうち一つを選んでその損害を算定することができる。

- A. 民法第216条の規定による。但し、その損害を証明するための証拠、方法を提出することができない場合、商標権者は、その登録商標を使用することによって通常得られる利益から、侵害された後、同一商標の使用によって得た利益を控除した差額を、その受けた損害とすることができる。
- B. 商標権侵害者とその侵害行為によって得た利益による。商標権侵害者とそのコスト又は必要経費について立証できない場合は、当該商品を販売して得た収入の全部を侵害者の受けた利益とする。
- C. 押収した商標権侵害に係る商品の小売り単価の500倍から1500倍までの金額による。但し、押収した商品が1500個を超える場合は、その総額を賠償額とする。

前項の賠償額が明らかに不適切である場合、裁判所はこれを減額することができる。

(2) 業務上信用の損害賠償

商標法第63条第3項により、商標権者の業務上の信用が侵害によって損なわれた場合、相当する金額の賠償を別途請求することができる。

(3) 新聞での判決内容の掲載

商標法第 64 条により、商標権者は、商標権侵害者の費用負担で、商標権侵害の事実に係る判決書の内容の全部又は一部を新聞に掲載することができる。

8-3 不正競争行為侵害訴訟等の場合

(1) 一般の損害賠償

公平取引法第 30 条により、事業者が本法の規定に違反し他人の権益を侵害するに致った場合は、被害者はその侵害の排除を請求することができる。侵害のおそれがある場合も侵害の予防を請求することができる。その侵害の排除・防止請求権の行使については、本章の 11-1 を参照。

公平取引法第 31 条により、事業者が同法の規定に違反し他人の権益を侵害するに致った場合は、損害賠償の責任を負う。公平取引法第 32 条により、裁判所は被害者からの請求に対して、事業者の行為が故意によるものと認める場合は、侵害の状況により、実際に被った損害額以上の賠償を定めることができる。但し、その額は証明された損害額の 3 倍を超えることはできない。侵害者がその侵害行為から利益を得た場合は、被害者は、当該利益に基づく損害額の算定を請求することができる。

(2) 新聞への判決内容の掲載

公平取引法第 34 条により、被害者は同法の規定により裁判所に訴訟を提起する際、侵害者の費用負担で判決書の内容を新聞に掲載するよう請求することができる。

9. 判決

9-1 判決手続

判決は、言渡し（口頭弁論を経たもの）又は公告（口頭弁論を経ないもの）によって対外的に成立し、効力が発生する。言渡し期日は原則として弁論終結の時から 2 週間以内指定される。

9-2 判決の効力

判決の効力は、当事者の他、訴訟係属後当事者の承継人となった者及び当事者又はその承継人のために請求の目的物を占有する者に対しても効力を有する。他人のため原告又は被告となった者に対する確定判決は、その他人に対しても効力を有する（民事訴訟法第 401 条）。

9-3 判決の執行

判決が確定したときは、給付判決としての執行力を持つ。確定前であっても、判決主文に仮執行の宣言が付されたときは、その判決は執行力を持つ。判決がどのような執行力を持つかは、判決主文の内容によって決まる。

損害賠償請求を認容する判決が確定したときは、その執行は、金銭の支払いを目的とする金銭請求権についての強制執行（強制執行法第二章の規定）による。差止請求権の行使としてなされた不作為（例えば、特定の物を製造しない）を求める訴訟における請求認容の判決が確定した場合、その執行方法は、不作為を目的とする不作為請求権の執行方法による（強制執行法第 129 条）。

10. 上訴

10-1 上訴裁判所の連絡先及び所在地

台湾高等裁判所 住所 臺北市重慶南路一段一二四號
電話 (02)2371-3261

最高裁判所 住所 臺北市長沙街一段六號
電話 (02)2314-1160

10-2 上訴の要件

判決に不服の当事者は、地方裁判所のした終局判決に対しては高等裁判所に対する控訴、さらに控訴審判決に対しては最高裁判所に対する上告によってこれを争うことができる。（民事訴訟法第 437、464 条）

控訴と上告の場合には、判決正本の送達を受けてから 20 日の不変期間内に、上訴の提起をしなければならない。ただし、一審判決言渡し後送達前の上訴も効力を有する。（民事訴訟法第 440、481 条）

控訴審においては、原判決の事実認定及び法律判断のいずれも争うことができ、その審理は続審主義による。最高裁判所に対する上告は、原判決の法律判断のみを争うもので、法令に違背することを理由とするものでなければ、これを行なうことができない。また、財産権について上訴した第二審判決に対しては、上告によって受ける利益が台湾ドル 150 万元を超えないときは、上告することができない。（民事訴訟法第 466 条）。ちなみに、改正民訴法により、当事者双方が通常審判手続きを経た第一審の終局判決に対して、第一審裁判所の認定した事実が間違っていないと認める場合、双方合意の上で、最高裁判所に対し上告することができる（民事訴訟法第 466-4 条）。

11. 保全処分

11-1 侵害差止め仮処分

前述のとおり、侵害差止め仮処分は知的財産権侵害に対する最も有効な救済手段である。知的財産権侵害を理由とする仮処分は、知的財産権侵害行為がなされ、あるいはなされるおそれがある場合に、知的財産権の権利者が自己の権利を侵害行為から守るために行なわれるものである。特に、侵害者が権利者の商品を製造・販売していた場合、差止めを命ずる仮処分命令を得て、侵害者の侵害行為を暫定的に差し止める法律状態を形成することができる。また、2003年の民事訴訟法の改正により、暫定状態を定める仮処分も認められるようになった。これも一般に、知的財産権が侵害されると主張する権利者が侵害容疑者に対し、侵害行為を差し止めることを目的とする仮処分の根拠となっている。理論上、仮処分と暫定状態を定める仮処分とは区別があるものの、裁判所の実務においては、仮処分と暫定状態を定める仮処分を区別せず、申請者の申請内容によって裁定する。仮処分命令の管轄裁判所は、本案の管轄裁判所又は仮処分係争物の所在地裁判所である（民事訴訟法第533条）。

仮処分に関する法条：債権者が金銭の請求以外の請求について強制執行を保全することを望むときは、仮処分を申し立てることができる。仮処分は、請求の目的の現状の変更によって将来強制執行をすることができないおそれ、又は執行が困難となるおそれがある場合でなければ、これを行うことができない（民事訴訟法第532条）。

暫定状態を定める仮処分の法条：紛争にかかる法律関係において、重大な損害を防ぐため、又は緊急な危険を回避するために、又はその他類似の状況がある場合、暫定状態を定める仮処分を請求することができる。これは本案訴訟で紛争にかかる法律関係を確定できる事案に限られる。（民事訴訟法第538条）。

(1) 要件

A 被保全権利があること

知的財産権の侵害行為を差し止める旨の仮処分、又は暫定状態を定める仮処分を請求する場合、専利権又はその他の権利が存在していることを示す必要がある。

B 仮処分の必要性があること

民事訴訟法第532条により、仮処分の必要性は、係争物に関する仮処分については「請求対象の現状が変更され、後日強制執行ができないか、又は執行が難しいおそれがあるとき」と規定され、暫定状態を定める仮処分については、民事訴訟法第538条により、「争いがある法律関係について債権者に生ずる重大な損害又は緊急な危険を避けるためにこれを必要とするとき」と規定している。その必要性については、例えば侵害者が模倣品の販売を始め、権利者の売上高が減る場合は保全の必要性があると判断され、また模倣品があつて権利者の信用が毀損された場合も保全の必要性があると見なされる。

(2) 担保金

一般的に仮処分命令を発するとき、一定の保証金を供託するよう求められる場合が多い。裁判所が許可した仮処分についての裁定には、義務者の関連商品の製造・販売を差し止めることができる旨の記載のほか、権利者が提供すべき担保金の金額も含まれる。担保金の数額については、債権者の提示した金額と債務者が被る予想損害の金額によって決まる。

(3) 審理

仮処分の審理方式は、原則として口頭弁論を経ず、書面審理で行なう。ただし、暫定状態を定める仮処分の申請に関しては、裁判所は仮処分の正当性について判断をするため、必要に応じて当事者双方に陳述の機会を与えることができる（民事訴訟法第 538 条第 4 項）。

(4) 証明（疎明）

仮処分においては、証明の程度は疎明で足りる（民事訴訟法第 526 条を準用）。疎明とは、ある事実の存在又は不存在について、裁判官が一応確からしいという心証を得ることをいう。

(5) 仮処分の執行

一定行為を禁止する不作為を命ずる仮処分命令は、債務者に送達しなければならない。また、強制執行法第 132 条により、債権者が仮処分裁定を受けてから 30 日以内に強制執行の申立てをしなければ、執行することが出来なくなる。

11-2 仮差押

仮差押とは、金銭の請求又は金銭の請求に代えることができる請求について強制執行を保全するため、強制執行の対象となる債務者の所有財産の現状そのままを維持することを目的とする保全処分である。なお、仮差押の対象は原則として債務者の現存財産に限られるが、専利法第 86 条により、他人の発明専利権を侵害する行為に用いた物、又は当該侵害行為により生じた物は、侵害された者の請求により、仮差押を行い、賠償の判決後、賠償金の全部又は一部に充当することができる。つまり、その規定により、仮差押の対象は債務者の現存財産に限られず、専利権を侵害する行為に用いた物、又は当該侵害行為により生じた物に及ぶ。仮差押命令の管轄裁判所については、本案の管轄裁判所又は仮差押係争物の所在地裁判所である（民事訴訟法第 524 条）。

仮差押に関する法条：債権者が金銭の請求又は金銭の請求に代えることができる請求について強制執行を保全しようとするときは、仮差押を申立てることができる。前項の申立ては、条件或いは期限を付ける請求についても行うことができる（民事訴訟

法第 522 条)。

(1) 要件

A 強制執行を保全する対象は、金銭の請求又は金銭の請求に代えることができる請求である。

B 仮処分の必要性があること

民事訴訟法第 523 条により、仮処分の必要性については、「将来強制執行をすることができなくなるおそれ、または執行が困難となるおそれがあるとき」と規定されている。

(2) 担保金

民事訴訟法第 526 条第 1 項により、請求及び仮差押の原因は疎明しなければならない。ただし、それに関する事実の疎明については、事実上困難であるため、実務においては、民事訴訟法第 526 条第 2 項により、債権者が提出する担保金によって仮差押の裁定を作成する。また、担保金の金額は原則として申立て対象の金額の三分の一を基準とする。担保に供するものは現金のほか、裁判所の許可のもと、有価証券或いは定期預金をもって現金に換えることができる。

(3) 仮差押命令の手続き

A 被告の財産状況の調査

B 仮差押申立書を管轄裁判所又は仮差押係争物の所在地裁判所に提出

C 裁判所は原告の主張と疎明に基づいて審理する

D 仮差押裁定の決定

E 仮差押の執行

(4) 仮差押の執行

裁判所は仮差押裁定を債務者に送達しない。強制執行法第 132 条により、債権者が仮差押裁定を受けてから 30 日以内に強制執行の申立てをしなければ、執行することが出来なくなる。

11-3 債務者が保全処分に反する行為をした場合

不動産に対する仮処分或いは仮差押が裁判所の職権で登記機関に通知し登記されると、他人がこれを処分した場合、債権者に対抗することができない。

執行官が保全処分の対象物に保全処分の表示を行った場合、債務者がその表示を損害、除去、汚損、或いはその効力を失わせた場合、刑法第 139 条の妨害公務罪が成立し、1 年以下の懲役、拘留或いは罰金を受ける。

債務者が不作為仮処分命令に違反した場合、代替執行（債務者の費用で物的状態を除去する）、間接強制（違反時、債務者の拘引、留置、又は罰金）を通じて救済される。

12. 民事訴訟上の和解

訴訟上の和解は、当事者双方が互いにその主張を譲り合い、一致した解決方法を訴訟において陳述することをいう。和解とは、判決以外の原因で訴訟が終了する方式である。新民事訴訟法では、当事者間の和解意思が極めて一致する場合、当事者の申請によって、裁判所（受命又は除託裁判官）は、事件解決のため適当な和解条件を定めることができる。当事者が和解条件に同意すれば、和解の申請を撤回することができる（民事訴訟法第 377、377-1 条）。

裁判上の和解が成立したときにはその内容が和解調書に記載され、和解調書は確定判決と同一の効力がある（民事訴訟法第 380 条）。和解は当事者双方の互譲によって成立するものであるから、事後の紛争処理が円滑に履行される場合が多く、時間的にも迅速な解決を得られるというメリットがある。

13. 債務者が任意で返済しない損害賠償債権の確保（強制執行）

確定の終局判決、民事訴訟法により成立した和解などで債務名義を得ても、債務者が任意で返済しない場合、債権者の申請によって強制執行手続きを行なうことができる。損害賠償債権の強制執行は金銭請求権であり、その強制執行手続は強制執行法第二章の規定による。

強制執行法第二章の規定による、金銭請求権の強制執行手続については、財産の執行対象を固定し（差押え）、それを金銭に換え（換価）、その金銭を債権者に分配する（配当）の 3 段階で行われ、売却される財産の種類（不動産、船舶、動産、債権など）に応じて手続が細分されている。なお、金銭請求権については、債務者の執行開始時における全財産が責任財産となるが、ただし、債務者といえども社会の一員であり、それにふさわしい生活を営む権利は保障されなければならないので、一定範囲の動産が執行対象から除外される。すなわち、差押禁止財産となる（強制執行法第 53 条）。

債務者所有の財産現況を把握するには、強制執行法第 19 条により、裁判所は職権によって税務機関その他の関連機関、又は債務者の財産を知っている人に対し、債務者所有の財産現況を調査することができる。また、強制執行法第 20 条により、裁判所は債務者に対し財産現況を明らかにするよう命じることができる。債務者が虚偽の報告する場合、又は責任財産を隠す、若しくは処分する場合、強制執行法第 22 条により、債務者を拘引、拘留することができる。

強制執行手続きを申請するには、債務名義によって提出すべき書類が異なる。確定判決との債務名義については、裁判所正本及び判決確定の証明書を提出しなければならない（強制執行法第 6 条）。債務者に強制執行に供する財産がなく、又は財産があっても強制執行を経た後に得る金額がなお債務弁済に不足するときは、裁判所は債権者に対し一ヶ月以内に債務者の財産調査報告を命じなければならない。無財産であるか、又は債権者に調査報告を命じ、期限が到来したにもかかわらず故意に報告しないとき、裁判所は、財産があることを発見した時に再度強制執行する旨を明記した証書を発行して債権者に交付し、所持させなければならない（強制執行法第 27 条）。

第 3 章 模倣に対する刑事的救済

1. 関連法律

台湾における知的財産権の犯罪について、著作権法の規定を除いて、専利侵害に関する刑事罰則は 2003 年 3 月 31 の専利法改正により削除されたため、専利権者は専利権侵害者に対し民事訴訟を提起することしかできなくなった。したがって、ここでは商標法及び公平取引法における刑事罰則を主に説明する。

2. 刑事罰の種類及び内容

2-1 刑事罰の対象

商標法は、商標に関する犯罪として、商標権侵害罪（商標法第 81 条）、模倣品販売罪（商標法第 82 条）を規定し、これに対し刑事的制裁を加えている。公平取引法は、模倣侵害に関する犯罪（公平取引法第 20 条第 1 項の規定に違反する場合）として、当該行為者を懲役、拘留又は 1 億台湾元以下の罰金又はその併科に処することができる。これに関する詳しい内容については、下記 2-4/5 を参照。

2-2 非親告罪

上述の商標法、公平取引法に違反する犯罪は非親告罪である。つまり、被害者または法律の定める者の告訴がなくても検察官が起訴できる。しかしながら、現行実務上、非親告罪である商標権侵害事件において、将来の刑事訴訟係属中に影響力を保つため、告訴の提起を受けて、検察官が捜査を開始した場合が少なくない。そのメリットは、万一検察官から不起訴処分を受けた場合、被害者として再議の提起ができ、また被告と和解する場合、告訴人の身分として告訴を取り下げることができるということである。

2-3 両罰規定

公平取引法第 38 条の規定により、法人が公平取引法第 35、36、37 条に違反する場合、前三条の規定により行為者を罰するほか、その法人に対しても、当該各条に定める罰金に処することができる。

2-4 商標権の場合

(1) 商標権侵害罪（商標法第 81 条）

商標権者、又は団体商標権者の同意を得ずに、次の各号のいずれかの行為を為した場合、3年以下の懲役、拘留又は NT\$200,000 以下の罰金に処し、又は併科する。

同一の商品又は役務に、同一の商標又は団体商標を使用する。

類似の商品又は役務に、同一の登録商標又は団体商標を使用し、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。

同一又は類似の商品又は役務に、その登録商標又は団体商標と類似する商標を使用して、関連消費者に誤認を生じさせるおそれがある場合。

(2) 模倣品販売罪（商標法第 82 条）

前条に該当する商品であることを明らかに知りながら、当該商品を販売、又は販売を意図した展示、輸出又は輸入した者は、1年以下の懲役、拘留又は NT\$50,000 以下の罰金に処し、又は併科する。

(3) 没収（商標法第 83 条）

前二条の罪を犯して製造、販売、展示、輸出又は輸入した商品、或いは提供した役務において使用された物品又は書類は、犯人の所有に属するか否かを問わず、これを没収する。

2-5. 不正競争行為の場合

公平取引法において模倣侵害に関する規定は主に上述の公平取引法第 20 条である。公平取引法第 35 条により、第 20 条第 1 項の規定に違反した場合は、中央主管官庁は、第 41 条の規定により期限を定め、その違法行為の停止、改善、又は必要な更正措置をとることができる。指定された期限を過ぎても、その違反行為が停止も改善もされず、又は必要な更正措置がとられない場合、又は一旦停止後再び同様又は類似の違法行為がなされた場合、当該行為者は 3 年以下の懲役、拘留又は 1 億台湾元以下の罰金又はその併科に処することができる。

また、営業秘密侵害行為については、公平取引法第 36 条により、第 19 条の規定に違反し、中央主務官庁が第 41 条の規定により当該違反行為の停止、改正又は必要な更正措置を採るよう命じたにもかかわらず、指定された期限を過ぎても当該違反行為が停止、改正されず又は必要な更正措置が採られない場合、又は一旦停止後、再び同様又は類似の違法行為がなされた場合、行為者は 2 年以下の懲役、拘留又は 5 千万台湾元以下の罰金又はその併科に処することができる。

3. 刑事罰に科するための要件

3-1 商標権の場合

(1) 商標権侵害罪（商標法第 81 条）

商標権者、又は団体商標権者の同意を得ていない

行為者が商標権者、又は団体商標権者の同意を得ず、他人の商標を使用することは、商標権侵害罪の構成要件の一つである。行為者の故意という要件が明記されていないが、行為者の故意は刑事処罰を成立するか否かの前提となるので、行為者の故意の有無は究明しなければならない。

侵害行為

- a. 同一の商品又は役務に、同一の商標又は団体商標を使用する。
- b. 類似の商品又は役務に、同一の登録商標又は団体商標を使用し、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。
- c. 同一又は類似の商品又は役務に、その登録商標又は団体商標と類似する商標を使用して、関連消費者に誤認を生じさせるおそれがある場合。

他人の商標が登録を受け、かつ有効に存在している。

侵害者には商標使用の行為がある。

商標使用とは、販売の目的で商標を商品、役務又はその関連物件に用いたり、若しくは平面画像、デジタルマルチメディア、電子メディア又はその他媒介物を利用して、関連消費者にそれが商標であると認識させることができるものをいう。

侵害者が使用している商標が他人の登録商標と同一或いは類似を構成する。

(2) 模倣品販売罪（商標法第 82 条）

模倣品であることを認識している。

行為者が模倣品であることを明白に認識しているという直接故意を有することを言う。模倣品を他人の登録商標商品と誤認する場合は含んでいない。

模倣品を販売、又は販売を意図した展示、輸出又は輸入する行為。

3-2 不正競争行為の場合

前述のとおり、公平取引法における模倣侵害に関する規定は、主に上述の公平取引法第 20 条である：関連事業又は消費者に一般的に認識されている他人の氏名、商号又は会社の名称、商標、商品容器、包装、外観、又はそのほか、他人の商品を示す表示と同一又は類似するものを使用し、他人の商品と混同誤認を生じさせるに至るか、若しくは当該表記を使用した商品を販売、運送、輸出或はい輸入すること（公平取引法第 20 条第 1 項第 1 号）。

当該規定の要件については、殆ど上記の商標権侵害罪（商標法第 81 条）と模倣品販売罪（商標法第 82 条）と同じであるため、上記の内容を参照のこと。

なお、1999 年の法改正により、中央主管官庁は、指定された期限を過ぎても、その違反行為が停止、改善されず、又は必要な更正措置がとられない場合、又は一旦停止後再び同様又は類似の違法行為がなされた場合、これを刑事罰に科する前提としている。この点を要注意。

4.権利者がとり得る手段

4-1 情報の収集

権利侵害の形跡があった場合、権利者は追跡調査をして侵害容疑者の洗い出しを急ぎ、刑事告訴の準備をするために情報を収集する。以下に、情報収集の対象物について、権利侵害を立証するための重要情報を説明する。

包装箱の図面と表記を写した模倣品サンプルと写真、及び販売店頭や製造工場又は倉庫の風景。

侵害容疑者によって掲載或いは発行された模倣品の広告(日付を証明できるもの)。模倣品の販売価格と販売実績を立証できる発売領収書、レシート。

侵害容疑者の会社資料、主要株主、資本金構成、営業項目など。

4-2 情報の収集方法

権利侵害の形跡があった場合、通常は知的財産権侵害事件専門の法律事務所を通じて調査会社に情報の収集を依頼する。また、商標権侵害と疑われる輸出入貨物を発見した場合、侵害品の輸出入に関する情報を入手するには、台湾においては、「商標輸出監視システム」及び「関税総局に対しての模倣品輸出入提示」の手続きを通じて、税関より輸出入貨物に対するサンプルリング・チェックを行い、商標権侵害物品を発見することが可能である。これに関しては、第 II 編第 1 章の 2.を参照。

4-3 告訴、告発

告訴とは、犯罪の被害者などの告訴権者が検察官或いは司法警察官に対し犯罪事実を申告し、犯人の処罰を求める意思表示をいう。犯罪の被害者は告訴をすることができる。法人の場合は、会社の代表者が代理して告訴を提出することができる。(刑事訴訟法第 232-236、238 条)なお、第三者に商標の使用を許諾し、商標主務機関(知的財産局)に登録する場合、その第三者は告訴をすることができる。

親告罪において、その告訴は告訴権者が犯人を知った後 6 ヶ月以内に提起しなければならない(刑事訴訟法第 237 条)。通常、犯人を知った時点の判断は提出された証拠によって認定する。

告発とは、告訴権者と犯人以外の者が検察官或いは司法警察官に対し訴追を求めることをいう。犯罪の事実に対しては、何人もこれを告発することができる(刑事訴訟法第 240 条)。告訴と違い、代理人による告発は認められず、告発期間にも制限がなく、告発を取消した後も再度告発ができる。

告訴と告発は、書状或いは口頭で検察官或いは司法警察官に対し行うべきである。口頭の告訴と告発は調書を作成しなければならない。口頭の告訴と告発の便宜を図るため、検察所に告訴と告発ベルを設置することができる(刑事訴訟法第 242 条)。

4-4 検察・警察機関による捜査

捜査の開始はいかなる条件も必要としない。検察機関は国によって特別に設置された犯罪訴追の司法機関であり、告訴、告発、自首又は他の事情によって主観的に犯罪の容疑があるとさえ認めれば、自ら進んで捜査活動を行うことができる。台湾の刑事実務において、検察官は捜査機関であり、警察・調査機関は捜査に協力する補助機関である。検察官は捜査を指揮し、警察・調査機関は検察官の命令を受けて捜査を行う。

4-5 検察による事件処理の決定

検察官は、捜査によって得られた証拠を判断し、公訴の提起（公判又は略式）、不起訴（嫌疑なし、告訴権なし、起訴猶予、犯罪を構成しない）などの事件処理決定を行う。

4-6 知的財産権保護警察隊について

台湾での海賊版・模倣品の取締活動については、1981年に設置された経済部「查禁模倣商品チーム」が中心となって、模倣品に関する通報の受け付けや取締活動を行ってきたが、「内政部警政署保安警察第二総隊知的財産権保護警察大隊」（通称「保智大隊」）の成立により、同チームは廃止された。

内政部警政署は海賊版一掃計画を実施するため、行政院長（総理大臣に相当）の指示により、2003年1月1日に保智大隊が成立した。保智大隊は総勢220名、保安警察第二、第四、及び第五総隊からなり、大隊の下に二つの中隊を設け、台北、桃園、台中、嘉義、高雄、花蓮にそれぞれ分隊を配置した。同大隊は、発足後、直ちに隊員を対象とする専門知識訓練を行い、製造業者、中間卸商、小売店の三方面に綿密な捜査網を張り巡らし、海賊版ソフトや不法コピーの著作権侵害、偽ブランドの商標権侵害を効率的に取り締まっている。

警政署の発表によると、保智大隊の発足以来、2004年の警察における知的財産権侵害事犯の摘発件数は4209件、侵害物品の時価総額は86億700万元余り。2005年の摘発件数は4648件に増え、侵害物品の時価総額は一気に100億元の大台を突破する108億8600万元に上っている。

4-7 主なお問い合わせ先

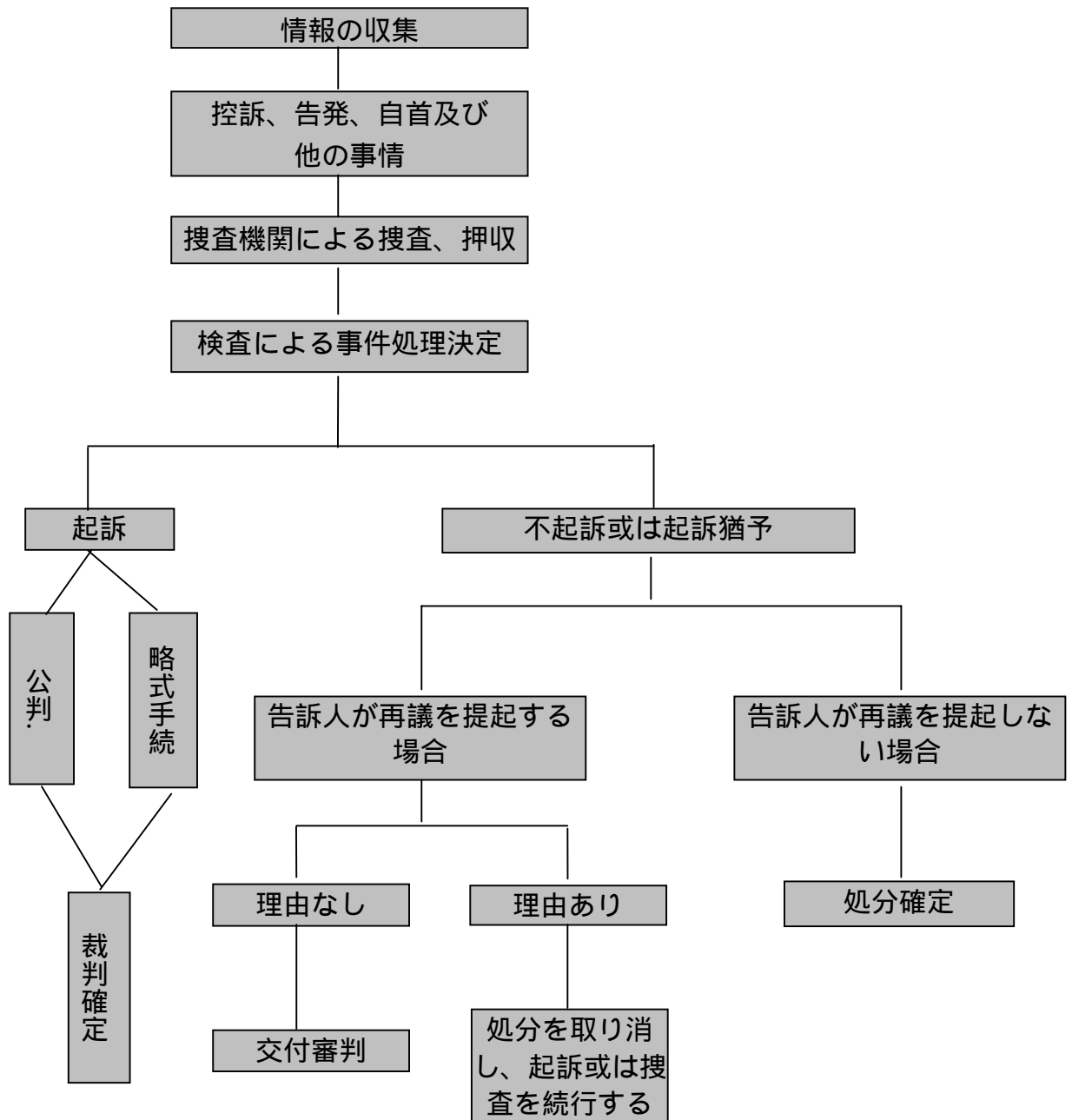
台北地方検察署	電話	02-2314-6871
台中地方検察署	電話	04-2223-2311
高雄地方検察署	電話	07-216-1468

5. 刑事訴訟手続の概要

5-1 手続概要

刑事訴訟は、検察官が公訴を提起し、被告、弁護人が防御をし、裁判所が公権的に判断を行う構造である。

5-2 刑事手続のフローチャート



6. 上訴、不起訴処分に対する不服

6-1 上訴

裁判を受けた者（被告、検察官）や被告の法定代理人、配偶者または原審の代理人や弁護士は上訴することができる。告訴人、被害者が原審の判決に対し不服する場合、上訴理由をもって検察官に上訴の提起を請求することができ、明らかに理由無しの場合を除き、検察官が告訴人、被害者の請求を拒絶することはできない（刑事訴訟法第 344、345、346 条）。

上訴期間は 10 日であり、原審判決書が送達されてから起算する（刑事訴訟法第 349 条）。上訴提起の手続きは、上訴書状を原審裁判所に提出しなければならない（刑事訴訟法第 350 条）。

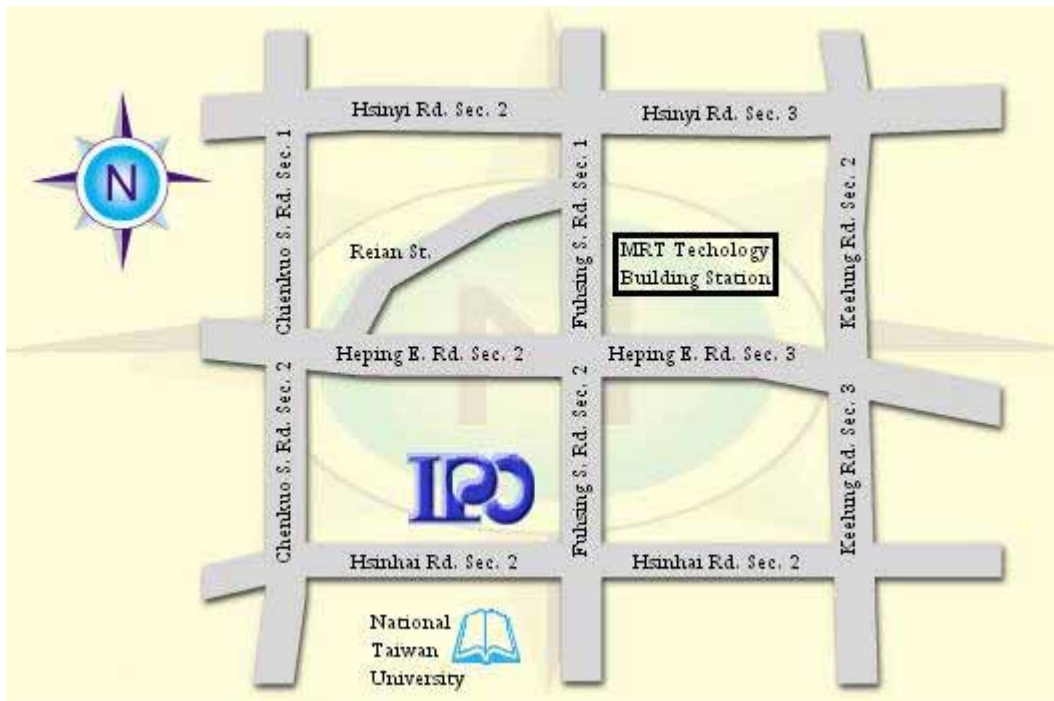
6-2 不起訴処分に対する不服

告訴人が検察官の不起訴処分又は起訴猶予処分に不服する場合、同不起訴処分書又は起訴猶予処分書を受け取った日から 7 日以内に、原検察官を通じてその上級検察機関に再議の申立てをすることができる（刑事訴訟法第 256 条）。告訴人が上級検察機関の再議却下処分に対し不服する場合、再議却下処分書を受け取ってから 10 日以内に、弁護士を委任し理由状をもって、一審裁判所に交付審判を申請することができる（刑事訴訟法第 258-1 条）。

6-3 再審

有罪判決が確定した後、原判決が根拠にした証拠物は偽造又は変造によるものだと証明されたという原因などで、判決を受ける者の利益のため、再審を申し立てることができる（刑事訴訟法第 420 条）。有罪、無罪、免訴又は不受理の判決が確定した後、原判決が根拠にした証拠物は偽造又は変造によるものだと証明されたという原因などで、判決を受ける者の不利益のため、再審を申し立てることができる（刑事訴訟法第 422 条）。

【付録】管轄官庁/担当機関などの所在地



台湾知的財産局所在地（台湾知的財産局 web より転載）

台湾知的財産局：住所 10637 台北市大安区辛亥路二段 185 号 3 階(中央百世ビル)
Intellectual Property Office (MOEA)
185, Hsinhai Road, Sec. 2, 3F
Taipei 10637, Taiwan, Republic of China

電話： 886-02-2738-0007

FAX： 886-02-2735-2656

<http://www.tipo.gov.tw/>



台湾經濟部所在地（台湾經濟部 web より転載）

台湾經濟部： 住所 10015 台北市福州街 15 号
 Ministry of Economic Affairs (IPO)
 15 Fuzhou St., Taipei, 10015, Taiwan, ROC.
 電話： 886-02-2321-2200
[http:// www.moea.gov.tw/](http://www.moea.gov.tw/)



台北高等行政裁判所所在地（台北高等行政裁判所 web より転載）

台北高等行政裁判所： 住所 10669 台北市和平東路三段一巷一号
The Taipei High Administrative Court
No. 1, Lane 1, He-ping E. Rd., Sec. 3
Taipei 10669, Taiwan, Republic of China
電話： 886-02- 2702-7366
FAX： 886-02-2705-0197
<http://tpb.judicial.gov.tw/>



台中高等行政裁判所所在地（台中高等行政裁判所 web より転載）

台中高等行政裁判所： 住所 40246 台中市五權南路 99 号
Taichung High Administrative Court
99, Wuchuan S. Rd., Taichung, Taiwan
電話： 886-04-2260-0800
[http:// tcb.judicial.gov.tw /](http://tcb.judicial.gov.tw/)



高雄高等行政裁判所所在地（高雄高等行政裁判所 web より転載）

高雄高等行政裁判所： 住所 81167 高雄市楠梓区興楠路 180 号
Kaohsiung High Administrative Court
No. 180, Xing Nan Road, Nanzi District,
Kaohsiung, Taiwan (R.O.C.)
電話： 886-07-357-3700
[http:// ksb.judicial.gov.tw /](http://ksb.judicial.gov.tw/)

最高行政裁判所：

住所 **台北市重慶南路一段 126 巷 1 号**
The supreme administrative Court
No.1, Lane 126, Sec. 1, Chongcing S. Rd.,
Jhongjheng District, Taipei City 100, Taiwan
(R.O.C.)

電話： **886-02-2311-3691**

[http:// tpa.judicial.gov.tw/](http://tpa.judicial.gov.tw/)

台湾特許法

2004年7月1日施行

第一章 総則

- 第1条 本法は、発明及び創作を奨励、保護、利用し、産業の発展を促進するために制定される。
- 第2条 本法で特許とは、次に掲げるものをいう。
1. 発明特許
 2. 実用新案登録
 3. 意匠登録
- 第3条 本法の主務官庁は経済部である。
経済部は、専門機関を指定して特許業務を行わせる。
- 第4条 外国人の属する国と中華民国が共同して特許保護に関する国際条約に加盟していない場合、又は相互に特許を保護する条約や協定又は団体や機構間で特許保護に関する主務官庁が認可した協議がない場合、又は該外国人の本国が中華民国国民による特許出願を受理しない場合は、該外国人の特許出願を受理しないことができる。
- 第5条 特許出願権とは、本法により特許出願をする権利を指す。
特許出願権者とは、本法で別に規定がある場合、又は契約で別段の約定がある場合を除き、発明者、考案者、又はその譲受人や相続人を指す。
- 第6条 特許出願権及び特許権は、いずれも譲渡又は相続することができる。
特許出願権は、質権の目的とすることができない。
特許権を目的として質権を設定した場合、契約で別段の約定がある場合を除き、質権者は該特許権を実施することができない。
- 第7条 従業者が職務上完成した発明、実用新案又は意匠について、その特許出願権及び特許権は使用者に帰属し、使用者は従業者に相当の対価を支払わなければならない。但し、契約で別段の約定がある場合は、それに従う。
前項の職務上完成した発明、実用新案又は意匠とは、従業者が雇用関係下の業務で完成した発明、実用新案又は意匠を指す。
一方が出資し、他人を招聘して研究開発に従事させる場合、その特許出願権及び特許権の帰属は双方の契約の約定に従う。契約に約定がな

い場合、特許権は発明者又は考案者に帰属する。但し、出資者は、その発明、実用新案又は意匠を実施することができる。

第 8 条

第 1 項、前項の規定により、特許出願権及び特許権が使用者又は出資者に帰属する場合、発明者又は創作者は氏名表示権を享有する。

従業者が職務上完成したものではない発明、実用新案又は意匠について、その特許出願権及び特許権は従業者に帰属する。但し、その発明、実用新案又は意匠が使用者の資源又は経験を利用したものである場合、使用者が従業者に相当の対価を支払えば、該事業者においてその発明、実用新案又は意匠を実施することができる。

従業者が職務外で発明、実用新案又は意匠を完成した場合は、直ちに書面で使用者に通知しなければならない。必要があれば、創作の過程についても告知しなければならない。

前項の書面通知送達後 6 ヶ月以内に、使用者が従業者に反対の意を示さなければ、該発明、実用新案又は意匠が職務上の発明、実用新案又は意匠であると主張することができない。

第 9 条

前条の使用人と従業者の間で締結された契約で、従業者がその発明、実用新案又は意匠の権益を享受できないように定めるものは、無効とする。

第 10 条

使用者又は従業者は、第 7 条及び第 8 条で定める権利の帰属に関し紛争があり協議が成立した場合、証明書類を添付して、特許主務官庁に権利者の名義変更を申請することができる。特許主務官庁が必要と認めるときは、その他法令によって取得した調停、仲裁又は判決に関する書類を添付するよう当事者に通知することができる。

第 11 条

出願人は、特許出願及び特許に関する事項の処理について、代理人に委任してこれを行うことができる。

中華民国国内に住所又は営業所がない者は、特許出願及び特許に関する事項の処理について、代理人に委任してこれを行わなければならない。

代理人は、法令に別段の規定がある場合を除き、弁理士でなければならない。

第 12 条

弁理士の資格及び管理は別途法律で定める。法律が制定されるまで、代理人資格の取得、取消、無効及びその管理規則は主務官庁が定める。

特許出願権が共有である場合、共有者全員により出願が提出されなければならない。

2 人以上が共同で特許出願以外の特許に関する手続を行う場合、出願の取下又は放棄、分割、出願変更又は本法の別段の約定により共同署名しなければならない場合を除き、各自が単独でその他の手続を行うことができる。但し、代表者を定めた場合、それに従う。

前 2 項のように共同署名しなければならない状況においては、そのうちの 1 人を送達を受けるべき者として指定しなければならない。送達を受けるべき者の指定がない場合、特許主務官庁は、第 1 順位の出願人を送達を受けるべき者に指定し、並びに送達事項をその他の者に通知しなければならない。

第 13 条 特許出願権が共有である場合は、各共有者は、他の共有者の同意を得なければ、その持分を他人に譲渡することができない。

第 14 条 特許出願権を継承した者は、出願時に継承人の名義で特許出願をしなかったり、出願後特許主務官庁に名義変更を申請しなかった場合、第三者に対抗することができない。

前項の名義変更を申請する場合、譲受又は相続を問わず、証明書を添付しなければならない。

第 15 条 特許主務官庁の職員及び特許審査員は、その在職期間内において、相続の場合を除き、特許出願をすることができず、かつ、直接又は間接を問わず、特許に係るいかなる権益も受けることができない。

第 16 条 特許主務官庁の職員及び特許審査員は、その職務上知り得た又は持ち得た特許に係る発明、実用新案、意匠、又は出願人の事業上の秘密に対し、守秘義務を負う。

第 17 条 特許に関する出願及びその他の手続をなすべき者が、法定又は指定の期間内に手続をしなかったり、費用を納付しなかった場合、その手続を受理してはならない。但し、処分を受ける前に補正を行った者に対しては、その手続を受理しなければならない。

天災又は自らの責任に帰することのできない事由により法定期間を遅延した場合、その原因が消滅した日から 30 日以内に書面をもって理由を説明し、特許主務官庁に対し、現状回復を申請することができる。但し、法定期間の遅延が 1 年を超えた場合は、この限りでない。

現状回復を申請する場合、同時にその期間内になすべき手続を補完しなければならない。

第 18 条 査定書又はその他の書類を送達する方法がない場合、特許公報に掲載しなければならない。公報掲載日から 30 日が経過した後、送達が完了したものとみなす。

第 19 条 特許に係る出願及びその他の手続は、電子方式で行うことができる。その施行日及び規則は主務官庁が定める。

第 20 条 本法の期間に関する計算には、その開始日を含まない。

第 51 条第 3 項、第 101 条第 3 項及び第 113 条第 3 項でそれぞれ定める発明特許権、実用新案権、意匠権の権利存続期間は、出願日当日から起算する。

第二章 発明特許

第一節 特許要件

- 第 21 条 発明とは、自然法則を利用した技術的思想の創作を指す。
- 第 22 条 産業上利用することのできる発明で、次の各号いずれかに該当しないものは、本法により出願し、特許を受けることができる。
1. 出願前に既に刊行物に記載されたり、又は公然実施されたもの。
 2. 出願前に既に公然知られたもの。
- 次のいずれかの事情により前項各号の事情に至った発明については、その事実が生じた日から 6 ヶ月以内に特許出願をした場合、前項各号の規定の制限を受けない。
1. 研究又は実験のため。
 2. 政府が主催する展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため。
 3. 出願人の意図に反して漏洩したもの。
- 出願人が前項第 1 号、第 2 号の事由を主張する場合、出願時に事実及びその事実が生じた年月日を明記し、並びに特許主務官庁が指定した期間内に証明書類を提出しなければならない。
- 発明が第 1 項各号の事情に該当しなくても、それが属する技術領域の通常知識を有する者が出願前の従来技術に基づいて容易に完成できる場合、本法により出願し、発明特許を受けることができない。
- 第 23 条 特許を出願した発明が、その出願より先に出願され、かつその出願後はじめて公開又は公告された発明特許若しくは実用新案登録出願に添付される明細書又は図面に記載された内容と同一である場合、特許を受けることができない。但し、該出願人と先に出願された発明又は実用新案登録の出願人が同一である場合は、この限りでない。
- 第 24 条 次の各号のいずれかに該当するものは、発明特許を受けることができない。
1. 動物、植物、及び動物や植物を生み出す主な生物学的方法。但し、微生物学的方法はこの限りでない。
 2. 人体又は動物の病気の診断、治療又は外科手術の方法。
 3. 公序良俗又は公衆衛生を害するもの。

第二節 出願

- 第 25 条 発明特許出願は、特許出願権者が願書、明細書、必要な図面を備えて、特許主務官庁にこれを提出する。
- 出願権者が使用者、譲受人又は相続人である場合、発明者の氏名を明記し、かつ雇用、譲受又は相続を証明する書類を添付しなければならない。

ない。

発明特許出願は、願書、明細書及び必要な図面が全て揃った日を出願日とする。

前項の明細書及び必要な図面が外国語で提出され、かつ特許主務官庁が指定する期間内に中国語による翻訳文が補正された場合、該外国語の明細書及び必要な図面が提出された日を出願日とする。指定された期間内に補正しなかった場合、出願を受理しない。但し、処分前に補正した場合、補正した日を出願日とする。

第 26 条

前条の明細書には、発明の名称、発明の説明、要約及び特許請求の範囲を記載しなければならない。

発明の説明は、該発明が属する技術領域の通常知識を有する者が、その内容を理解し、それに基づいて実施することができるように、明確かつ十分に開示しなければならない。

特許請求の範囲には特許を受けようとする発明について明確に記載し、各請求項には簡潔な方式で記載し、かつ発明の説明及び図面で支持しなければならない。

発明の説明、特許請求の範囲及び図面の開示方式は、本法施行細則で定める。

第 27 条

出願人が、同一の発明について、WTO 加盟国において又は中華民国と相互に優先権を承認する外国において、最初に法律に則って特許出願し、かつ最初の特許出願の日から 12 ヶ月以内に、中華民国に特許出願をする場合、優先権を主張することができる。

出願人が前項の規定により 1 出願において 2 以上の優先権を主張する場合、その優先権期間の起算日は最先の優先日の翌日とする。

外国の出願人が WTO 加盟国の国民ではなく、かつその所属する国と中華民国とが相互に優先権を承認していない場合、WTO 加盟国又は互惠関係にある国の領域内に住所又は営業所を有していれば、第 1 項の規定により優先権を主張することができる。

優先権を主張した場合、その特許要件の審査は優先日を基準とする。

第 28 条

前条の規定により優先権を主張しようとする者は、特許出願と同時に申立てをし、かつ外国での出願日及びその出願を受理した国を願書に記載しなければならない。

出願人は、出願日から 4 ヶ月以内に、前項の外国政府が受理を証明した特許出願書類を提出しなければならない。

前 2 項の規定に違反する場合は、優先権を失う。

第 29 条

出願人が中華民国においてその先に出願した発明又は実用新案に基づいて特許を出願する場合、先願出願当初の明細書又は図面に記載された発明若しくは創作に基づいて優先権を主張することができる。但し、

次の各号のいずれかに該当する場合は、優先権を主張することができない。

1. 先願の出願日から既に 12 ヶ月を経過した場合。
2. 先願に記載された発明又は創作において第 27 条又は本条の規定により既に優先権を主張した場合。
3. 先願が第 33 条第 1 項規定の分割出願又は第 102 条規定の変更出願である場合。
4. 先願が既に査定又は処分された場合。

前項の先願は、その出願日から 15 ヶ月を経過したときに取り下げたものとみなす。

先願の出願日から 15 ヶ月を経過した後は、優先権の主張を取り下げることができない。

第 1 項により優先権を主張した特許出願が先願の出願日から 15 ヶ月以内に取り下げられた場合、同時に優先権の主張も取り下げられたものとみなす。

特許出願人が 1 出願について 2 以上の優先権を主張する場合、その優先権期間の起算日は最先の優先日の翌日とする。

優先権が主張された場合、その特許要件の審査は、優先日を基準とする。

第 1 項により優先権を主張しようとする場合、特許出願と同時に申立てを提出し、かつ先願の出願日及び出願番号を願書に明記しなければならない。出願人が出願時に申立てをしなかったり、又は先願の出願日及び出願番号を明記しなかった場合、優先権を失う。

本条により主張する優先日は、2001 年 10 月 26 日より前に溯ることができない。

第 30 条

生物材料又は生物材料を利用する発明特許を出願しようとする場合、出願人は遅くとも出願日までに該生物材料を特許主務官庁指定の国内寄託機関に寄託し、かつ寄託機関、寄託日及び寄託番号を願書に明記しなければならない。但し、該生物材料が、それが属する技術領域の通常知識を有する者により容易に取得できる場合、寄託する必要はない。

出願人は出願日から 3 ヶ月以内に寄託証明書を提出しなければならない。期間が満了しても該証明書を提出しなかった場合、寄託しなかったものとみなす。

出願前に既に特許主務官庁が認可した外国寄託機関に寄託し、出願時にその事実を申立て、かつ前項に規定する期間内に特許主務官庁指定の国内寄託機関に寄託した旨の証明書類及び外国寄託機関発行の証明書類を提出する場合には、遅くとも出願日までに国内寄託機関に寄託

しなければならないとする第1項の制限を受けない。

第1項の生物材料寄託の受理要件、種類、形態、数量、費用及びその他の寄託執行に関わる規則は、主務官庁が定める。

第31条

同一の発明について、2以上の特許出願があった場合、最先に出願した者のみが特許を受けることができる。但し、後から出願した者が主張する優先日が先願の出願日より早い場合は、この限りでない。

前項の出願日又は優先日が同日である場合は、これを協議により定めるよう出願人に通知しなければならない。協議が成立しない場合、いずれの出願人も発明特許を受けることができない。その出願人が同一人である場合、期限を指定していずれか1つの出願を選択するよう出願人に通知しなければならない。該期限が過ぎてもいずれか1つの出願を選択しなかった場合、いずれの出願も発明特許を受けることができない。

各出願人が協議する場合、特許主務官庁は適当な期間を指定して該協議結果を報告するよう出願人に通知しなければならない。該期限が過ぎても報告がなかった場合、協議が成立しなかったものとみなす。

前3項の規定は、同一の発明又は創作がそれぞれ発明特許及び実用新案登録を出願する場合に準用する。

第32条

発明特許出願は、1つの発明ごとに提出しなければならない。

2以上の発明が、1つの広義の発明概念に属する場合、1出願において出願を提出することができる。

第33条

特許を出願した発明が、実質上2以上の発明である場合、特許主務官庁の通知又は出願人の請求により、出願を分割することができる。

前項の分割出願は、原出願の再審査の査定前に行わなければならない。分割出願が許可された場合にも、原出願の出願日を出願日とする。優先権がある場合、優先権を主張ことができ、かつ原出願で既に完成した手続から審査を続行しなければならない。

第34条

特許出願権者でない者が出願し、特許を受けた発明について、特許出願権者が該発明特許の公告日から2年以内に無効審判を請求し、かつ審決で無効が確定した日から60日以内に特許出願をした場合、該特許出願権者でない者の出願日を該特許出願権者の出願日とする。

発明特許権者が前項規定により出願した出願については、改めて公告しない。

第三節 審査及び再審査

第35条

特許主務官庁は、発明特許出願の実体審査について、特許審査員を指定して、これを審査させなければならない。

特許審査員の資格は、法律で定める。

- 第 36 条 特許主務官庁が、発明特許出願書類を受理した後、審査の結果、手続に規定に合致しない箇所がなく、かつ公開すべきでない事情がないと認めた場合、出願日から 18 ヶ月後に該出願を公開しなければならない。特許主務官庁は、出願人の請求により、その出願を早期公開することができる。
- 発明特許の出願が、次の各号のいずれかに該当する場合、公開しない。
1. 出願日から 15 ヶ月以内に取り下げられる場合。
 2. 国防上の機密又はその他の国家安全に関わる機密に及ぶ場合。
 1. 公序良俗を害する場合。
- 第 1 項及び前項の期間は、優先権主張があった場合、その起算日は優先日の翌日とする。2 以上の優先権を主張する場合、その起算日は最先の優先日の翌日とする。
- 第 37 条 何人も、発明特許出願日から 3 年以内に、特許主務官庁に対し、その発明特許出願について実体審査の請求をすることができる。
- 第 33 条第 1 項の規定による分割出願、又は第 102 条の規定による発明特許への出願変更は、前項の期間を過ぎた場合、分割出願又は出願変更を行った日から 30 日以内に、特許主務官庁に実体審査の請求をすることができる。
- 前二項の規定により行った審査の請求は取り下げることができない。
- 第 1 項又は第 2 項に規定される期間内に実体審査を請求しなかった場合、該発明特許出願は取り下げられたものとみなす。
- 第 38 条 前条の審査を請求する場合、申請書を提出しなければならない。
- 特許主務官庁は、審査請求の事実を、特許公報に掲載しなければならない。
- 発明特許出願人以外の者から審査が請求された場合、特許主務官庁は、その事実を発明特許出願人に通知しなければならない。
- 生物材料に関する発明特許又は生物材料を利用する発明特許の出願人は、審査請求時に、寄託機関発行の生存確認証明書類を提出しなければならない。発明特許出願人以外の者から審査が請求された場合、特許主務官庁は、3 ヶ月以内に生存確認証明書類を提出するよう発明特許出願人に通知しなければならない。
- 第 39 条 発明特許出願の公開後、特許出願人でない者が業として特許出願に係る発明を実施している場合、特許主務官庁は、請求により、該特許出願を優先的に審査することができる。
- 前項の請求をする場合、関係証明書類を提出しなければならない。
- 第 40 条 発明特許出願人は、その出願の公開後、かつて発明特許出願内容について書面による通知を行ったにもかかわらず、通知後かつ公告前に依然として該発明を業として実施し続けた者に対し、該発明特許出願の

公告後、適当な補償金の支払いを請求することができる。

既に公開された発明特許出願であることを明らかに知りながら、公告前に業として該発明を実施し続けた者に対しても、前項の請求をすることができる。

前二項の規定による請求権は、その他の権利の行使を妨げない。

第1項、第2項による補償金の請求権は、公告日から2年以内に行使しなければ、消滅する。

第41条 前5条の規定は、2002年10月26日以降に提出された発明特許出願から適用する。

第42条 特許審査員が次の各号のいずれかに該当する場合、自ら特許審査員を辞退しなければならない。

1. 本人又はその配偶者が、該特許出願の出願人、代理人、代理人の共同事業者、又は代理人と雇用関係にある者である場合。
2. 該特許の出願人又は代理人の四親等内の血族、若しくは三親等内の姻族である場合。
3. 本人又はその配偶者が、該特許出願について特許出願人と共同権利人、共同義務人又は償還義務人の関係にある場合。
4. 該特許出願の出願人の法定代理人、家長、家族である場合、又はかつてこれらの関係にあった場合。
5. 該特許出願の出願人の訴訟代理人、補佐人である場合、又はかつてこれらの関係にあった場合。
6. 該特許出願の証人、鑑定人、異議申立人、無効審判の請求人である場合、又はかつてこれらの関係にあった場合。

特許審査員が除斥されるべきであるにもかかわらず、除斥されなかった場合、特許主務官庁は、職権で又は請求により、その処分を取り消した後、別に適当な処分をすることができる。

第43条 出願について審査した後、査定書を作成し、特許出願人又はその代理人に送達しなければならない。

拒絶査定する際は、査定書に理由を記さなければならない。

査定書には特許審査員が署名しなければならない。再審査、無効審判の審査及び権利存続期間の延長審査の査定書も同様とする。

第44条 発明特許出願が第21条から第24条、第26条、第30条第1項、第2項、第31条、第32条又は第49条第4項の規定に違反する場合、特許を付与しない旨の査定を下さなければならない。

第45条 審査の結果、拒絶すべき理由がないと認めた発明については、特許を許可し、その特許請求の範囲及び図面を公告しなければならない。

公告された特許について、何人も、その査定書、明細書、図面及び全ファイル資料の閲覧、抄録、撮影又はコピーを請求することができる。

但し、特許主務官庁が法により秘密を保持しなければならない場合は、この限りでない。

第 46 条 発明特許出願人は、拒絶査定に不服がある場合、査定書送達の日から 60 日以内に理由書を添付して再審査を請求することができる。但し、出願手続の不適法又は出願人不適格の理由で受理されなかった場合、又は却下された場合は、法律により行政救済を提起することができる。再審査の結果、拒絶理由があると認めた場合、査定前に、期限を指定して意見書を提出するよう出願人に通知しなければならない。

第 47 条 再審査時、特許主務官庁は、原審査に参加しなかった特許審査員を指定して、これを審査させ、査定書を作成させなければならない。前項の再審査の査定書は、出願人に送達しなければならない。

第 48 条 特許主務官庁は、発明特許の審査の際、請求により又は職権で、期限を指定して次の各号の事項を行うよう出願人に通知することができる。

1. 特許主務官庁に出頭して面談に応じる。
2. 必要な実験を行い、模型又は見本を追加する。

前項第 2 号の実験、追加された模型又は見本について、特許主務官庁は必要であれば、現場又は指定した場所で実地検証を行うことができる。

第 49 条 特許主務官庁は、発明特許の審査の際、職権により、期限を指定して明細書又は図面を補足・補正するよう出願人に通知することができる。出願人は、発明特許を出願した日から 15 ヶ月以内に、明細書又は図面を補足・補正することができる。15 ヶ月以後に明細書又は図面の補足・補正を申請した場合、原出願により公開する。

出願人は発明特許を出願した日から 15 ヶ月以降も、次の各号の期日又は期間内に限り、明細書又は図面を補足・補正することができる。

1. 実体審査を請求するとき。
2. 出願人以外の者が実体審査を請求した場合、該出願について実体審査を行う旨の通知送達後 3 ヶ月以内。
3. 特許主務官庁が査定前に通知した意見書提出期間内。
4. 再審査請求時、又は再審査理由書を補充提出することができる期間内。

前三項による補足・補正は、出願当初の明細書又は図面が開示する範囲を超えてはならない。

第 2 項、第 3 項の期間は、優先権の主張がある場合、その起算日は優先日の翌日とする。

第 50 条 発明を審査した結果、国の安全を脅かすおそれがあるとき、その明細書を国防省又は国家安全関連機関に移して意見を聴取しなければならない。秘密にする必要があると認められた場合、その発明は公告せず、

出願書類は封緘して閲覧させず、また、その旨を記した査定書を作成して、出願人、代理人及び発明者に送達しなければならない。

出願人、代理人及び発明者は、前項の発明について秘密を保持しなければならない。これに違反した場合、該特許出願権を放棄したものとみなす。

該秘密保持の期間は、査定書を出願人に送達した日から1年間とし、1年ごとにそれを延長することができる。特許主務官庁は期間満了の1ヶ月前に国防部又は国家安全関連機関に問い合わせ、秘密保持の必要がないと認められた場合は、直ちに公告しなければならない。

秘密保持期間に出願人が受けた損失について、政府はそれ相当の補償を与えなければならない。

第四節 特許権

第51条 特許出願された発明は、許可査定後、出願人は査定書送達後3ヶ月以内に証書料及び1年目の特許料を納付しなければならない。前記の費用が納付された後はじめて公告される。期間が満了しても前記費用を納付しなかった場合、公告を行わず、その特許権は最初から存在しなかったものとする。

特許出願された発明は、公告の日より発明特許権を付与し、証書を交付する。

発明特許権の存続期間は、出願日から起算して20年をもって満了とする。

第52条 医薬品、農薬又はその製造方法に係る発明特許権の実施が、他の法律の規定により、許可証を取得しなければならない、かつその取得に特許出願の公告日から2年以上の期間を要する場合、特許権者は特許権の存続期間を、1回に限り、2年から5年までの延長を申請することができる。但し、延長を許可する期間は、中央目的事業主務官庁から許可証を取得するために必要な期間を超えてはならない。許可証を取得するための期間が5年を超える場合も、その延長期間は5年までとする。前項の申請は、最初に許可証を取得した日から3ヶ月以内に、申請書に証明書類を添付し、特許主務官庁に提出しなければならない。但し、特許権の存続期間の満了する6ヶ月以上前に、これを行わなければならない。

主務官庁は、前項出願の期間延長に関する審査、決定について、国民の健康への影響を考慮し、中央目的事業主務官庁と共同で審査及び決定の方法を定めなければならない。

- 第 53 条 特許主務官庁は、発明特許権存続期間の延長申請について、特許審査員を指定して、これを審査させ、査定書を作成して特許権者又はその代理人に送達しなければならない。
- 第 54 条 何人も、延長が許可された発明特許権存続期間が、次の各号のいずれかに該当すると認める場合、証拠を添付して、特許主務官庁に無効審判を請求することができる。
1. 発明特許の実施について許可証を取得する必要がない場合。
 2. 特許権者又は実施権者が許可証を取得していない場合。
 3. 延長を許可された期間が実施することができなかつた期間を超えている場合。
 4. 特許権存続期間の延長を申請した者が特許権者でない場合。
 5. 特許権が共有であつて、共有者全員により申請されたものではない場合。
 6. 取得した許可証により承認された外国での試験期間に基づいて特許権存続期間の延長を申請した場合、その許可された延長期間が、該外国の特許主務官庁が認可した期間を超えている場合。
 7. 許可証の取得に必要な期間が 2 年未満である場合。
- 特許権の延長が無効審判によって無効にすべき旨の審決が確定した場合、その延長を許可された期間は、最初から存在しなかつたものとみなす。但し、前項第 3 号、第 6 号の規定の違反に対する無効審判について無効にすべき旨の決定が確定した場合、該超過期間については延長されなかつたものとみなす。
- 第 55 条 特許主務官庁が前条第 1 項各号のいずれかに該当すると認める場合、職権で、延長した発明特許権存続期間を取り消すことができる。特許権存続期間の延長を取り消すべき旨の審決が確定した場合、その許可された延長期間は、最初から存在しなかつたものとみなす。但し、前条第 1 項第 3 号、第 6 号の規定に違反する場合において、その取消が確定した場合、該超過期間については延長されなかつたものとみなす。
- 第 56 条 物品の発明の特許権者は、本法で別段の規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに、該物品を製造、販売、販売の申し出、使用をすること、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。
- 方法の発明の特許権者は、本法で別段の規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに、該方法を使用及び該方法をもって直接製造した物品を使用、販売の申し出、販売をすること、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。
- 発明特許権の範囲は、明細書に記載された特許請求の範囲を基準とし、

特許請求の範囲の解釈時には、発明の説明及び図面を参酌することができる。

第 57 条

発明特許権の効力は、次の各号の事項には及ばない。

1. 研究、授業又は試験のためにその発明を実施し、営利上の行為ではないもの。
2. 出願前、既に国内で使用されていたもの、又はその必要な準備を既に完了していたもの。但し、出願前の 6 ヶ月以内に特許出願権者からその製造方法を知らされ、かつ特許出願権者がその特許権を留保する旨の表明をした場合は、この限りでない。
3. 出願前、既に国内に存在していた物品。
4. 単に国境を通過するにすぎない交通手段又はその装置。
5. 特許出願権者ではない者が受けた特許権が、特許権者による無効審判請求のために無効になった場合、その実施権者が無効審判請求前に善意で国内で使用していたもの、又はその必要な準備を既に完了していたもの。
6. 特許権者が製造した又は特許権者の同意を得て製造した特許物品が販売された後、該物品を使用する又は再販売する行為。前記の製造、販売行為は国内に限らない。

前項第 2 号及び第 5 号の使用人は、その原事業内においてのみ継続して使用することができる。また、前項第 6 号における販売できる区域は、裁判所が事実に基づいて認定する。

第 1 項第 5 号の実施権者は、該特許権が無効審判請求により取り消された後も、依然として実施を継続する場合、特許権者による書面通知を受領した日から、特許権者に合理的な特許権使用料を支払わなければならない。

第 58 条

2 種類以上の医薬品を混合して製造された医薬品又は方法は、その特許権の効力は、医師の処方又は処方により調製された医薬品には及ばない。

第 59 条

発明特許権者が、その発明特許権を他人に譲渡、信託、実施権を設定したり、又は質権を設定する場合、特許主務官庁に登録しなければ、第三者に対抗することができない。

第 60 条

発明特許権の譲渡又は実施許諾について、契約に次のいずれかに該当する約定があることにより、不正競争が生じた場合、その約定は無効とする。

1. 譲受人に対し、特定の物品、又は譲渡人や実施権者でない者が提供する方法を使用することを制限又は禁止するもの。
2. 譲受人に対し、特許の保護を受けていない製品又は原料を、譲渡人から購入するよう要求するもの。

- 第 61 条 発明特許権が共有である場合、共有者が自ら実施する場合を除き、共有者全員の同意を得なければ、他人にこれを譲渡したり又は実施許諾することはできない。但し、契約に別段の約定がある場合は、その約定に従う。
- 第 62 条 発明特許の共有者は、共有者全員の同意を得なければ、その持分を他人に譲渡、信託したり、又は質権を設定することができない。
- 第 63 条 発明特許権者が中華民国と外国の間で発生した戦争により損失を受けた場合、1 回に限り、5 年から 10 年までの特許権存続期間の延期を請求することができる。但し、交戦国の国民の特許権は、延期を請求することができない。
- 第 64 条 発明特許権者は、次の各号のいずれかの事項についてのみ、特許明細書又は図面の訂正を請求することができる。
1. 特許請求の範囲の縮減。
 2. 誤記の事項の訂正。
 3. 不明瞭な記載の釈明。
- 前項の訂正は、出願当初の明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはならず、かつ特許請求の範囲の実質を拡大又は変更してはならない。
- 特許主務官庁は、訂正を許可した後、その事由を特許公報に掲載しなければならない。
- 明細書、図面が訂正公告された場合、出願日に遡って発効する。
- 第 65 条 発明特許権者は、実施権者又は質権者の同意を得なければ、特許権の放棄又は前条による請求をすることができない。
- 第 66 条 次の各号のいずれかに該当する場合、発明特許権は当然消滅する。
1. 特許権の存続期間が満了したとき、期間満了の日の翌日から消滅する。
 2. 特許権者が死亡し、該特許権の相続人であることを主張する者がいない場合、該特許権が民法第 1185 条の規定により国に帰属すべき日から消滅する。
 3. 2 年目以降の特許料が追納期間が満了するまでに納付されなかった場合、該特許権は、本来の納付期間満了日の翌日より消滅する。但し、第 17 条第 2 項の規定により現状回復された場合は、この限りでない。
 4. 特許権者が自ら特許権を放棄する場合、その書面に示された日から特許権は消滅する。
- 第 67 条 次の各号のいずれかに該当する場合、特許主務官庁は、無効審判請求により又は職権で、その発明特許権を取り消し、並びに期限を指定し

て特許証を返還させなければならない。返還することができない場合には、特許証の取消を公告しなければならない。

1. 第 12 条第 1 項、第 21 条から第 24 条まで、第 26 条、第 31 条又は第 49 条第 4 項の規定に違反する場合。
2. 特許権者の属する国が中華民国国民の特許出願を受理しない場合。
3. 発明特許権者が発明特許出願権者ではない場合。

利害関係者に限り、第 12 条第 1 項の規定に違反すること又は前項第 3 号の事情を有することを理由に、無効審判を提起することができる。その他の事情については、何人も、証拠を添付して、特許主務官庁に無効審判を請求することができる。

無効審判請求者は、無効審判請求日から 1 ヶ月以内に、無効審判理由及び証拠を補充提出しなければならない。但し、無効審判審定前に提出された場合には、依然としてこれを参酌しなければならない。

審査の結果、無効審判が成立しなかった場合、何人も、同一の事実及び同一の証拠をもって、無効審判を再請求することはできない。

第 68 条 利害関係者は、特許権の取消により回復できる法律上の利益がある場合、特許権の存続期間満了後又は消滅後も、無効審判を請求することができる。

第 69 条 特許主務官庁は、無効審判請求書を受理した後、無効審判請求書の副本を特許権者に送達しなければならない。

特許権者は副本送達後 1 ヶ月以内に答弁しなければならない。予め理由を説明して延期が許可された場合を除き、期限を過ぎても答弁がない場合は直ちに審査する。

第 70 条 特許主務官庁は、無効審判を審査する際、原審査に関与しなかった審査官を指定し審査させ、査定書を作成させ、これを特許権者及び無効審判請求者に送達しなければならない。

第 71 条 特許主務官庁は、無効審判を審査する際、請求により又は職権で、期限を指定して、特許権者に次の各号の事項を行うよう通知することができる。

1. 特許主務官庁に出頭し面談する。
2. 必要な実験を行ったり、模型又は見本を補充提出する。
3. 第 64 条第 1 項及び第 2 項の規定により補正する。

前項第 2 号の実験、模型又は見本の補充提出について、特許主務官庁は必要であれば現場又は指定した場所で実地検証することができる。

第 1 項第 3 号の規定により特許明細書又は図面を補正する場合、特許主務官庁は無効審判請求者に通知しなければならない。

第 72 条 第 54 条の発明特許権存続期間延長の無効審判に関する処理は、第 67 条第 3 項、第 4 項及び前四条の規定を準用する。

第 67 条の職権での特許権取消に関する処理は、前三条の規定を準用する。

第 73 条 発明特許権が取り消された後、次のいずれかに該当する場合は、その取消が確定したものとする。

1. 法により行政救済を提起しなかった場合。

2. 行政救済を提起したものの、却下が確定した場合。

発明特許権が取り消された場合、その特許権の効力は最初から存在しなかったものとみなす。

第 74 条 特許主務官庁は、発明特許権の付与、変更、存続期間の延長及び延期、譲渡、信託、実施許諾、強制実施、取消、消滅、質権設定及びその他の公告すべき事項を、特許公報に掲載しなければならない。

第 75 条 特許主務官庁は特許権原簿を備え置き、それに特許の付与、特許権の変更及び法令に定める全ての事項を記載しなければならない。

前項の特許権原簿は、電子方式で作成することができ、国民の、閲覧、抄録、撮影又はコピーに供さなければならない。

第五節 実施

第 76 条 国家の緊急事態に対応するため、又は公益を増進するための非営利目的の使用、或は申請者が合理的な商業条件を提示したにもかかわらず、相当期間内に実施許諾について協議できなかった場合、特許主務官庁は請求により、該申請者に特許権の強制実施を許可することができる。その実施は国内市場の需要に供給することを主としなければならない。但し、半導体技術に係る特許について強制実施許諾を請求する場合は、公益の増進を目的とする非営利的使用に限る。

特許権者に関して、競争制限又は不正競争の理由で裁判所による判決又は公正取引委員会による処分が確定した場合、前項に該当しなくても、特許主務官庁は請求により、該申請者に特許権の強制実施を許可することができる。

特許主務官庁は、強制実施の請求書を受理した後、その副本を特許権者に送達し、3ヶ月以内に答弁させなければならない。期間が満了しても答弁しなかった場合には、直ちにこれを処理することができる。

特許の強制実施権は、他人が同一の発明特許について別に実施権を取得することを妨げない。

強制実施権者は特許権者に適当な補償金を支払わなければならない。

紛争がある場合、特許主務官庁がこれを裁定する。

強制実施権は、強制実施に関する営業と共に譲渡、信託、承継、授権、又は質権の設定をしなければならない。

強制実施の原因が消滅した場合、特許主務官庁は、請求により強制実施を廃止させることができる。

第 77 条 前条の規定により強制実施権を取得した者が、強制実施の目的に違反した場合、特許主務官庁は、特許権者の請求により、又は職権で、その強制実施を廃止することができる。

第 78 条 再発明とは、他人の発明又は実用新案の主な技術内容を利用して完成した発明を指す。

再発明の特許権者は、原特許権者の同意を得なければ、その発明を実施することができない。

製造方法の特許権者は、その製造方法により作成した物品が他人の特許に係るものである場合、該他人の同意を得なければ、該発明を実施することができない。

前二項の再発明の特許権者と原特許権者、又は製造方法の特許権者と物品の特許権者は、協議により交互に実施許諾することができる。

前項の協議が成立しない場合、再発明の特許権者及び原特許権者又は製造方法特許権者及び物品特許権者は、第 76 条の規定により強制実施を請求することができる。但し、再発明又は製造方法発明に係る技術は、原発明又は物品の発明と比べて明らかに経済的意義を有する重要な技術上の改良であるものに限り、再発明又は製造方法の特許権者が強制実施を請求することができる。

再発明又は製造方法の特許権者が取得した強制実施権は、その特許権と共に譲渡、信託、相続、実施許諾又は質権の設定をしなければならない。

第 79 条 発明特許権者は、特許に係る物品又はその包装に特許証の番号を表示しなければならない。並びに、実施権者又は強制実施権者にも該特許証番号の表示を要求することができる。特許証番号を表示しなかった場合、損害賠償を請求することができない。但し、特許権侵害者が、該物品が特許に係るものであることを明らかに知っていた場合、又はそれを知り得ることを証明できる事実がある場合は、この限りでない。

第六節 料金の納付

第 80 条 発明特許に関する各種申請について、申請人は申請時に、申請手数料を納付しなければならない。

特許を受けた場合、発明特許権者は、証書料及び特許料を納付しなければならない。特許権存続期間の延長、延期が許可された場合、延長又は延期が許可された期間内においても、特許料を納付しなければならない。

申請手数料、証書料及び特許料の金額は、主務官庁が定める。

- 第 81 条 発明特許料は公告の日から起算する。1 年目の特許料は、第 51 条第 1 項の規定により納付し、2 年目以降の特許料は、それぞれの期間が満了する前に納付しなければならない。
- 前項の特許料は、数年分を一括して納付することができる。一括払い後、特許料の改定があった場合にも、その差額を追納する必要はない。
- 第 82 条 発明特許の 2 年目以降の特許料を、特許料を納付すべき期間内に納付しなかった場合、期間満了後の 6 ヶ月以内に追納することができる。但し、その納付金額は規定特許料の倍額とする。
- 第 83 条 発明特許権者が自然人、学校又は中小企業である場合、特許主務官庁に特許料の減免を申請することができる。その減免の条件、期間、金額及びその他行うべき事項に関する規則は、主務官庁が定める。

第七節 損害賠償及び訴訟

- 第 84 条 発明特許権が侵害を受けた場合、特許権者は損害賠償を請求することができるほか、侵害の排除も請求することができる。侵害のおそれがある場合、その防止を請求することができる。
- 専用実施権者も前項の請求をすることができる。但し、契約に別の約定がある場合には、その約定に従う。
- 発明特許権者又は専用実施権者は、前 2 項の規定により請求するとき、特許権侵害に係る物品又は侵害行為に用いた原料或は設備について、廃棄処分又はその他の必要とされる処置を請求することができる。
- 発明者は氏名表示権が侵害された場合、発明者の氏名表示又はその他名誉回復のために必要な処分を請求することができる。
- 本条に規定する請求権は、請求権者が該侵害行為及び賠償義務者の存在を知った時点から 2 年以内に行使しなければ消滅する。該侵害行為があった時点から 10 年を超えた場合も同様とする。
- 第 85 条 前条により損害賠償を請求する際は、次の各号のいずれかの方法によりその損害額を算定することができる。
1. 民法第 216 条の規定による。但し、その損害を証明するための証拠や方法を提供することができない場合、発明特許権者は、その特許権の実施により通常得られる利益から、損害を受けた後に同一の特許権の実施により得られる利益を差し引いた差額をその損害額とすることができる。
 2. 侵害者が侵害行為により得た利益による。侵害者がそのコスト又は必要経費について立証できない場合、該物品の販売により得た全収入をその得た利益とする。

前項の規定のほか、発明特許権者の業務上の信用が侵害行為により損われた場合には、別途、それに相当する金額の賠償を請求することができる。

前二項の規定により、侵害行為が故意である場合、裁判所は侵害状況により損害額以上の賠償額を定めることができる。但し、損害額の3倍を超えてはならない。

第86条 他人の発明特許権を侵害する行為に用いた物、又は該侵害行為により生じた物は、侵害された者の請求により、仮差押えをし、賠償の判決後、賠償金の全部又は一部に充当することができる。

第87条 当事者が前条の起訴及び本条の仮差押えの申立てをした場合、裁判所は民事訴訟法の規定により訴訟による救済を許可しなければならない。製造方法の特許により製造された物品が、その製造方法の特許出願前に国内又は国外に見られなかった場合、他人が製造した同一の物品は、その方法特許により製造されたものと推定する。

前項の推定は、反証を提出してこれを覆すことができる。被告が、該同一の物品を製造した方法と製造方法特許とが異なることを証明したときは、反証を提出したものとみなす。被告が立証時に開示した製造上及び営業上の秘密の合法的権益は、十分に保障されなければならない。

第88条 発明特許に係る訴訟事件について、裁判所は、判決書の正本を一部、特許主務官庁に送達しなければならない。

第89条 侵害を受けた者は、勝訴判決確定後、裁判所に対し、敗訴者の負担で判決書の全文又は一部を新聞に掲載すべき旨の裁定を下すよう請求することができる。これに係る費用は、敗訴者の負担とする。

第90条 発明特許権に関する民事訴訟について、出願、無効審判、又は取消が確定するまで、審判を中止させることができる。

裁判所は、前項の規定により審判中止の裁定を下すとき、無効審判提起の正当性に留意しなければならない。

無効審判が権利侵害訴訟の審理に関連する場合、特許主務官庁は、優先的にこれを審査することができる。

第91条 認可を得ていない外国法人又は団体は、本法が規定する事項について、民事訴訟を提起することができる。但し、条約又はその本国の法令や慣例により、中華民國の国民又は団体が同国において同等の権利を享受することができる場合に限る。団体又は機構が相互に特許を保護する協議を締結し、主務官庁の許可を受けた場合も、同様とする。

第92条 裁判所は、発明特許訴訟事件を審理する専門法廷を設けたり、又は専門の担当者を指定して審理させることができる。

司法院は、特許侵害鑑定専門機関を指定することができる。

裁判所は、発明特許訴訟を受理し、前項の機関に委託して鑑定させることができる。

第三章 実用新案登録

- 第 93 条 実用新案とは、自然法則を利用した技術的思想のうち、物品の形状、構造又は組み合わせに係る創作を指す。
- 第 94 条 産業上利用することのできる実用新案で、次の各号のいずれかに該当しないものは、本法により出願し、実用新案登録を受けることができる。
1. 出願前に既に刊行物に記載されたり、又は公然実施されたもの。
 2. 出願前に既に公然知られたもの。
- 実用新案が次のいずれかの事由により、前項各号の事情に至った実用新案については、その事実が生じた日から6ヶ月以内に出願した場合、前項各号の規定の制限を受けない。
1. 研究、実験のため。
 2. 政府が主催する展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため。
 3. 出願人の意図に反して漏洩したもの。
- 出願人が前項第1号、第2号の事由を主張する場合、出願時に事実及びその事実が生じた年月日を明記し、並びに特許主務官庁が指定する期間内に証明書類を提出しなければならない。
- 実用新案が第1項各号の事情に該当しなくても、それが属する技術領域の通常知識を有する者が出願前の従来技術に基づいて明らかに容易に完成することができる場合には、本法により出願し、実用新案登録を受けることができない。
- 第 95 条 実用新案登録を出願した実用新案が、その出願より先に出願され、かつその出願後はじめて公開又は公告された発明若しくは実用新案の明細書又は図面に記載された内容と同一である場合には、実用新案登録を受けることができない。但し、該実用新案登録出願人と先に出願された発明又は実用新案の出願人が同一である場合には、この限りでない。
- 第 96 条 実用新案が、公序良俗又は公衆衛生を害する場合には、実用新案登録を受けることができない。
- 第 97 条 実用新案登録を出願した実用新案について、方式審査の結果、次の各号のいずれかの事情を有すると認めた場合、拒絶査定を下さなければならない。
1. 実用新案が物品の形状、構造又は組み合わせに属さない場合。
 2. 前条の規定に違反する場合。

3. 第 108 条が準用する第 26 条第 1 項、第 4 項に規定する開示方式に違反する場合。
4. 第 108 条が準用する第 32 条の規定に違反する場合。
5. 明細書及び図面に必要事項が開示されていない場合、又はその開示内容が明らかに明確でない場合。

前項の処分を下す前に、期限を指定して意見陳述又は明細書又は図面を補充・補正するよう出願人に通知しなければならない。

第 98 条 実用新案登録を出願した実用新案について、方式審査の結果、前条の規定する事情を有すると認めた場合、理由を明記した処分書を作成し、出願人又はその代理人に送達しなければならない。

第 99 条 実用新案登録を出願した実用新案について、方式審査の結果、第 97 条に規定する拒絶査定すべき事情がないと認めた場合、登録を許可し、請求の範囲及び図面を公告しなければならない。

第 100 条 出願人が明細書又は図面の補充、補正を申請する場合、出願日から 2 ヶ月以内にこれを行わなければならない。

前項により行う補充、補正は、出願当初の明細書又は図面が開示する範囲を超えてはならない。

第 101 条 登録出願された実用新案は、出願者が、実用新案権を付与する旨の処分書送達後 3 ヶ月以内に証書料及び 1 年目の年金を納付した後、はじめて公告される。期間が満了しても前記費用を納付しない場合、公告せず、その実用新案権は最初から存在しなかったものとする。
実用新案登録出願に係る実用新案は、公告日より実用新案権を付与し、証書を交付する。

実用新案権の存続期間は、出願日から起算して 10 年をもって満了とする。

第 102 条 発明特許又は意匠登録を出願した後、これを実用新案の出願に変更する場合、又は実用新案登録を出願した後、これを発明特許の出願に変更する場合は、原出願の出願日を変更後の出願の出願日とする。但し、原出願について許可査定書又は処分書が送達された後、或は原出願の拒絶査定書又は処分書が送達された日から 60 日以上経っている場合には、出願変更を申請することはできない。

第 103 条 実用新案登録出願に係る実用新案の公告後、何人も、第 94 条第 1 項第 1 号、第 2 号、第 4 項、第 95 条又は第 108 条に準用する第 31 条に規定する事情について、特許主務官庁に対し、該実用新案の実用新案技術報告を請求することができる。

特許主務官庁は、前項の実用新案技術報告請求の事実を、特許公報に掲載しなければならない。

特許主務官庁は、第 1 項の請求において、特許審査員を指定して実用新案技術報告を作成させなければならない、並びに該特許審査員は該報告に署名しなければならない。

第 1 項の規定によりなされた実用新案技術報告請求に、特許権者でない者が業として該実用新案を実施していることが明記され、かつ関連証明書類を添付する場合、特許主務官庁は 6 ヶ月以内に実用新案技術報告を完成しなければならない。

実用新案権消滅後も実用新案技術報告を請求することができる。

第 1 項の規定により行った請求は、取り下げることができない。

第 104 条 実用新案権者が実用新案権を行使する際には、実用新案技術報告を提示して警告しなければならない。

第 105 条 実用新案権者の実用新案権が取り消される場合、それが取り消される前に、該実用新案権を行使することによって他人に与えた損害について、賠償責任を負わなければならない。

前項の情況は、実用新案技術報告の内容に基づいて、又は可能な限りの注意を払った上で権利を行使した場合には、過失がなかったものと推定する。

第 106 条 実用新案権者は、本法に別段の規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに該実用新案に係る物品を製造、販売の申し出、販売、使用すること、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。

実用新案権の範囲は、明細書に記載された請求の範囲を基準とし、請求の範囲を解釈する際には、創作説明及び図面を参酌することができる。

第 107 条 次の各号のいずれかに該当する場合、特許主務官庁は、無効審判請求により、その実用新案権を取り消し、並びに期限を指定して証書を返還させなければならない。返還することができない場合には、証書の無効を公告しなければならない。

1. 第 12 条第 1 項、第 93 条から第 96 条、第 100 条第 2 項、第 108 条に準用する第 26 条又は第 108 条に準用する第 31 条の規定に違反する場合。

2. 特許権者が属する国が中華民國国民の特許出願を受理しない場合。

3. 実用新案権者が実用新案登録出願権者でない場合。

利害関係者に限り、第 12 条第 1 項の規定に違反すること、又は前項第 3 号の事情を有することを理由に、無効審判を提起することができる。その他の事情については、何人も、証拠を添付して、特許主務官庁に無効審判を提起することができる。

無効審判査定書には、特許審査員が署名しなければならない。

第 108 条 第 25 条から第 29 条、第 31 条から第 34 条、第 35 条第 2 項、第 42 条、第 45 条第 2 項、第 50 条、第 57 条、第 59 条から第 62 条、第 64 条から第 66 条、第 67 条第 3 項、第 4 項、第 68 条から第 71 条、第 73 条から第 75 条、第 78 条第 1 項、第 2 項、第 4 項、第 79 条から第 86 条、第 88 条から第 92 条までの規定は、実用新案に準用する。

第四章 意匠登録

第 109 条 意匠とは、物品の形状、模様、色彩又はこれらの結合であって、視覚に訴える創作を指す。

類似意匠とは、同一人がその所有する別の意匠に基づいて創作したものであって、その構成が類似しているものを指す。

第 110 条 産業上利用することのできる意匠で、次の各号のいずれかに該当しなければ、本法により出願し、意匠登録を受けることができる。

1. 出願前に既に同一又は類似の意匠が刊行物に記載されたり又は公然実施されたもの。
2. 出願前に既に公然知られたもの。

次のいずれかの事由により、前項各号の事情に至った意匠については、その事実が生じた日から 6 ヶ月以内に出願した場合、前項各号の規定の制限を受けない。

1. 政府が主催する展覧会又は政府の認可を受けた展覧会で展示されたため。
2. 出願人の意図に反して漏洩したもの。

出願人が前項第 1 号の事情を有すると主張する場合、出願時に事実及びその事実が生じた年月日を明記し、並びに特許主務官庁が指定する期間内に証明書類を提出しなければならない。

意匠が、第 1 項各号の事情に該当しなくても、それが属する技術領域の通常知識を有する者が出願前の従来技術に基づいて容易に思いつく場合には、本法により出願し、意匠登録を受けることができない。

同一人が類似の意匠について意匠登録を出願する際は、類似意匠として出願しなければならない。第 1 項及び前項の規定の制限を受けない。

但し、原意匠の出願前に類似意匠と同一又は類似である意匠が既に刊行物に記載されたり、公然使用されたり、若しくは一般の人によく知られていた場合には、本法により出願し、類似意匠登録を受けることができない。

同一人が、類似意匠に類似する意匠について、類似意匠登録を出願することはできない。

第 111 条 意匠登録出願に係る意匠が、その出願より先に出願され、かつその出願後はじめて公告された意匠登録出願に添付されている図面説明書の

内容と同一又は類似である場合には、意匠登録を受けることができない。

但し、該意匠登録出願人と先に出願された意匠登録の出願人が同一である場合には、この限りでない。

第 112 条 次の各号のいずれかに該当するものは、意匠登録を受けることができない。

1. 単に機能上不可欠な設計からなる物品造形。
2. 単なる芸術的創作又は美術工芸品。
3. 集積回路の回路配置及び電子回路の配置。
4. 公序良俗、又は公衆衛生を害する物品。
5. 党旗、国旗、國父（孫文）の肖像、国の紋章、軍旗、印章、勳章と同一又は類似である物品。

第 113 条 意匠登録出願に係る意匠は、許可査定後、出願人は査定書送達後 3 ヶ月以内に証書料及び 1 年目の特許料を納付しなければならず、前記費用が納付されてからはじめて公告される。期限が満了しても納付しない場合、その意匠権は最初から存在しなかったものとする。

意匠登録出願に係る意匠は、公告日より意匠権を付与し、証書を交付する。

意匠権の存続期間は、出願日から起算して 12 年をもって満了とする。類似意匠権の存続期間は、原意匠権の存続期間と同時に満了とする。

第 114 条 発明特許又は実用新案登録を出願した後、これを意匠登録の出願に変更する場合、原出願の出願日を変更後の出願の出願日とする。但し、原出願について許可査定書又は処分書が送達された後、或は原出願の拒絶査定書又は処分書が送達された日から 60 日以上経っている場合には、出願変更を申請することはできない。

第 115 条 独立意匠登録を出願した後、これを類似意匠登録の出願に変更する場合、又は類似意匠登録を出願した後、これを独立意匠登録の出願に変更する場合は、原出願の出願日を変更後の出願の出願日とする。但し、原出願の許可査定書送達後、又は原出願の拒絶査定書が送達された日から 60 日以上経っている場合には、出願変更を申請することはできない。

第 116 条 意匠登録の出願は、意匠登録出願権者が願書、図面説明書を備えて、特許主務官庁にこれを提出しなければならない。

出願権者が使用者、譲受人又は相続人である場合、創作者の氏名を明記し、雇用、譲受又は相続を証明する書類を添付しなければならない。意匠登録の出願は、願書、図面説明書が全て揃った日を出願日とする。前項の図面説明書が外国語で提出され、かつ特許主務官庁が指定する期間内に中国語訳による翻訳文が補正された場合、該外国語の図面説

明書が提出された日を出願日とする。指定された期間内に補正しなかった場合、出願を受理しない。但し、処分前に補正した場合には、補正した日を出願日とする。

第 117 条

前条の図面説明書には、意匠を施す物品の名称、創作の説明、図面の説明及び図面を記載しなければならない。

図面説明書は、該意匠が属する技術領域の通常知識を有する者がその内容を理解し、それに基づいて実施することができるよう、明確かつ十分に開示しなくてはならない。

意匠の図面説明書の開示方式は、本法施行細則で定める。

第 118 条

同一又は類似の意匠について、2 以上の意匠登録出願があった場合、その最先の出願人のみが、意匠登録を受けることができる。但し、後願の出願人が主張する優先日が先願の出願日より早い場合は、この限りでない。

前項の出願日又は優先日が同日である場合は、これを協議により定めるよう出願人に通知しなければならない。協議が成立しない場合には、いずれの出願人も意匠登録を受けることができない。その出願人が同一人である場合、期限を指定していずれか 1 つの出願を選択するよう出願人に通知しなければならない。該期限が過ぎてもいずれか 1 つを選択しない場合は、いずれの出願も意匠登録を受けることができない。各出願人が協議する場合、特許主務官庁は適当な期間を指定して該協議結果を報告するよう出願人に通知しなければならない。該期限が過ぎても報告がなかった場合には、協議が成立しなかったものとみなす。

第 119 条

意匠登録出願は、1 つの意匠ごとに出願を提出しなければならない。意匠登録を出願する際は、その意匠を施す物品を指定しなければならない。

第 120 条

意匠登録出願が第 109 条から第 112 条、第 117 条、第 118 条、第 119 条第 1 項又は第 122 条第 3 項の規定に違反する場合、拒絶査定を行わなければならない。

第 121 条

審査の結果、拒絶すべき理由がないと認めた意匠については、意匠登録を許可し、その図面を公告しなければならない。

第 122 条

特許主務官庁は、意匠登録の審査の際、請求により又は職権で、期限を指定して出願人に次の各号の事項を行うよう通知することができる。

1. 特許主務官庁に出頭して面談に応じる。
2. 模型又は見本を追加する。
3. 図面説明書を補足・補正する。

前項第 2 号の追加された模型又は見本について、特許主務官庁は必要であれば、現場又は指定した場所で実地検証を行うことができる。

第1項第3号による補足・補正は、出願当初の図面説明書が開示する範囲を超えてはならない。

第123条 意匠権者は、該意匠が施された物品について、本法で別に規定がある場合を除き、他人がその同意を得ずに該意匠登録及び類似意匠登録を受けた物品を製造、販売、販売の申し出、使用をしたり、又はこれらを目的として輸入することを排除する権利を専有する。
意匠権の範囲は、図面を基準とし、並びに創作発明を参酌することができる。

第124条 類似意匠権は原意匠権に従属するものであり、単独で主張することはできず、かつ類似の範囲には及ばない。
原意匠権が取り消された又は消滅した場合、類似意匠権も共に取り消される又は消滅する。

第125条 意匠権の効力は、次の各号の事項には及ばない。

1. 研究、授業又は試験のためにその意匠を実施し、営利上の行為ではないもの。
2. 出願前、既に国内で使用されていたもの、又はその必要な準備を既に完了していたもの。但し、出願前の6ヶ月以内に意匠登録出願権者からその意匠を知らされ、意匠登録出願権者がその意匠権を留保する旨の表明をした場合には、この限りでない。
3. 出願前、既に国内に存在していたもの。
4. 単に国境を通過するにすぎない交通手段又はその装置。
5. 意匠登録出願権者でない者が受けた意匠権が意匠登録出願権者による無効審判請求のために取り消された場合、その使用許諾を受けた者が無効審判の請求前に善意で国内で使用していたもの、又は既にその必要な準備を完了していたもの。
6. 意匠権者が製造した、又は意匠権者の同意を得て製造した意匠権物品が販売された後、該物品を使用する、又は再販する行為。前記の製造、販売行為は国内に限らない。

前項第2号及び第5号の使用人は、その原事業内で継続して使用する場合に限る。第6号における販売できる区域は、裁判所が事実に基づいてこれを認定する。

第1項第5号の使用人は、該意匠権が無効審判により取り消された後も、依然として使用している場合、意匠権者による書面通知を受領した日から、意匠権者に合理的な使用料を支払わなくてはならない。

第126条 意匠権者は、意匠を施すものとして指定した物品について、その意匠権を他人に譲渡、信託、使用許諾、又は質権を設定することができるが、その際、特許主務官庁に登録しなければ、第三者に対抗すること

はできない。但し、類似意匠を単独で譲渡、信託、使用許諾、又は質権を設定することはできない。

第 127 条 意匠権者は、意匠登録を受けた図面説明書について、誤記又は不明瞭な事項についてのみ、特許主務官庁に補正を請求することができる。特許主務官庁は、補正を許可した後、その事由を特許公報に掲載しなければならない。

図面説明が補正公告された場合、出願日に溯って発効する。

第 128 条 次の各号のいずれかに該当する場合、特許主務官庁は、無効審判請求により又は職権で、その意匠権を取り消し、かつ期限を指定して証書を返還させなければならない。返還することができない場合には、証書の無効を公告しなければならない。

1. 第 12 条第 1 項、第 109 条から第 112 条、第 117 条、第 118 条又は第 122 条第 3 項の規定に違反する場合。
2. 意匠権者の属する国が中華民国国民の意匠登録出願を受理しない場合。
3. 意匠権者が意匠登録出願権者ではない場合。

利害関係者に限り、第 12 条第 1 項の規定に違反すること、又は前項第 3 号を有することを理由に、無効審判を提起することができる。その他の事情については、何人も、証拠を添付して、特許主務官庁に対し無効審判を提起することができる。

第 129 条 第 27 条、第 28 条、第 33 条から第 35 条、第 42 条、第 43 条、第 45 条第 2 項、第 46 条、第 47 条、第 60 条から第 62 条、第 65 条、第 66 条、第 67 条第 3 項、第 4 項、第 68 条から第 71 条、第 73 条から第 75 条、第 79 条から第 86 条、第 88 条から第 92 条の規定は、意匠に準用する。第 27 条第 1 項が規定する期間は、意匠登録において 6 ヶ月とする。

第五章 付 則

第 130 条 特許主務官庁は、特許ファイルの出願書類、明細書、図面及び図面説明を、永久に保存しなければならない。その他書類のファイルは、少なくとも 30 年間保存しなければならない。

前項の特許ファイルは、マイクロフィルム、磁気ディスク、磁気テープ、光ディスクなどで保存することができる。前項の保存記録は、特許主務官庁が確認したものに限り、原ファイルと同一とみなし、元のペーパーファイルを廃棄することができる。保存記録の複製品は、特許主務官庁の確認を得た場合、それが真正品であると推定する。

前項の保存代用物の確認、管理、使用上の規則は、主務官庁が定める。

第 131 条 主務官庁は、発明、創作を奨励するために、奨励補助制度を定めることができる。

- 第 132 条 1994 年 1 月 23 日より前に提出された出願は、第 52 条の規定により特許存続期間の延長を申請することができない。
- 第 133 条 本法 2001 年 10 月 24 日改正法の施行前(理律注:2001 年 10 月 26 日前)に提出された追加特許出願で、いまだに査定が確定していないもの、又は該追加特許出願の特許権がまだ存続しているものは、改正前の追加特許に関する規定により取り扱う。
- 第 134 条 本法 1994 年 1 月 21 日改正法の施行前(理律注:1994 年 1 月 23 日前)に公告された特許の特許権存続期間は、改正施行前の規定を適用する。但し、WTO 協定が中華民国国内で発効した日に特許権がまだ存続している発明特許の特許権存続期間については、改正施行後の規定を適用する。
本法 2003 年 1 月 3 日改正法の施行前(理律注:2004 年 7 月 1 日前)に公告された実用新案権の存続期間は、改正施行前の規定を適用する。WTO 協定が中華民国国内で発効した日(理律注:2002 年 1 月 1 日)に権利がまだ存続している意匠の意匠権存続期間については、1997 年 5 月 7 日改正法施行後の本法規定を適用する。
- 第 135 条 本法 2003 年 1 月 3 日改正法の施行前(理律注:2004 年 7 月 1 日前)にまだ登録査定されていなかった発明特許出願、実用新案登録出願、意匠登録出願は、改正施行後の規定を適用する。
- 第 136 条 本法 2003 年 1 月 3 日改正法の施行前(理律注:2004 年 7 月 1 日前)に既に提出されていた異議申立は、改正施行前の規定を適用する。
本法 2003 年 1 月 3 日改正法の施行前(理律注:2004 年 7 月 1 日前)に既に公告されていた特許は、改正施行後も改正施行前の規定により異議申立を提起することができる。
- 第 137 条 本法の施行規則は、主務官庁が定める。
- 第138条 本法は、第 11 条が公布日から施行される以外、その他の条文の施行日は行政院が定める。

台湾商標法

2003年04月29日改正

2003年05月28日公布

2003年11月28日施行

第一章 総 則

- 第 1 条 商標権及び消費者の利益を保証し、市場の公正な競争を維持し、商工業の健全な発展を促進するため、本法を制定する。
- 第 2 条 自己の商品又は役務を表彰するために、商標権を取得しようとする者は、本法の規定により商標登録を出願しなければならない。
- 第 3 条 外国人の所属する国が、台湾と商標に関する相互保護条約又は協定を締結しておらず、又はその国の法令により台湾国民による商標登録出願を受理しない場合は、該外国人の商標登録の出願を不受理とすることができる。
- 第 4 条 台湾と相互に優先権を承認している国において合法的に登録出願した商標を、その出願人が該外国における最初の出願日の翌日から 6 ヶ月以内に台湾に登録出願した場合、該外国の出願に基づく優先権を主張することができる。
前項の規定に基づき優先権を主張する者は、出願と同時に優先権を主張する旨の声明を提出し、且つ願書に該商標の外国での出願日及び該出願を受理した国名を記載しなければならない。
出願人は、出願日から 3 ヶ月以内に、前項の該外国政府が出願受理を証明した出願書類を提出しなければならない。
前二項の規定に違反した場合、優先権を失う。
優先権を主張する場合、その登録出願日は優先日を基準とする。
- 第 5 条 商標は文字、図形、記号、色彩、音、立体形状又はこれらの結合で構成することができる。
前項の商標は、その商品又は役務の関連消費者にそれが該商品又は役務を表彰する標識であると認識させることができ、且つそれによって他人の商品と区別できるものでなければならない。
- 第 6 条 本法において商標の使用とは、販売の目的で商標を商品、役務又はその関連物件に用いたり、若しくは平面画像、デジタルマルチメディア、電子メディア又はその他媒介物を利用して、関連消費者にそれが商標であると認識させることができるものをいう。

- 第 7 条 本法において主務官庁とは、経済部をいう。
商標業務は、経済部が指定する専門機関が執り行うものとする。
- 第 8 条 商標登録出願及びその関連事務は、商標代理人に委任してこれを行わせることができる。但し、台湾内に住所又は営業所を有していない者は、商標代理人に委任してこれを行わせなければならない。
商標代理人は国内に住所を有していなければならない。それが専業である場合は、法律に別段の規定がある場合を除き、商標師に限る。商標師の資格及び管理は、法律で定める。
- 第 9 条 出願人の為す商標に関する出願及びその他の手続が、法定期間を遅延した場合、又は法定手続に合致せず補正することができない場合、又は補正期限を過ぎても補正しない場合は、却下しなければならない。出願人が災害又は自己の責任に帰すことのできない事由により法定期間を遅延した場合、その原因が消滅した後 30 日以内に書面で理由を説明し、商標主務官庁に原状回復を申請することができる。但し、法定期間を遅延してすでに 1 年が経過しているものは、前記の原状回復を申請することができない。
原状回復の申請は、それと同時に期間内にしかるべき手続を補完しなければならない。
- 第 10 条 商標に関する出願及びその他の手続は、書類又は物件が主務官庁に送達された日を基準としなければならない。郵送の場合は、郵送地の消印の日付を基準とする。
郵送地の消印の日付が明瞭でないものは、当事者が証拠を挙げる場合を除き、商標主務官庁に送達された日を基準とする。
- 第 11 条 商標登録及びその他商標に関する各申請をするときは、官納料を納付しなければならない。
商標の官納料の金額は、主務官庁が命令を以ってこれを定める。
- 第 12 条 商標主務官庁は、公報を発行し、登録商標及びそれに関する必要事項を掲載しなければならない。
- 第 13 条 商標主務官庁は商標登録簿を備え、商標登録、商標権の変動及び法令に定める一切の事項を掲載しなければならない。且つ、これを外部に公開しなければならない。
前項の商標登録簿は、電子方式でこれを為すことができる。
- 第 14 条 商標に関する出願及びその他手続は、電子方式でこれを為すことができる。その実施日、出願手続及びその他行うべき事項に係る方法は、主務官庁がこれを定める。
- 第 15 条 商標主務官庁は、商標登録の出願、異議、無効審判及び撤回案件に係る審査について、審査官を指定して、これを審査させなければならない。
前項の審査官の資格は、法律で定める。

第 16 条 商標主務官庁は、前条第 1 項の案件に係る審査について、理由を記載した処分書を作成し、出願人に送達しなければならない。
前項の処分書には審査官が署名しなければならない。

第二章 登録出願

第 17 条 商標登録の出願は、出願人が、商標、使用を指定する商品又は役務及びその区分を明記した願書を備えて、商標主務官庁にこれを出願しなければならない。

前項の商標は、視覚で感知することのできる図案でこれを表示しなければならない。

商標登録の出願は、出願人、商標図案及び使用を指定する商品又は役務を明記した願書を以って出願を提出した日を出願日とする。

出願人は、1 つの商標登録出願を以って、2 以上の区分の商品又は役務への使用を指定することができる。

商品又は役務の分類は、本法施行細則でこれを定める。

類似する商品又は役務の認定は、前項の商品又は役務の区分の制限を受けない。

第 18 条 2 人以上の者が同日に同一又は類似の商標を以って、同一又は類似の商品又は役務についてそれぞれ個別に登録を出願した結果、関連する消費者に混同誤認を生じさせる虞があり、また時間の前後を判断することができない場合、各出願人の協議によりこれを定める。協議が成立しない場合は、抽選によりこれを定める。

第 19 条 説明的な又は識別性のない文字、図形、記号、色彩又は立体形状を含む商標が、該部分を削除することにより、その商標の完全性を喪失する場合、該部分の専用権を放棄する旨の出願人の声明により、該商標の登録を受けることができる。

第 20 条 商標登録の出願事項の変更は、商標主務官庁にその許可を申請しなければならない。

商標及びその使用を指定する商品又は役務は、出願後、変更することができない。但し、使用を指定する商品又は役務の縮減は、この限りでない。

第 1 項の変更は、1 商標ごとにそれぞれ個別に申請しなければならない。但し、同一人が 2 以上の出願案を有し、その変更事項が同一である場合には、1 つの変更申請で同時にこの変更を申請することができる。

第 21 条 出願人は使用を指定した商品又は役務について、商標主務官庁に対し、2 以上の登録出願への分割を請求し、原登録出願日を出願日とすることができる。

第 22 条 商標登録出願により生じた権利は、他人に移転することができる。

前項の権利を譲り受ける者は、原出願人の名義変更の許可を受けなければ、第三者に対抗することができない。

第三章 審査及び許可

第 23 条 次の各号のいずれかの事情に該当する商標は、登録することができない。

1. 第 5 条の規定に合致しないもの。
2. 商品又は役務の形状、品質、用途又はその他の説明を表示するもの。
3. 指定する商品又は役務の慣用標章又は名称であるもの。
4. 商品又は包装の立体形状が、その機能を確保するために必要であるもの。
5. 台湾の国旗、国の紋章、国璽、軍旗、軍の徽章、印章、勲章又は外国の国旗と同一又は類似のもの。
6. 国父（孫文）又は国家元首の肖像又は氏名と同一のもの。
7. 台湾の政府機関、又は展覧的な性質を有する集会の標章又はこれらが授与する表彰状等と同一又は類似のもの。
8. 国際的な組織又は国内外の著名な組織の名称、記章、徽章、標章と同一又は類似のもの。
9. 正マーク（日本の G マークに相当）又はこれと同じ性質を有する国内外の査証マークと同一又は類似のもの。
10. 公序良俗を害するもの。
11. 公衆にその商品又は役務の性質、品質又は産地について誤認、誤信させるおそれがあるもの。
12. 他人の著名な商標又は標章と同一又は類似のもので、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれがあるもの、或は著名な商標又は標章の識別性又は信用を損なうおそれがあるもの。但し、出願人が商標又は標章の所有者の同意を得て登録出願する場合は、この限りでない。
13. 同一又は類似の商品又は役務についての他人の登録商標或はそれらについて他人が先に出願した商標と同一又は類似のもので、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがあるもの。但し、該登録商標又は先に登録出願された商標の所有者の同意を得て登録出願する場合は、これら両者の商標及び指定商品又は指定役務が同一である場合を除き、この限りでない。
14. 同一又は類似の商品又は役務について他人が先に使用している商標と同一又は類似のものであって、出願人が当該他人との間に契約、地縁、業務上の取引又はその他の関係を有することにより、

該他人の商標の存在を知っている場合。但し、該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。

15. 他人の肖像又は著名な氏名、芸名、ペンネームを有するもの。但し、該他人の同意を得て登録出願したものはこの限りでない。
16. 著名な法人、商号又はその他の団体の名称を有し、関連する公衆に混同誤認を生じさせるおそれのあるもの。
17. 商標が他人の著作権、特許権又はその他の権利を侵害し、判決によりそれが確定したもの。但し、該他人の同意を得て登録出願した場合は、この限りでない。
18. 台湾又は台湾と商標の保護を相互に承認する国家又は地区に係る酒類の産地表示と同一又は類似のもので、酒類商品への使用を指定するもの。

前項第 12 号、第 14 号から第 16 号及び第 18 号に規定する場合は、出願時を基準とする。

第 1 項第 7 号及び第 8 号の規定は、政府機関又は関連機関が出願人であるとき、これを適用しない。

第 1 項第 2 号に規定する状況を有する又は第 5 条第 2 項に規定する状況に合致しないものであって、出願人により使用され、且つ取引上すでに該出願人の商品又は役務を識別する標識となっている場合は、これを適用しない。

第 24 条 商標登録出願について審査の結果、前条第 1 項又は第 59 条第 4 項に規定する状況を有し登録することができないと認めた場合は、拒絶査定をしなければならない。

前項の拒絶査定の前に、拒絶査定理由を出願人に書面で通知し、且つそれが送達された翌日から 30 日以内に意見を陳述するよう指定しなければならない。

第 25 条 商標登録出願について審査した結果、前条第 1 項の規定する状況がない場合には許可査定をしなければならない。

許可査定を受けた商標につき、出願人は査定書送達の日から 2 ヶ月以内に登録料を納付しなければならない。登録料納付後、はじめて登録公告され、且つ商標登録証が交付される。期間が満了しても登録料を納付しない場合、登録公告せず、原許可査定は、その効力を失う。

第 26 条 前条第 2 項の登録料は 2 期に分けて納付することができる。登録料を 2 期に分けて納付する場合、第 2 期目の登録料は、登録公告日から起算して満 3 年になる前の 3 ヶ月以内に納付しなければならない。

第 2 期目の登録料を前項の期間内に納付しなかった場合、期間が満了してから 6 ヶ月以内に規定の登録料の倍額を納付することができる。

前項の規定により納付しなかった場合、商標権は該倍額の登録料の納付期限の翌日から消滅する。

第四章 商標権

第 27 条 商標は登録公告の日から登録者が商標権を取得し、商標権の存続期間は 10 年とする。

商標の存続期間は更新登録することができ、一回ごとの更新期間は 10 年とする。

第 28 条 商標権の存続期間の更新登録を申請する場合、期間満了 6 ヶ月前から期間終了後 6 ヶ月以内の間に申請しなければならない。期間終了後 6 ヶ月以内に申請する場合は、倍額の登録料を納付しなければならない。前項の延長許可を受けた期間は、商標権の存続期間が満了した翌日から起算する。

第 29 条 商標権者は登録された指定商品又は指定役務において、その登録商標を専用する権利を取得する。

本法第 30 条に別段の規定がある場合を除き、次に掲げる状況については、商標権者の同意を得なければならない。

1. 同一の商品又は役務において、その登録商標と同一の商標を使用する場合。
2. 類似の商品又は役務において、その登録商標と同一の商標を使用することにより、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。
3. 同一又は類似の商品又は役務において、その登録商標と類似の商標を使用することにより、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。

第 30 条 次に掲げる状況は、他人の商標権の効力による拘束を受けない。

1. 善意且つ合理的に使用方法で、自己の氏名、名称又はその商品又は役務の名称、形状、品質、用途、産地又はその他商品又は役務自体に関する説明を表示し、商標として使用しない場合。
2. 商品又は包装の立体形状が、その機能を確保するために必要である場合。
3. 他人の商標の登録出願日前に、善意で同一又は類似の商標を同一又は類似の商品又は役務に使用する場合。但し、それは原使用の商品又は役務に限る。その場合、商標権者は、該商標を使用する者に対して、適当な区別表示の付記を要求することができる。

登録商標を付した商品が、商標権者又はその同意を得た者により市場で取引され流通する場合、或は関連機関が法により競売又は処置する場合、商標権者は該商品について商標権を主張することができない。

但し、商品の変質、毀損を防止するため、又はその他正当な事由がある場合はこの限りでない。

第 31 条 商標権者は、登録商標の使用を指定した商品又は役務について、商標主務官庁に対し、商標権の分割を申請することができる。
前項の商標権の分割申請は、商標の異議又は無効審判案件が確定する前でも、これを為すことができる。

第 32 条 商標の登録事項の変更は、商標主務官庁に登録しなければならない。未登記の場合は、第三者に対抗することができない。

商標及びその使用を指定する商品又は役務は、登録後、変更することができない。但し、指定商品又は役務の縮減は、この限りでない。

第 20 条第 3 項及び前条第 2 項の規定は、商標登録事項の変更は、これを準用する。

第 33 条 商標権者は、その登録商標の使用を指定した商品又は役務の全部又は一部について、その商標の使用を他人に許諾することができる。

前項の使用許諾は、商標主務官庁に登録しなければならない。未登記の場合は、第三者に対抗することができない。使用許諾を受けた者が商標権者の同意を得て他人に使用権を再許諾する場合も、同様とする。使用許諾の登記後、商標権を移転する場合、その使用許諾契約は譲受人に対しても継続して効力を有する。

使用許諾を受けた者は、その商品、包装、容器上に又は営業上の物品、書類に、明らか且つ容易に識別できるよう、商標の使用許諾を受けた旨の標示をしなければならない。標示することが明らかに難しい場合には、営業場所又はその他の関連物品上に、使用許諾を受けた旨の標示をすることができる。

第 34 条 使用許諾を受けた者が前条第 4 項の規定に違反し、商標主務官庁が職権で又は請求により、一定期間内に改善すべき旨の通達をしたにもかかわらず、その期間が満了しても改善しない場合、その商標使用許諾は取り消されなければならない。

商標の使用許諾期間が満了する前に、次の各号のいずれかの事情に該当する場合、当事者又は利害関係人は関連証拠を提出して商標の使用許諾登記の撤回を申請することができる。

1. 商標権者及び使用許諾を受けた者双方が終了に同意する場合。それが再使用許諾された場合も同様とする。
2. 使用許諾契約に、商標権者又は使用許諾を受けた者が任意にその使用許諾関係を終了することができる旨明確に規定されており、当事者が終了を表明する場合。

3. 商標権者が、使用許諾を受けた者が使用許諾契約の約定に違反したことを以って、使用許諾を受けた者に使用許諾契約の解除又は終了を通知し、使用許諾を受けた者に異議がない場合。

第 35 条 商標権の移転は、商標主務官庁に登録しなければならない。未登記の場合は第三者に対抗することができない。

第 36 条 商標権を移転した結果、2 以上の商標権者が類似の商品又は役務に同一の商標を使用し、或は同一又は類似の商品又は役務に類似の商標を使用して、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれのある場合、各商標権者は使用時に適当な区別表示を付さなければならない。

第 37 条 商標権者は、質権の設定、及び質権の変更、消滅について、商標主務官庁に登録しなければならない。未登録の場合は第三者に対抗することができない。

商標権者が複数の債権の担保とするために商標権について複数の質権を設定する場合、その順序は登記の後先によりこれを定める。

質権の存続期間において、質権者が商標権者の許諾を得ずに該商標を使用することはできない。

第 38 条 商標権者は商標権を放棄することができる。但し、使用許諾登記又は質権登記のある場合は、使用許諾を受けた者又は質権者の同意を得なければならない。

前項の放棄は、書面で商標主務官庁に対しこれを行わなければならない。

第 39 条 次の各号のいずれかの事情に該当する場合、その商標権は消滅する。

1. 第 28 条の規定により更新登録をしなかった場合。
2. 商標権者が死亡し、且つ相続人がいない場合。

第五章 異議

第 40 条 商標の登録が第 23 条第 1 項又は第 59 条第 4 項の規定する情況に違反する場合、何人も、商標登録公告の日から 3 ヶ月以内に、商標主務官庁に対して異議を申し立てることができる。

前項の異議は、登録商標の使用を指定する一部の商品又は役務についてこれを行うことができる。

異議は 1 登録商標ごとにそれぞれ個別にこれを申請しなければならない。

第 41 条 異議を申し立てる者は、事実及び理由を明記した異議申立書に副本を添えなければならない。異議申立書に添付書類がある場合、副本にもそれを添付しなければならない。

商標主務官庁が異議申立が書式に合わず補正可能と認める場合、期限を定めて補正するよう通知しなければならない。

- 商標主務官庁は、第 1 項の副本及び添付書類を商標権者に送達し、期限を定めて答弁させなければならない。
- 第 42 条 異議申立ては、かつて原案を審査したことの無い審査官を指定して、これを審査させなければならない。
- 第 43 条 異議申立て人又は商標権者は、市場調査報告を証拠として提出することができる。
商標主務官庁は、異議申立て人又は商標権者に、市場調査報告について意見を陳述する機会を与えなければならない。
商標主務官庁は、当事者の陳述した意見及び市場調査報告結果について、総合的にこれを判断しなければならない。
- 第 44 条 異議申立て手続が進行中に、異議申立てを受けた商標権が移転した場合、異議申立て手続は影響を受けない。
前項の商標権譲受人は異議申立てを受けた者の地位を引き継ぐことを表明し、異議申立て手続を続行することができる。
- 第 45 条 異議申立て人は異議審決書送達前に、その異議申立てを取り下げることができる。
異議申立て人が異議申立てを取り下げた場合、同一の事実、同一の証拠及び同一の理由を以って、再度、異議申立て又は無効審判を提起することはできない。
- 第 46 条 異議申立て案件について審決で異議が成立した場合、その登録を取り消さなければならない。
- 第 47 条 前条の取消の事由が、登録商標がその使用を指定する一部の商品又は役務にある場合、該一部の商品又は役務についてのみその登録を取り消すことができる。
- 第 48 条 異議確定後の登録商標については、何人も、同一の事実、同一の証拠及び同一の理由に基づいて無効審判を請求することはできない。
- 第 49 条 異議申立て手続進行中、商標権に関する民事又は刑事訴訟が提出された場合、異議審決の確定前に、その訴訟手続の進行を停止することができる。

第六章 無効審判及び撤回

第一節 無効審判

- 第 50 条 商標の登録が第 23 条第 1 項又は第 59 条第 4 項の規定する情況に違反して為された場合、利害関係人又は審査官は、商標主務官庁に対し、その登録の無効審判請求を提出することができる。
商標登録前に、他人の著作権、特許権又はその他の権利を侵害し、登録後に裁判所の判決で侵害が確定した場合、前項の規定を準用する。

- 第 51 条 商標の登録が第 23 第 1 項第 1 号、第 2 号、第 12 号から第 17 号、又は第 59 条第 4 項の規定する情況に違反してなされた場合、登録公告の日から 5 年を経過したものについては、無効審判を請求又は提起することができない。
- 前条第 2 項の規定する情況は、その判決が確定した日から 5 年を経過している場合には、出願又は無効審判請求を提出することができない。
- 商標の登録に第 23 条第 1 項第 12 号の情況があり、それが悪意で為されたものである場合、第 1 項の期間の制限を受けない。
- 第 52 条 無効審判に係る商標の登録に関する違法の事由の有無は、その登録公告時の規定による。
- 第 53 条 商標の無効審判案件は、商標主務官庁の長官が無効審判審査委員として 3 名以上の審査官を指定して、これを審査させる。
- 第 54 条 無効審判案件につき審決により無効審判が成立した場合、その登録を取り消さなければならない。但し、審決時に、該情況がすでに存在しない場合、公益及び当事者の利益を参酌した後、不成立の審決を下すことができる。
- 第 55 条 無効審判案件の審決が確定した後は、何人も、同一の事実、同一の証拠及び同一の理由に基づいて無効審判を請求することはできない。
- 第 56 条 第 40 条第 2 項、第 3 項、第 41 条第 1 項、第 2 項、第 42 条から第 45 条、第 47 条及び第 49 条の規定は、商標の無効審判にこれを準用する。

第二節 撤回

- 第 57 条 商標登録後、次の各号のいずれかの情況に該当する場合、商標主務官庁は、職権で又は利害関係人の請求により、その登録を撤回することができる。
1. 勝手に登録商標を変更し又は付記を加え、他人が同一又は類似の商品又は役務において使用している登録商標と同一又は類似させ、関連消費者に混同誤認を生じさせるおそれのある場合。
 2. 正当な事由なく使用せず又は使用を停止し続けて、すでに 3 年が経過した場合。但し、使用許諾を受けた者が使用する場合は、この限りでない。
 3. 第 36 条の規定により適当な区別表示を付していない場合。但し、商標主務官庁の処分前に区別表示を付し、且つ混同誤認を生じるおそれがない場合は、この限りでない。
 4. 商標がすでにその指定商品又は指定役務に係る慣用標章、名称又は形状となっている場合。
 5. 商標が実際に使用されると、公衆がその商品又は役務の性質、品質又は産地を誤認誤信するおそれがある場合。

6. 商標を使用した結果、他人の著作権、特許権又はその他の権利を侵害し、裁判所の判決で侵害が確定した場合。

使用許諾を受けた者が前項第1号の行為を為し、商標権者は該行為を明らかに知っていた、又は知っていたはずであるにもかかわらず、反対を表明しなかった場合も同様とする。

第1項第2号に規定する状況があり、撤回申請時に該登録商標がすでに使用されていた場合、他人の撤回申請を知って、該撤回申請前の3ヶ月内に使用を開始した場合を除き、その登録を撤回しない。

撤回の事由が、登録商標の使用を指定する一部の商品又は役務にのみ存在する場合、該一部の商品又は役務についてその登録を取り消すことができる。

第58条 商標権者が、次の各号のいずれかの行為を為した場合、その登録商標を使用したと認めなければならない。

1. 実際に使用した商標とその登録商標が異なっているものの、社会の一般通念によれば決して同一性を失っていない場合。
2. 輸出を目的とする商品又はその関連物件上に、登録商標を標示する場合。

第59条 商標主務官庁は撤回申請の事情を商標権者に通知し、並びに期限を定めて答弁させなければならない。但し、出願人の申請が具体的な証拠を欠き、又はその主張に明らかに理由がない場合には、直接却下することができる。

第57条第1項第2号に規定する状況は、その答弁通知が送達された場合、商標権者はその使用の事実を証明しなければならない。期間が満了しても答弁しなかった場合、その登録を直接撤回することができる。前項の商標権者が証明するその使用の事実は、商業取引の習慣に合致しなければならない。

登録商標に第57条第1項第1号、第6号に規定する事情があり、その登録が撤回された場合、原商標権者は撤回の日から3年間、原登録図案と同一又は類似の商標を同一又は類似の商品又は役務において登録し、又は譲受けし、又は使用許諾を受けることができない。それが商標主務官庁の処分前に、商標権の放棄を声明した場合も、同様である。

第60条 第40条第2項、第3項、第41条第1項、第2項、第42条から第44条の規定は、撤回案の審査にこれを準用する。

第七章 権利侵害の救済

第61条 商標権者は、その商標権を侵害した者に対し、損害賠償及びその侵害の排除を請求することができる。侵害のおそれがある場合、侵害の防止を請求することができる。

商標権者の同意を得ずに、第 29 条第 2 項の各号のいずれかの事情を有する場合、商標権の侵害とする。

商標権者が第 1 項の規定により請求するとき、商標権侵害に係る物品、又は侵害行為に利用される原料又は器具について、廃棄又はその他の必要な処置を請求することができる。

第 62 条 商標権者の同意を得ずに、次の各号のいずれかの状況を有する場合、商標権の侵害と見なす。

1. 他人の著名な登録商標であることを明らかに知りながら、同一又は類似の商標を使用し、又は該著名商標中の文字を自己の会社名称、商号名称、ドメインネーム、或はその他の営業主体又は供給元を表彰する標識とし、著名商標の識別性又は信用を損なう場合。
2. 他人の登録商標であることを明らかに知りながら、該商標中の文字を自己の会社名称、商号名称、ドメインネーム、或はその他の営業主体又は供給元を表彰する標識とし、商品又は役務に関連する消費者に混同誤認を生じさせる場合。

第 63 条 商標権者が損害賠償を請求する場合、次の各号のいずれかの方法により、その損害を計算することができる。

1. 民法第 216 条の規定による。但し、その損害を証明するための証拠、方法を提供することができない場合、商標権者は、その登録商標を使用することによって通常得られる利益から、侵害された後同一商標の使用によって得た利益を控除した差額を、その受けた損害とすることができる。
2. 商標権侵害者がその侵害行為によって得た利益による。商標権侵害者がそのコスト又は必要経費について立証できない場合は、該商品を販売して得た収入の全部を侵害者の受けた利益とする。
3. 押収した商標権侵害に係る商品の小売り単価の 500 倍から 1500 倍までの金額による。但し、押収した商品が 1500 個を超える場合は、その総額を賠償額とする。

前項の賠償額が明らかに不相当である場合、裁判所はこれを減額することができる。

商標権者の業務上の信用が侵害によって損われた場合、第 1 項の規定以外にも、相当する金額の賠償を別途請求することができる。

第 64 条 商標権者は、商標権侵害者の費用負担で、商標権侵害の事実に係る判決書の内容の全部又は一部を新聞に掲載することができる。

第 65 条 商標権者は、その商標権を侵害する物品の輸出入に対して、税関でひとまず差し止めるよう申請することができる。

前項の申請は、書面で行い、並びに侵害の事実を釈明し、且つ税関が見積った該輸入貨物税価格又は輸出貨物 FOB 価格に相当する保証金を提供しなければならない。

税関は、差止め申請を受理した場合、即刻、申請人に通知しなければならない。前項の規定に合致すると認めて差止めを実施するとき、書面で申請人及び差止めを受ける者に通知しなければならない。

差止めを受ける者は、第 2 項の保証金の 2 倍の保証金又は相当の担保を提供し、税関に差止めの撤回を請求することができ、並びに輸出入貨物に関連する通関規定により取扱う。

税関は、差止め物の機密資料保護を損なわないという状況下において、申請人又は押収を受ける者の申請により、それに対し差止め物の検視を許可することができる。

差止め物につき、商標権侵害であるとする確定判決を申請人が取得した場合、第 66 条第 4 項規定の状況を除き、差止めを受ける者が差止め物のコンテナ延滞料、倉敷料、積み下ろし費用などの関連費用を負担しなければならない。

第 66 条

次の各号のいずれかの状況に該当する場合、税関は差止めを撤回しなければならない。

1. 申請人が税関から差止め受理を通知された日から 12 日以内に、第 61 条の規定により差止め物である侵害物について訴訟を提起せず、並びに税関に通知しなかった場合。
2. 申請人が差止め物である侵害物について提起した訴訟につき、裁判所より却下確定の裁定が下された場合。
3. 差止め物につき、商標権を侵害する物ではないとする確定判決が裁判所より下された場合。
4. 申請人が差止めの撤回を申請した場合。
5. 前条第 4 項の規定に合致する場合。

前項第 1 号に規定する期限につき、税関は必要に応じて 12 日間延長することができる。

税関が第 1 項の規定により差止めを撤回する場合、輸出入貨物に関連する通関規定により行わなければならない。

差止めが第 1 項第 1 号から第 4 号の事由により撤回された場合、申請人が差止め物のコンテナ延滞料、倉敷料、積み下ろし費用などの関連費用を負担しなければならない。

第 67 条

差止め物につき商標権を侵害する物ではないとする確定判決が裁判所より下された場合、申請人は、差止めを受けた者が差止め又は第 65 条第 4 項規定の保証金の提供により受けた損害を賠償しなければならない。

申請人は第 65 条第 4 項規定の保証金につき、差止めを受けた者は第 65 条第 2 項規定の保証金につき、質権者と同一の権利を有する。但し、前条第 4 項及び第 65 条第 6 項が規定するコンテナ延滞料、倉敷料、積み下ろし費用などの関連費用は、申請人又は差止めを受けた者の損害補償に優先する。

次の各号のいずれかの情況に該当する場合、税関は申請人の申請により、第 65 条第 2 項規定の保証金を返還しなければならない。

1. 申請人が勝訴の確定判決を受け、又は差止めを受けた者と和解し、すでに保証金を提供し続ける必要がない場合。
2. 前条第 1 項第 1 号から第 4 号が規定する事由により差止めが撤回され、差止めを受けた者が損害を受けた後、又は差止めを受けた者が勝訴の確定判決を受けた後、申請人が、すでに 20 日以上の間を定めて、差止めを受けた者に権利を行使するよう催告したにもかかわらず、行使しなかった場合。
3. 差止めを受けた者が返還に同意した場合。

次の各号のいずれかの情況に該当する場合、税関は差止めを受けた者の申請により、第 65 条第 4 項規定の保証金を返還しなければならない。

1. 前条第 1 項第 1 号から第 4 号が規定する事由により差止めが撤回され、又は差止めを受けた者が申請人と和解し、すでに保証金を提供し続ける必要がない場合。
2. 申請人が勝訴の確定判決を受けた後、差止めを受けた者が、すでに 20 日以上の間を定めて、申請人に権利を行使するよう催告したにもかかわらず、行使しなかった場合。
3. 申請人が返還に同意した場合。

第 68 条 前三条が規定する、差止め請求、差止めの撤回、差止め物の検視、保証金又は担保の納付、提供、返還の手続、備えるべき書類及びその他の遂行すべき事項に係る規則は、主務官庁が財政部と合同でこれを定める。

第 69 条 第 33 条の規定により使用許諾を受けて商標を使用する者が、その使用権を侵害された場合、本章の規定を準用する。

第 70 条 外国法人又は団体は認可・許可を受けた者に限らず、本法に規定されている事項について、告訴、自訴又は民事訴訟を提起することができる

第 71 条 裁判所は、商標に係る訴訟事件について、専門法廷を設置して又は専門の担当者を指定して、審理を行わせることができる。

第八章 証明標章、団体標章及び団体商標

- 第 72 条 標章を以って他人の商品又は役務の特性、品質、精密度、産地又はその他の事項に証明を与える者が、その標章を専用しようとする場合、証明標章の登録出願をしなければならない。
証明標章の出願人は、他人の商品又は役務を証明する能力を有する法人、団体又は政府機関に限る。
前項の出願人が、それが証明しようとする商品又は役務に係る業務に従事している場合、登録出願することはできない。
- 第 73 条 証明標章の使用とは、証明標章権者が他人の商品又は役務の特性、品質、精密度、産地又はその他の事項を証明する意味で、それが商品又は役務に関連する物品又は書類上に該証明標章を表示することに同意することを指す。
- 第 74 条 法人資格を有する組合、協会又はその他の団体が、その組織又は会員籍を表彰するために、標章を専用しようとする場合は、団体標章の登録出願をしなければならない。
前項の団体標章登録の出願は、関連事項を明記した出願書を以って、並びに団体標章の使用規範を添付して、商標主務官庁に対しこれを出願しなければならない。
- 第 75 条 団体標章の使用とは、団体又はその会員身分を表彰するために、団体又はその会員が関連する物品又は書類上に標章を標示することを指す。
- 第 76 条 法人資格を有する組合、協会又はその他の団体が、該団体の構成員が提供する商品又は役務を表彰しようとし、並びにそれによって他人の提供する商品又は役務と互いに区別することができるように表彰を専用しようとする場合、団体商標として登録出願することができる。
前項の団体商標登録に係る出願は、商品又は役務の区分及び名称を記載した出願書をもって、並びに団体商標の使用規範を添付して、商標主務官庁に対しこれを行うことができる。
- 第 77 条 団体商標の使用とは、団体の構成員が提供する商品又は役務を表彰するために、団体の構成員が団体商標を商品又は役務上に使用し、並びにそれをもって他人の商品又は役務と互いに区別することができる場合を指す。
- 第 78 条 証明標章権、団体標章権又は団体商標権は、移転、他人への使用許諾、質権の設定をすることができない。但し、その移転又は他人への使用許諾が、消費者の利益に損害を与えず、且つ公正な競争に違反するおそれがなく、商標主務官庁の許可を受けた場合は、この限りでない。
- 第 79 条 標章権者又は使用許諾を受けた者が、証明標章、団体標章又は団体商標を不当に使用し、他人又は公衆に損害が生じた場合、商標主務官庁

は、何人を問わずその請求により又は職権でその登録を撤回することができる。

前項にいう不当な使用とは、次の各号のいずれかの状況を指す。

1. 証明標章を商標として使用する、或は証明標章権者の商品又は役務に関連する物品又は書類上に標示する。
2. 団体標章又は団体商標の使用が、社会公衆に該団体の性質を誤認させる。
3. 前条の規定に違反して、移転、使用許諾、又は質権の設定をする。
4. 標章の使用規範に違反する。
5. その他の不当な方法による使用。

第 80 条 証明標章、団体標章又は団体商標は、本章に別段の規定がある場合を除き、その性質により本法の商標に関する規定を準用する。

第九章 罰 則

第 81 条 商標権者、又は団体商標権者の同意を得ずに、次の各号のいずれかの行為を為した場合、3 年以下の懲役、拘留又は NT\$200,000 以下の罰金に処する又は併処する。

1. 同一の商品又は役務に、同一の商標又は団体商標を使用する。
2. 類似の商品又は役務に、同一の登録商標又は団体商標を使用し、関連する消費者に混同誤認を生じさせるおそれがある場合。
3. 同一又は類似の商品又は役務に、その登録商標又は団体商標と類似する商標を使用して、関連消費者に誤認を生じさせるおそれがある場合。

第 82 条 前条に該当する商品であることを明らかに知りながら、該商品を販売、又は販売を意図して展示、輸出又は輸入した者は、1 年以下の懲役、拘留又は NT\$50,000 以下の罰金に処する又は併処する。

第 83 条 前二条の罪を犯して製造、販売、展示、輸出又は輸入した商品、或は提供した役務において使用された物品又は書類は、犯人の所有に属するか否かを問わず、これを没収する。

第十章 附 則

第 84 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに登録されていた商標又は標章には、第 26 条の規定を適用しない。

第 85 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに登録されていた役務標章は、本法改正施行日から商標と見なす。

本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にまだ登録されていなかった役務標章出願案は、本法改正施行日から商標登録出願案と見なす。

- 第 86 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに登録されていた連合商標、連合役務標章、連合団体標章又は連合証明標章は、本法の改正施行日から、独立した登録商標又は標章と見なす。その権利存続期間は、原許可を基準とする。
- 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にまだ登録されていなかった連合商標、連合役務標章、連合団体標章又は連合証明標章出願案は、本法改正施行日から、独立した商標又は標章登録出願案と見なす。
- 前項の出願人は、許可査定が送達される前に取り下げを請求することができ、並びに費用の返還を請求することができる。
- 第 87 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに登録されていた防護商標、防護役務標章、防護団体標章又は防護証明標章は、その登録時の規定に従う。その専用期間満了前に、独立した登録商標又は標章への変更を申請しなければならない。期間が満了しても変更を申請していない場合、商標権は消滅する。
- 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にまだ登録されていなかった防護商標、防護役務標章、防護団体標章又は防護証明標章出願案は、本法 2003 年 4 月 29 日改正施行日から、独立した商標又は標章登録出願案と見なす。
- 前項の出願人は、許可査定が送達される前に取り下げを請求することができ、並びに費用の返還を請求することができる。
- 第 88 条 第 86 条第 1 項の規定により独立した登録商標又は標章と見なされた場合、第 57 条第 1 項第 2 号が規定する 3 年間の期間に関しては、本法 2003 年 4 月 29 日改正施行日から起算する。
- 前条第 1 項により独立した登録商標又は標章として変更申請した場合、第 57 条第 1 項第 2 号が規定する 3 年間の期間に関しては、変更日から起算する。
- 第 89 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに許可査定されていた登録出願案が、本法改正施行時にまだ原査定が取り消されていなかった場合、改正後の規定により、直接登録することができる。それが納付すべき第 1 期目の登録料は、すでに納付したものと見なす。
- 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前に許可査定が取り消され、本法施行後に行政訴訟で原処分を取り消しが確定し登録が認められた場合、改正後の規定により直接登録することができる。その納付すべき第 1 期目の登録料は、すでに納付したものと見なす。
- 第 90 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに異議が申し立てられ、まだ異議審定が出されていない案件は、本法改正施行前及び本法改正施行後の規定のいずれにも違法する場合にのみ、その登録を取り消す。その手続は改正後の規定により行う。

- 第 91 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にすでに無効審判が請求又は提起され、まだ審決が下されていない無効審判案件は、本法改正施行前及び本法改正施行後の規定のいずれにも違法する場合にのみ、その登録を取り消す。その手続は改正後の規定により行う。
- 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前に登録されていた商標、証明標章及び団体標章について、本法 2003 年 4 月 29 日改正施行後に無効審判を請求又は提起する場合、その登録時及び本法改正施行後の規定のいずれにも違法する事由に限る。
- 第 92 条 本法 2003 年 4 月 29 日改正施行前にまだ処分されていなかった商標取り消し案件は、本法改正施行後の商標撤回案件の規定を適用し処理する。
- 第 93 条 本法の施行細則は主務官庁が定める。
- 第 94 条 本法は、公布の日から 6 ヶ月後（理律注：2003 年 11 月 28 日）に施行する。

立法院第6期第4会期第14回会議議案関係文書

「智慧財産案件審理法」（「知的財産案件審理法」）案審査報告

一、本法立法理由

21世紀は知識経済（knowledge economy）の時代であり、知識を生み出す能力を基礎として形成された専利（※日本の発明特許、実用新案、意匠に相当）、商標及び著作権等の知的財産権は既に国家産業のレベルアップ及び経済発展を促進するための利器となっている。しかし、知的財産権は実態のない存在であるため、その権利の獲得及び維持等はいずれも健全な知的財産法制に頼っており、また完全な知的財産権訴訟手続きも鍵となる。

知的財産案件の審理は、一般の訴訟に比べると少々特殊であり、かつ知的財産関連製品の市場でのライフサイクルは短いため、迅速な審理と正確な裁判が等しく重要となる。先進国の多くでは、かかる知的財産案件の審理に求められるニーズに対応すべく、知的財産案件の審理を専門に扱う専門裁判所を設置し、ならびに知的財産訴訟について特別な手続規定を設けている。我が国の専利法（※日本の特許法、実用新案法、意匠法に相当）、商標法等の知的財産関連法にも権利の取得及び権利侵害関連訴訟について若干の特別規定が設けられてはいるが、実際にはまだ十分とはいえず、知的財産案件審理のニーズに十分応えることができていない。そこで、我が国の知的財産訴訟手続きを改善し、権利を有効に救済する機能を十二分に発揮させるべく、「智慧財産案件審理法」（「知的財産案件審理法」）草案を作成した。

二、本法の重要な内容

本法は全5章、計39条から成っており、その重点は以下のとおりである。

（一）裁判官をサポートする技術審査官を設置

知的財産案件はしばしば複数分野の科学技術専門問題に関わり、知的財産裁判所は専門技術スタッフを配置して、裁判官が専門技術問題を判断する際にこれをサポートさせなければならない。そこで、知的財産裁判所には技術審査官を設置し、裁判所が知的財産案件審理につき必要と認める場合には、技術審査官に職務執行を命じ、裁判官の案件審理をサポートさせることができる。

（二）審理手続きを部分的に改変することで、双方の權益を保障

1. 知的財産民事及び行政訴訟審理中、裁判長又は受命裁判官は当事人に争点を論告し、ならびに心証を適時公開しなければならない。

2. 知的財産案件審理中、営業秘密に関する事項は、非公開で審判することができ、ならびに訴訟資料及びファイル証拠の閲覧、抄録又は撮影を制限することができる。
3. 知的財産民事又は行政訴訟中、書類又は検証物を所有する当事人又は第三者が、正当な理由なく、裁判所からの証拠提出命令に従わない場合、罰金を課すことができる。必要時には、強制処分執行を命じることができる。
4. 知的財産民事又は刑事訴訟中、裁判所は知的財産権に取消又は廃止すべき理由があるか否かといった争点につき、自ら認定しなければならず、行政訴訟判決結果を待つ必要はない。
5. 日本法の規定を参照し、知的財産民事訴訟審理中、裁判所が知的財産権に取消又は廃止すべき理由があるか否かを判断するため必要であると認める場合には知的財産主務官庁に訴訟参加を命じる裁定を下すことができる旨明確に定めるとともに、その効果も明確に定めた。
6. 専利権（※日本の発明特許権、実用新案権、意匠権に相当）の取消又は廃止に関する行政訴訟中、当事人が口頭弁論終了前に同一の取消又は廃止理由につき新たな証拠を提出した場合、裁判所は依然としてこれを斟酌しなければならない旨明確に定めた。

(三) 秘密保持命令制度の導入

知的財産権に関する訴訟は、その最も秘密を保持しなければならない対象が往々にして競争相手の同業者であるもう一方の当事者であり、この場合には関連規定によりその閲覧又は開示を許可しない又は制限することができるものの、もう一方の当事者の権利もまた法律による保障を受けており、訴訟資料が当事者又は第三者の営業秘密に属するという理由だけで、もう一方の当事者の弁論を妨害すべきではない。上記の双方の利害衝突を考慮し、日本法の規定を参照して、裁判所は、知的財産案件について、請求により秘密保持命令を発することができ、ならびに違反者に対し刑事制裁を加えることができる旨明確に規定し、これによって、訴訟の促進及び営業秘密の保護の両者に配慮する。

(四) 証拠保全手続きの強化

「知的財産民事又は行政訴訟の証拠保全手続き中、相手人が正当な理由なく、保全の実施を拒絶するとき、裁判所は強制的にこれを排除することができる。但し、必要な程度を超えることはできず、必要時には警察機関に協力を求めることができる」旨明確に定める。

(五) 請求人は暫定状態を定める仮処分の要件を説明しなければならない

知的財産権に係る製品の市場におけるライフサイクルは非常に短く、ビジネスチャンスはごく短い期間に限られる。いったん裁判所が製造、販売等の行為の停止を命じれば、製品は、通常、本案判決の確定を待たずに淘汰

されてしまい、メーカーは市場からの撤退を迫られるという不利な結果に至り、その影響は極めて重大であるため、暫定状態を定める仮処分を申し立てる要件は厳しくなければならない。本法では、知的財産民事及び行政訴訟事件に対し、暫定状態を定める仮処分の請求を申し立てる場合、たとえば保全の必要を有する事実につき、これを説明しなければならず、十分に説明がなされなかった場合には、裁判所はその申立てを却下しなければならない旨規定されている。

(六) 刑事附帯民事訴訟案件の裁判

裁判所は知的財産権侵害刑事附帯民事訴訟案件を審理する場合、第三審裁判所を除き、自ら審理して判決しなければならない、ならびに刑事案件と同時に判決しなければならない。但し、簡易手続きで提起する附帯民事訴訟は、必要時には刑事訴訟判決後60日以内にこれを裁判することができる。

「智慧財產法院組織法草案」（「知的財産裁判所組織法草案」）案審查

報告

一、立法理由

国際経済、貿易が各国の政治、社会の発展を主導する昨今の趨勢において、貿易自由化及び科学技術の発展は各国の基本構造調整に影響を及ぼす2大要素となっている。また、科学技術の不断の進歩刷新により生じる知的財産権保護の問題は、近年、各国が経済発展及び貿易自由化を推進する過程においてますます重視するようになってきた課題であり、さらには国家の競争力の指標とさえ見なされている。知的財産権競争によりもたらされるビジネスチャンス及び巨大な経済的利益は、次から次へと紛争をまねき、このことは我が国の訴訟コストを増大させたばかりでなく、甚だしきに至っては先進国から貿易の障害と見なされるようになってきている。たとえ、国際組織に加盟し国際条約を締結したことで、各国の知的財産権に関する法律規範が、実体上又は手続き上を問わず、ある程度の一致をみることができたとはいえ、法律規範の実践においては依然として司法機関を最終的な仲裁者及び執行者として頼っている。凡そ全ての先進法治国家のみならず発展途上国もまた、知的財産保護及び関連訴訟制度の確立に力を尽くしている。たとえば、ドイツでは1961年には既に連邦特許裁判所（Bundespatentgericht）が設置されており、アメリカでは1982年に連邦巡回控訴裁判所（CAFC）が、イギリスでは1990年に特許群裁判所が、タイでは1997年に中央知的財産及び国際貿易裁判所が、韓国では1998年に特許裁判所が、日本では2005年4月1日に東京高等裁判所に知的財産案件を専門に審理する支部即ち知的財産高等裁判所がそれぞれ設置されており、またフランスでは2006年にパリに知的財産案件訴訟を専門に審理する法廷が設立される予定であり、EUも2010年にはEU特許裁判所を設立する予定である。

我が国は2002年1月1日に世界貿易機関（WTO）に加盟して該組織の第144番目の加盟国となったため、WTO協定の付属書の1つである「知的所有権の貿易関連の側面に関する協定」（Agreement on Trade-Related Aspects of Intellectual Property Rights, TRIPS）の拘束を受けることとなった。実際には、WTOに正式に加盟する以前に既に、我が国では知的財産権関連法律の改正に次々に着手しており、我が国の知的財産の実体的な関連法律は、基本的に、世界の主要な条約又は協定の基準を満たしていた。但し、我が国の現行の訴訟制度には民事、刑事及び行政訴訟がそれぞれ違う制度により運用されており、知的財産権訴訟に関しては、依然として訴訟特性により、それぞれ普通裁判所の民事、刑事法廷又は行政裁判

所が審理を担当しており、知的財産権紛争を統一して処理する専門裁判所はまだ設置されていない。その結果、同一の権利客体（たとえば、専利権又は商標権）において紛争が発生した場合、異なる訴訟で重複して審理しなければならない、当事者の時間的労力及び司法資源を浪費し、司法救済時効を遅らせ、甚だしきに至っては我が国の産業の国際競争力に悪影響を及ぼす結果となっている。したがって、知的財産専門裁判所の設立は既に、知的財産権保護を確実に実行するうえでの急務となっているのである。該専門裁判所設立に際しては、法律及び科学技術の知識を兼ね備えた専門裁判官を選任して審理に当たらせるほか、裁判官が知的財産訴訟に関わる科学技術問題を正確に判断できるようサポートさせるべく、適当な技術審査官を配置する。

司法院は2004年2月下旬から知的財産専門裁判所設置計画に積極的に取り組み始め、何度も検討会を開いて入念な検討を行うとともに各界の専門家の意見を集め、本草案を作成した。

二、本法の重要な内容

本草案の条文は計46条であり、「総則」、「裁判官の任用資格」、「技術審査官の配置」、「書記官及びその他職員の配置」、「司法年度及び事務の分配」、「法廷の開閉及び秩序」、「司法行政の監督」及び「附則」の計8章に分けられ、その要旨は以下のとおりである。

(一) 知的財産裁判所が管轄する審判事務には、知的財産権と関係のある民事訴訟事件、刑事訴訟案件及び行政訴訟事件が含まれる。

1. 民事訴訟事件とは、専利法（※日本の特許法、実用新案法、意匠法に相当）、商標法、著作権法、光ディスク管理條例、営業秘密法、集積回路回路配置保護法、植物品種及び種苗法、又は公平交易法（※日本の不正競争防止法、独占禁止法の要素が含まれている）で保護される知的財産権に関して生じた民事訴訟事件を指し、本案と関連する証拠保全、保全手続きもこれに含まれる。
2. 刑事訴訟案件とは、刑法第253条～255条の商標や商号の妨害し又は虚偽不実の表示をする罪、第317条、第318条の商工業上の秘密を漏洩する罪、或いは商標法、著作権法、公平交易法第20条第1項、第19条第5号に違反する案件を指す。但し、少年が被告である場合、少年案件の審理は少年事件裁判所（法廷）が「少年事件処理法」の規定に基づいて処理しなければならない、知的財産裁判所が審理することはできないので、排除する。
3. 行政訴訟事件とは、専利法、商標法、著作権法、光ディスク管理條例、集積回路回路配置保護法、植物品種及び種苗法、又は公平交易法における知的財産権に関する出願、取消又は廃止手続き、不正競争及びその他公法上の紛争によって生じた行政訴訟事件、及び強制執行事件を指す。

- (二) 知的財産裁判所の審級管轄には、前記知的財産案件の民事第一審、民事第二審の訴訟事件、第一審行政訴訟事件及び地方裁判所の通常の裁判、略式裁判又は協議手続きの第一審判決を不服として上訴又は抗告した刑事事件が含まれる。民事第一審訴訟手続き及び行政訴訟簡易手続きは裁判官が単独で審判を行い、民事、刑事第二審上訴、抗告手続き及び行政訴訟の通常手続きは、裁判官3名が合議制で審判を行う。
- (三) 裁判官の供給源を多様化し、知的財産裁判所裁判官経験者が当然該裁判所裁判官の任用資格を有する以外に、「実任」裁判官、「実任」検察官経験者は選抜試験および研修方式により、また弁護士、学者又はかつて知的財産業務を行ったことのある「簡任」公務員も選抜試験及び研修方式により、該裁判所裁判官の任用資格を取得する。ならびに司法院に選抜又は選抜試験審査委員会の組織及び審査、研修等関連事項の制定する権限を授ける。
- (四) 知的財産案件は往々にして科学技術専門問題に関わるため、技術審査官を配置し、裁判官が科学技術問題を判断する際にこれをサポートさせる。
- (五) 裁判官の人材不足と増大し続ける裁判所機能の問題は、近年、司法実務が直面している最も困難な課題である。司法資源の有限性にに基づき司法資源を有効に分配して最大限の効果を得るために、ならびに国民の訴訟権益の保障にも配慮するために、ドイツ、オーストリアの裁判官制度を模して、知的財産裁判所に司法事務官を設置し、強制執行事務を行わせる。

「智慧財産案件審理法」（「知的財産案件審理法」）制定
中華民國96年（西曆2007年）1月9日
立法院第6期第4会期第15回會議通過（公報初稿資料、正確な条文は総統が公布する
条文を基準とする）

智慧財産案件審理法（知的財産案件審理法）

第一章 総 則

第1条 知的財産案件の審理は本法の規定によるものとし、本法に規定のない場合、それぞれ民事、刑事又は行政訴訟手続きが適用すべき法律によるものとする。

第2条 本法で営業秘密とは、営業秘密法第2条に定める営業秘密を指すものとする。

第3条 当事者、代表人、代理人、弁護士、補佐人、証人、鑑定人又はその他の訴訟関係人の住居所と裁判所との間に音声及び映像を相互に伝送する科学技術設備があり直接審理できる場合、裁判所は申立てにより又は職権で該設備を以ってこれを為すことができる。

前項の情況は、裁判所が当事者の意見を求めなければならない。

第1項の情況につき、その期日通知書又は召喚状に記載する出頭場所は該設備の設置場所とする。

第1項により手続きを進めた際の筆録及びその他文書に尋問を受けた者が署名しなければならない場合、尋問した裁判所から尋問を受けた者の住居所に該筆録及びその他文書を伝送し、尋問を受けた者が内容を確認し並びに署名した後、筆録を電信ファクシミリ又はその他の科学技術設備を以って尋問した裁判所に送り返す。

第1項の審理及び前項の書類伝送作業規則は、裁判所が定めるものとする。

第4条 裁判所は必要なときに、技術審査官に対し、以下に掲げる職務の執行を命ずることができる。

1. 訴訟関係を明確にするため、事実上及び法律上の事項について、専門知識に基づき当事者に説明又は質問する。
2. 証人又は鑑定人に直接質問する。
3. 本案について裁判官に意見陳述を行う。
4. 証拠保全時に証拠の調査に協力する。

第5条 技術審査官の忌避は、それが審判に参加した手続きにより、それぞれ民事訴訟法、刑事訴訟法、行政訴訟法の裁判官忌避に関する規定を準用する。

第二章 民事訴訟

第6条 民事訴訟法第二編第三章、第四章の規定は、知的財産の民事訴訟に適用しないものとする。

第7条 智慧財産法院組織法（知的財産裁判所組織法）第3条第1号、第4号に定める民事事件は、知的財産裁判所の管轄とする。

第8条 裁判所が既に知っている特別な専門知識は、当事者に弁論の機会を与えなければ、判決の基礎として採用することができない。

裁判長又は命令を受けた裁判官は、事件の法律関係について、当事者によく説明しなければならず、並びに適時その法律上の見解を表明することができ且つ適度に心証を開示することができる。

第9条 当事者の提出する攻撃又は防御方法が、当事者又は第三者の営業秘密に及び、当事者が申立てし、裁判所が適当であると認める場合、非公開裁判とすることができる。双方の当事者が非公開裁判に合意した場合にも同様とする。

訴訟資料が営業秘密に及ぶ場合、裁判所は申立てにより又は職権で、訴訟資料の閲覧、抄録又は撮影を許可しない又は制限する旨の裁定を下すことができる。

第10条 文書又は検証物の保有者が、該文書又は検証物の提出を求める裁判所の命令に、正当な理由なく従わない場合、裁判所はNT\$30,000以下の罰金に処する旨の裁定を下すことができる。必要なときには強制処分を命じる旨の裁定を下すこともできる。

前項の強制処分の執行は、強制執行法の物品の交付要求権執行に関する規定を準用する。

第1項の裁定は、抗告することができる。罰金に処する旨の裁定の執行は、抗告中は停止しなければならない。

裁判所は、第1項の文書又は検証物の保有者が提出を拒否する正当な理由を有するか否かを判断し、必要なときには依然として提出を命ずることができ、並びに非公開の方式でこれを行う。

前項の情況につき、裁判所は該文書及び検証物を開示することはできない。但し、訴訟関係人の意見を聴取するため、該訴訟関係人に開示する必要がある場合には、この限りでない。

前項の但し書の情況につき、裁判所は、開示前に、文書又は検証物の保有者に通知しなければならず、保有者が、該通知を受領した日から14日以内に、開示を受ける者に秘密保持命令を出すよう申立てた場合、該申立ての裁定が確定するまで開示することはできない。

第11条 当事者又は第三者が、その保有する営業秘密につき、次に掲げる情況に該当することを積明する場合、裁判所は該当事者又は第三者の申立てにより、もう一方の当事者、代理人、補佐人又はその他訴訟関係人に対し、秘密保

持命令を出すことができる。

1. 当事者の書面の内容に当事者又は第三者の営業秘密が記載され、或いは既に取り調べられ又は取り調べられるべき証拠の内容に当事者又は第三者の営業秘密が含まれている。
2. 前号の営業秘密が開示され、或いは該訴訟追行以外の目的で使用されることにより、該当事者又は第三者の該営業秘密に基づく事業活動が妨害される虞があり、これを防ぐため、その開示又は使用を制限する必要がある。

前項の規定は、もう一方の当事者、代理人、補佐人又はその他の訴訟関係人が、申立て前に、既に前項第1号に規定される書面の閲覧又は証拠の取調べ以外の方法により、該営業秘密を取得し、或いは保有している場合、これを適用しない。

秘密保持命令を受けた者は、該営業秘密について、該訴訟以外の目的を実施するためにこれを使用することはできず、或いは秘密保持命令を受けていない者に対し開示することはできない。

第12条 秘密保持命令の申立ては、次に掲げる事項を記載した書面で行わなければならない。

1. 秘密保持命令を受けるべき者。
2. 保護命令を受けるべき営業秘密。
3. 前条第1項各号に掲げる事由に該当する事実。

第13条 秘密保持命令を許可する裁定は、保護を受ける営業秘密、保護理由、及びその禁止内容を明記しなければならない。

秘密保持命令の申立てを許可するとき、その決定書を、申立て人及び秘密保持命令を受けた者に送達しなければならない。

秘密保持命令は、秘密保持命令を受けた者に決定書が送達されてから、効力を生ずる。

秘密保持命令の申立てを却下した裁判に対しては、抗告することができる。

第14条 秘密保持命令を受けた者は、その命令の申立てが、第11条第1項の要件を欠く、或いは同条第2項の状況を有し、或いはその原因が既に消滅していることを以って、訴訟係属裁判所に対し、秘密保持命令の取消しを申立てることができる。但し、本案裁判確定後は、秘密保持命令を発した裁判所に対し、申立てなければならない。

秘密保持命令の申立て人は、該命令の取消しを申立てることができる。

秘密保持命令の取消し申立てについての裁定は、申立て人及び相手方に、その決定書を送達しなければならない。

前項の裁定に対しては、抗告することができる。

秘密保持命令は裁定によって取消しが確定したとき、その効力を失う。

秘密保持命令を取り消す裁定が確定したとき、申立て人及び相手方以外にも、

該営業秘密について秘密保持命令を受けている者がいれば、裁判所は該秘密保持命令の取消しを通知しなければならない。

第15条 秘密保持命令が発せられた訴訟につき、閲覧を制限又は禁止されず且つ秘密保持命令を受けていない者から、ファイル内文書の閲覧、抄録、撮影の請求があったとき、裁判所書記官は、直ちに、命令申立て人に通知しなければならない。但し、秘密保持命令の取消しが確定した場合、この限りではない。

前項の情況につき、裁判所書記官は、命令の申立てをした当事者又は第三者が通知を受けた日から14日内は、ファイル内文書を閲覧、抄録、撮影のために交付してはならない。命令の申立てをした当事者又は第三者が、通知を受けた日から14日内に、閲覧請求者に対して秘密保持命令を発する旨の申立てをするとき、或いはその閲覧を制限する又は許可しないとき、裁判所書記官は、その請求の裁定が確定するまで、ファイル内文書を交付してはならない。秘密保持命令の申立てをした者が、第1項の申立てに同意するとき、第2項の規定はこれに適用しない。

第16条 当事者が知的財産権に取消し、廃止すべき理由があると主張又は抗弁する場合、裁判所はその主張又は抗弁の理由の有無につき自ら判断しなければならない。民事訴訟法、行政訴訟法、商標法、専利法（日本の特許法、実用新案法、意匠法に相当）、植物品種及種苗法（植物及び種苗法）、又はその他の法律の訴訟手続き停止に関する規定を適用しない。

前項の情況につき、裁判所が取消し、廃止すべき理由があると認めたとき、知的財産権人は、該民事訴訟において、相手方に権利を主張することができない。

第17条 裁判所は、当事者が前条第1項により為す主張又は抗弁について、判断するため、必要なときには、知的財産主務官庁に対し、訴訟参加を命ずる裁定を下すことができる。

知的財産主務官庁が前項の規定により訴訟に参加するとき、前条第1項に関する主張又は抗弁の理由の有無に限り、民事訴訟法第61条の規定を適用する。民事訴訟法第63条第1項前段、第64条の規定は、知的財産主務官庁が訴訟に参加するとき、これを適用しない。

知的財産主務官庁の訴訟参加後、当事者が前条第1項の主張又は抗弁について既に争わないとき、裁判所は参加を命じる裁定を取り消すことができる。

第18条 保全証拠の申立ては、起訴前は、係属すべき裁判所に対して行い、起訴後は、既に係属している裁判所に対して行う。

裁判所が証拠保全を実施するとき、書類証拠を鑑定、実地検証及び保全することができる。

裁判所が証拠保全を実施するとき、技術審査官に、現場に赴いて職務を執行するよう命ずることができる。

相手方が正当な理由なく証拠保全の実施を拒絶するとき、裁判所は強制的にこれを排除することができるが、但し、必要な程度を超えてはならない。必要ときには、警察に協力を求めることができる。

裁判所は、証拠保全が相手方又は第三者の営業秘密を妨害する虞があるとき、申立て人、相手方又は第三者の申立てにより、保全実施時に立会う者を制限し、又は立会いを禁止することができ、並びに保全により得る証拠資料につき、別途保管を命じ、且つ閲覧を許可しない、又は制限することができる。前項の営業秘密を妨害する虞のある場合は、第11条～第15条の規定を準用する。

裁判所が必要であると認めるとき、尋問を受けた者の住居所又は証拠物の所在地の地方裁判所に、保全の実施を委託することができる。委託を受けた裁判所が保全を実施するとき、第2項～第6項の規定を適用する。

第19条 第一審知的財産事件は、裁判官が1人で審判を担当する。

知的財産事件についての第一審裁判は、知的財産裁判所において上訴又は抗告することができ、その審判は合議で行う。

第20条 知的財産事件についての第二審裁判は、別に規定がある場合を除き、第三審裁判所において上訴又は抗告することができる。

第21条 知的財産事件の支払い命令の申立てと処理は、民事訴訟法第六編の規定による。

債務人が、支払い命令に対し、適法な異議を提出する場合、支払い命令を発した裁判所がファイル及び書類証拠を知的財産裁判所に移送して処理しなければならない。

第22条 仮差押、仮処分又は暫定状態を定める処分の申立ては、起訴前は、係属すべき裁判所に対して行い、起訴後は、既に係属している裁判所に対して行う。

暫定状態を定める処分の申立てをするとき、申立て人は、その紛争の法律関係、重大な損害の発生を防止するため或いは差し迫った危険を回避するため或いはその他類似の状況を有するために必要を有する事実について、釈明しなければならない。その釈明に不足がある場合、裁判所は申立てを却下しなければならない。

申立ての理由が釈明されても、裁判所は依然として申立て人に担保の提供を命ずることができ、かかる担保が供出された後に仮の状態を定める処分を為す。

裁判所は仮の状態を定める処分を為す前に、双方に意見陳述の機会を与えなければならない。但し、申立て人が、処分前に相手方に陳述できない特殊な事情を有する旨主張し、並びに確実な証拠を提出し、裁判所が適当と認めた場合には、この限りでない。

仮の状態を定める処分は、申立て人に処分書が送達された日から30日以内に起

訴されなかった場合、裁判所は申立てにより又は職権でこれを取り消すことができる。

前項の取消し処分の裁定は公告しなければならない、公告時に発効する。

仮の状態を定める裁定は、はじめから不当であったこと、債権者の申立、或いは第5項の状況により、裁判所が取り消したとき、申立て人は相手方が処分によって受けた損害を賠償しなければならない。

第三章 刑事訴訟

第23条 刑法第253条～第255条、第317条、第318条の罪、或いは商標法、著作権法違反、或いは公平交易法第35条第1項の第20条第1項に関する案件及び同法第36条の第19条第5号に関する案件の起訴は、管轄の地方裁判所に対し行わなければならない。検察官の申立てにより簡易判決によって刑に処する場合も同様とする。

第24条 訴訟資料に営業秘密が含まれている場合、裁判所は申立てにより非公開で審判することができる。申立てにより又は職権で、ファイル内文書又は証拠物の検閲、抄録又は撮影を制限することもできる。

第25条 地方裁判所が第23条の案件に関して行った、通常、簡易審判又は協議手続きによる第一審裁判に不服で、上訴又は抗告する場合、少年刑事案件を除き、管轄の知的財産裁判所に対し、これを為さなければならない。

第23条の案件と刑事訴訟法第7条第1号に定める互いに関連する関係を有するその他の刑事案件は、地方裁判所が併せて裁判し、並びに併せて上訴又は抗告する場合も同様とする。但し、その他の刑事案件が比較的重い罪で、且つ案件の状況が複雑である場合、知的財産裁判所は、該管轄高等裁判所に併せて移送して審判させる旨の裁定を下すことができる。

前項の但し書の裁定は、別に規定がある場合を除き、抗告することができる。

第26条 知的財産裁判所が第23条の案件に関して行った裁判に対し、別に規定がある場合を除き、第三審裁判所に上訴又は抗告することができる。

第27条 第23条の案件の附帯民事訴訟の審理は、原告の訴えが適法ではないと認められた場合、或いは刑事訴訟が無罪、免訴となった場合又は受理されなかった場合、判決を以ってこれを却下しなければならない。その刑事訴訟が裁定によって却下された場合、裁定を以って原告の訴えを却下しなければならない。

第23条の案件の附帯民事訴訟の審理は、第三審裁判所が刑事訴訟法第508条～第511条の規定により裁判する場合を除き、自ら裁判しなければならない、刑事訴訟法第504条第1項、第511条第1項前段の規定を適用しない。但し、刑事訴訟法第489条第2項の規定により管轄違の判決を言い渡して移送する場合には、この限りでない。

第28条 地方裁判所が第23条の案件に関し、通常又は簡易審判手続きの附帯民事訴訟により行った裁判に不服で、上訴又は抗告を提起する場合、管轄の知的財産裁判所に対し、これを為さなければならない。

第29条 第23条の案件について簡易手続きを行うとき、その附帯民事訴訟は刑事訴訟と同時に裁判しなければならない。但し、必要のあるとき、刑事訴訟裁判後60日以内に、これを裁判することができる。

簡易手続きの附帯民事訴訟第二審裁判について、第三審裁判所に上訴又は抗告する場合、民事訴訟法第436条の2～第436条の5の規定を準用する。

第30条 第8条第1項、第11条～第15条、第16条第1項の規定は、第23条の案件又はその附帯民事訴訟を審理するとき、これを準用する。

第四章 行政訴訟

第31条 次に掲げる行政訴訟案件は、知的財産裁判所が管轄する。

1. 専利法、商標法、著作権法、光碟管理条例（光ディスク管理条例）、積體電路電路布局保護法（集積回路回路配置保護法、植物品種及種苗法（植物品種及び種苗法）、或いは公平交易法により知的財産権に関して生ずる第一審行政訴訟案件及び強制執行案件。

2. その他の法律の規定により知的財産裁判所が管轄する行政訴訟案件。

その他の行政訴訟を前項各号の訴訟と併せて起訴又は訴えの追加をするとき、知的財産裁判所に対してこれを為さなければならない。

知的財産裁判所は第1項第1号の強制執行事務を処理するため、執行処を設けて、或いは地方裁判所民事執行処又は行政機関に委託して、代理で執行させることができる。

債務人が、知的財産裁判所が前項により執行を委託された債務名義について、異議のある場合、知的財産裁判所が、これを裁定する。

第32条 知的財産裁判所の裁判について、法律に別に規定がある場合を除き、最終審行政裁判所において上訴又は抗告することができる。

第33条 商標登録の取消し、廃止、或いは専利権（発明特許権、実用新案権、意匠権を含む）の取消しに関する行政訴訟中、当事者が口頭弁論終了前に、同一の取消し又は廃止理由について提出した新たな証拠につき、知的財産裁判所は依然として斟酌しなければならない。

知的財産主務官庁は、前項の新証拠について答弁書を提出し、この新証拠に関し他方当事者の主張に理由があるか否かにつき開示しなければならない。

第34条 第8条～第15条、第18条及び第22条の規定は、知的財産権に関する行政訴訟に準用する。

知的財産民事訴訟又は刑事訴訟を処理する裁判官は、該訴訟事件に互いに関連する知的財産行政訴訟の審判に参加することができ、行政訴訟法第19条第3

号の規定を適用しない。

第五章 附 則

第35条 本法の秘密保持命令に違反する場合、3年以下の懲役、拘留、又はNT\$100,000以下の罰金に処する又は併処する。

前項の罪は、告訴を以って論じなければならない。

第36条 法人の責任者、法人又は自然人の代理人、雇用を受けた者又はその他の従業員が、業務執行により、前条第1項の罪を犯した場合、その行為者を処罰する以外に、該法人又は自然人もまた前条第1項の罰金に処す。

前項の行為者に対して告訴し又は告訴を取消す場合、その効力は、法人又は自然人に及ぶ。前項の法人又は自然人に対し、告訴する又は告訴を取消す場合、その効力は行為者に及ぶ。

第37条 本法施行前に地方裁判所及び高等裁判所に既に係属している知的財産民事事件につき、その裁判所の管轄及び審理手続きは、次に掲げる規定による。

1. その進行程度に応じて、該裁判所が本法に定める手続きによりこれを終結し、既に法定手続きにより行われた訴訟手続きについては、その効力は影響を受けないものとする。
2. 地方裁判所が行った裁判が、上訴又は抗告され、そのファイル内文書がまだ上訴又は抗告裁判所に送付されていない場合、知的財産第二審裁判所に送付しなければならない。

第23条の案件及びその附帯民事訴訟が、本法施行前に、既に各級裁判所に係属している場合、以後の訴訟手続きは、各該係属裁判所が、本法の規定により、これを終結しなければならない。但し、本法施行前に既に法定手続きにより行われた訴訟手続きについては、その効力は影響を受けないものとする。本法施行前、既に高等行政裁判所に係属している知的財産行政訴訟案件は、その進行程度に応じて、該裁判所が本法に定める手続きによりこれを終結する。その既に行われた手続きは、その効力を失わない。

第38条 本法施行細則及び審理細則は、司法院がこれを定める。

第39条 本法施行日は、司法院がこれを定める。

訂正審査基準（専利審査基準の一部）

2. 訂正

2.1 序文

特許を出願した発明はいったん公告された後は公益と関連し、訂正が許可された明細書又は図面は、該訂正が特許公報に公告された後、過去に遡及して発効する。もし、特許権者がほしいままに明細書又は図面を訂正することで自身の享有する特許保護範囲を拡大、変更することを許せば、勢い公益に影響を及ぼすこととなり、特許制度の目指す公平、公正の精神に反するので、〔特許請求の範囲〕の縮減、誤記事項の訂正又は不明瞭な記載の説明についてのみ、明細書又は図面の訂正を特許主務官庁に申請することができる。

特許権者にとって、明細書又は図面の公告後の訂正は、明細書又は図面中の失策、欠落を除去できるほか、主に〔特許請求の範囲〕の縮減によって特許権取消理由の構成を回避するというねらいもある。

2.2 訂正の時機

特許法第 64 条第 1 項、第 71 条第 1 項第 3 号、第 72 条第 2 項の規定によれば、特許出願に係る発明の明細書又は図面を訂正できる時機は、以下のとおりである。

- (1) 発明特許出願案に特許権が付与された後、特許権者が自発的に訂正申請する。
- (2) 発明特許案につき他人が無効審判請求を提起した際、特許権者が答弁提出と同時に訂正申請を行う、又は特許主務官庁が特許権者に期限を定めて訂正を通知する。
- (3) 特許主務官庁が職権により発明特許権の取消を審査する際、特許権者が答弁提出と同時に訂正申請を行う、又は特許主務官庁が特許権者に期限を定めて訂正するよう通知する。

2.3 訂正の事項

明細書又は図面の訂正がたとえ〔特許請求の範囲〕の縮減、誤記事項の訂正、不明瞭な記載の説明の 3 事項についてしかなされないとしても、〔特許請求の範囲〕自体に訂正が行われる際には、通常、特許権の範囲に変動が生じ、たとえ〔発明の説明〕、図面についてのみ訂正したとしても、〔特許請求の範囲〕を解釈する際に出願時のものとは異なる結論に至り、その結果、特許権の範囲に影響する可能性もある。したがって、その訂正は出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えることができないほか、原特許公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更することもできない。

出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えているか否かの判断は、本章 1.3 節を参照されたい。

原特許公告された〔特許請求の範囲〕の実質的な拡大又は変更についての判断

は、本章 2.4 節を参照されたい。

以下 2.3.1、2.3.2 及び 2.3.3 は、特許権者が訂正を主張できる事項の説明にすぎず、訂正が許可されるか否かは依然として特許法第 64 条第 2 項の規定に適合しなければならない。

2.3.1 特許請求の範囲の縮減

〔特許請求の範囲〕が広すぎる場合には縮減しなければならない。たとえば、〔発明の説明〕で既に該発明をある技術特徴において特定しているのに、〔特許請求の範囲〕でこれに合わせて特定されていなければ、〔特許請求の範囲〕を縮減して〔発明の説明〕と一致させることができる。

〔特許請求の範囲〕の訂正理由がたとえ“〔特許請求の範囲〕の縮減”事項に適合しても、依然として、訂正後、出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超過してはならず、且つ原許可公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更してはならないことに注意しなければならない。このほか、訂正後の〔発明の属する技術分野〕及び〔発明が解決しようとする課題〕は訂正前と異なってはならない。

〔特許請求の範囲〕の縮減に属する事項を以下に例示する。

- (1) 一又は多数の請求項を削除する。

例：従来技術と同じ請求項を削除する。

- (2) 択一記載形式（又はマーカッシュ形式）中に記載されている一選択項を削除する。

例：上位概念総括又は択一形式総括による 2 種類の方法で特定されている請求項につき、そのうちのある選択項が〔発明の説明〕で支持できない又は従来技術の一部であるとき、該選択項を削除する。

- (3) 従属項の引用記載形式が付加式であるとき、一従属項をそれが従属する独立項と合併し又は多数従属項をそれぞれそれが従属する独立項と合併して、新しい独立項を形成する。こういった変更の結果は、形式上、もともとの独立項を削除し、並びに請求項の総項数を減少させるものである。

- (4) 従属項の引用記載形式が詳述式又は下位概念で記載されているとき、従属項を新たな独立項に書き変えることは、即ち、もともとの独立項の記載を下位概念に縮減又は一步踏み込んで限定することになる。こういった変更の結果は、形式上、もともとの独立項を削除し、並びに請求項の総項数を減少させるものである。

但し、もし前述の (3)、(4) が単に従属項を独立項に書き変えただけにすぎず、それが従属する独立項を削除していない場合、〔特許請求の範囲〕縮減の事項に適合しない。

- (5) 請求項の技術特徴を〔発明の説明〕中の対応する記載の下位概念技術特徴に置き換える。

例：請求項に「液晶ディスプレイ装置」の上位概念技術特徴が記載され、〔発明の説明〕には該「液晶ディスプレイ装置」は「液晶モニター装置」（下位

概念技術特徴) であると記述されており、請求項中の「液晶ディスプレイ装置」という用語を「液晶モニター装置」に訂正する。

- (6) 請求項の技術特徴を〔発明の説明〕中の該技術特徴自体について記載されている詳細な記述に置き換える。

例：請求項に「広告版」の技術特徴が記載され、原〔発明の説明〕には該広告版について「発光ダイオードをパネル内に設置して構成する表示モニター」と詳細に記載されており、請求項の「広告版」を「発光ダイオードをパネル内に設置して構成する表示モニター」に置き換える。

- (7) 請求項の内容につき、技術特徴を直列的に増加する (serial addition) ことによって一発明を特定する。

例：請求項が順序性を有する連続した操作又は処理工程に係る技術特徴を記載したものであり、請求項中にさらに一技術特徴を追加する。

- (8) 引用又は従属する一部の請求項数を単純に削減する。

例：「請求項 1～3 の任意の一項に記載される圧縮機を含む空調装置」を「請求項 1 又は 2 に記載される圧縮機を含む空調装置」と訂正する。

- (9) 引用又は従属する一部の請求項を削減し、並びに残りの記載部分を分割して請求項とする場合。

例：「請求項 1～3 の任意の一項に記載される圧縮機を含む空調装置」を訂正して、「請求項 1 に記載される圧縮機を含む空調装置」と「請求項 2 に記載される圧縮機を含む空調装置」の 2 つの請求項に分割する。

- (10) 請求項に記載される数値限定範囲を縮減する。

例：原許可公告された請求項に「ポリマー分子量 200～1000」と記載され、明細書の〔発明の説明〕には分子量の特定値が 500 と記載されており、請求項を「ポリマー分子量 500～1000」と訂正する。

2.3.2 誤記事項の訂正

誤記事項とは、該〔発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者がその出願時の通常の知識に基づいて、外部書類に頼ることなく、直接、明細書又は図面の全内容及び文脈から、明らかな誤りがあることを即座に見出すことができる内容で、且つ、さほど考えなくても、訂正しなければならないこと及びいかに訂正すればもともとの意味を回復することができるのか即座に分かり、該もともとの意味は明細書又は図面に既に明記されているものでなければならず、解読時にもともとの実質的な内容に影響を及ぼさないものを指す。したがって、誤記事項を訂正した後の意味は、訂正前と同じでなければならない。例：特許明細書又は図面中の文字、用語、言い回しの明らかな過剰表現、欠落又は誤り、若しくは組版、印刷、入力ミス、若しくは技術用語、測量単位、データ、数量、科学名詞、翻訳名詞の前後記載の不一致又は書き間違い、若しくは図面の図番号、部品番号及び容許される註記必要な文字が〔発明の説明〕の記載と明らかに一致していない、若しくは各図面同士が明らかに一致しておらず誤解を生じる状況がある、など。

明らかな誤りには技術的な性質の誤記も含まれる。例えば、特許権者が明細書に記載した化学又は数学の公式について訂正を提出する場合、もし該〔発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者がその出願時の通常の知識に基づいて、原記載が明らかな失策又は誤りであると判断し、且つ、こうした訂正を行う以外、ほかに方法がないときには、誤記事項の訂正と見なすことができる。

明細書又は図面の訂正理由がたとえ“誤記事項の訂正”事項に適合していても、依然として、訂正後、出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはならず、且つ原許可公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更してはならないことに注意しなければならない。このほか、優先権証明書類は誤記事項訂正の根拠とすることができない。

例1：原公告の〔特許請求の範囲〕に“鉄合金の焼入れ温度が700～8000℃である”と記載されているが、該〔発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者であれば、鉄が1600℃で融解し、3000℃で酸化することを知っているため、原記載の“鉄合金の焼入れ温度が700～8000℃である”は誤記事項に属する。

例2：原明細書の〔発明の説明〕にある技術内容が「図面中の第1図に呼応するものである」と記載されているが、実際には該内容は第1図と一致しておらず又は全く関係がなく、他の図にも見られない場合、かかる状況における第1図の訂正は誤記事項の訂正に属さない。但し、もし、明らかに他の図面（例えば、第3図）に見られ、明細書に「図面中の第1図に呼応するものである」と記載されているのであれば、誤記事項に属するものと認める。

このほか、〔特許請求の範囲〕の独立項又は従属項に2個以上の句点があるとき、誤記事項に属すると認めることができる。但し、明細書の技術内容又は図面部分の欠落についての補充は、誤記事項の訂正に属さない。

2.3.3 不明瞭な記載の説明

不明瞭な記載とは、許可公告された特許の明細書、図面に開示されている内容につき、その記載が十分ではないために文意が依然として不明確であるものを指す。但し、該〔発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者が明細書、図面に記載されている内容からその固有の意味を明確に理解できる場合、該不明瞭な記載について釈明することを許可し、該不明確な事項を訂正することでもととの意味を明確にし、これによって読む者に原発明の内容をよりはっきりと理解させ、誤解を生じさせないようにすることができる。例えば、原明細書に「顕色剤にするp-水酸基安息香酸ジフェニルエタノールは一般式化合物の各種の具体的な実施例の1つである」と記載されている場合、何が好ましい実施例であるのか明確に説明されていないものの、該〔発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者であればp-水酸基安息香酸ジフェニルエタノールが良好な実施例であることを明確に理解することができるので、誤解が生じるのを防ぐため、「顕色剤とするp-水酸基安息香酸ジフェニルエタノールは一般式化合物の効果の良好な実施例である」と訂正する。また、例えば、科学名詞の中国語訳名については、その本意を理解する便宜を図り、誤解

が生じるのを防ぐために外国語の原文名を付す必要がある場合（「専利法施行規則」3.1）、その対応する外国語原文名を注記する。

同様に、許可公告後の〔特許請求の範囲〕について、仮に、〔特許請求の範囲〕自体に記載されている意味が不明確である（例えば、〔特許請求の範囲〕に使用温度について「高温」としか記載されていない）、若しくはある請求項自体の記載がその他の請求項と一致していない（例えば、技術用語、単位の不一致）、若しくは〔特許請求の範囲〕に記載されている特許を出願する発明自体は明確なのに、その技術内容が正確且つ詳細に特定されていない（例えば、〔特許請求の範囲〕に管の形状が「非円形管」と記載されており、発明自体が既に明確に円形管形状の従来技術を排除している）などの状況がある場合には、該不明瞭な事項を訂正してその原意を明確に説明する。例えば、上記の「高温」の事例では、〔発明の説明〕中に高温が 1200℃であると示されているのであれば、〔特許請求の範囲〕に記載されている「高温」を 1200℃に訂正する。また、例えば、上記の「非円形管」の事例では、〔発明の説明〕又は図面中において該非円形管が楕円形管であると特定されているのであれば、〔特許請求の範囲〕に記載されている「非円形管」を「楕円形管」と訂正する。

但し、仮に、許可公告後の〔特許請求の範囲〕自体の記載が明確で且つその発明の技術内容が既に詳細、正確に特定されているものの、その後、無効審判請求又は職権による審査で新規性及び進歩性を備えないとの理由が出され、かかる理由に対応するために答弁書を提出し、その特許出願に係る発明の新規性及び進歩性は既に完全、明確に説明されていると主張するのであれば、こういった答弁のみ提出する方法は不明瞭な記載の説明に属さず、且つ新規性及び進歩性の問題を解決できないので、〔特許請求の範囲〕を縮減する方法で訂正書を提出しなければならない。

明細書又は図面の訂正理由がたとえ“不明瞭な記載の説明”事項に適合していても、依然として、訂正後、出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはならず、且つ原許可公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更してはならないことに注意しなければならない。

2.4 特許請求の範囲の実質的な拡大又は変更の判断

明細書（〔特許請求の範囲〕を含む）又は図面の訂正によって請求項の解釈が原許可公告された請求項と異なるとき、〔特許請求の範囲〕の実質的な拡大又は変更になる。例えば、請求項に記載されている技術特徴につき比較的広意義の用語に置き換える、若しくは請求項の限定条件を減少させる、若しくは請求項に請求の主題を追加する、若しくは特許を受ける前に既に削除した又は放棄声明を出した技術内容を〔発明の説明〕に回復することは、いずれも〔特許請求の範囲〕の実質的な拡大となる。さらに、もし、請求項に記載されている技術特徴を相反する意味の用語と置き換える、若しくは請求項の技術特徴を実質的に異なる意味に変更する、若しくは請求項の請求主題を変更する、若しくは発明の産業技術分野及び〔発明が解

決しようとする課題]が訂正前と異なる場合には、いずれも〔特許請求の範囲〕の実質的な変更となる。

以下に掲げる訂正状況において、その訂正結果は原許可公告された〔特許請求の範囲〕の実質的な拡大又は変更となる。

(1) 請求項の一部の技術特徴を削除する。

例：部品、構造、成分、工程、操作条件、反応条件など一部の技術特徴を削除する、若しくはたとえ削除した部分が効果、用途などの事項であったとしても、許可公告された〔特許請求の範囲〕に記載された事項は特許権者がその特許出願に係る発明の必要技術特徴として特定したものであるため、一部の技術特徴を削除した後の請求項が原明細書又は図面に開示されている範囲を超えていなくても、限定条件を削減した結果、〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大することになる。

(2) 請求項の下位概念の技術特徴を上位概念の技術特徴に訂正する。

たとえ該上位概念の技術特徴が原〔発明の説明〕及び図面に既に記載されていたもので、訂正の結果、形式上は原明細書又は図面に開示されている範囲を超えなくても、該上位概念の技術特徴に含まれる意味はもともとのものより広いので、〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大することになる。

(3) 請求項の上位概念技術特徴を〔発明の説明〕に開示されている下位概念技術特徴に訂正する場合、該下位概念技術特徴は「原〔発明の説明〕に既に明確に記載され且つ〔発明の説明〕が支持するもの」に属さない。

例：請求項に記載される「有機酸」を下位概念技術特徴である「ギ酸」又は「酢酸」に訂正する場合、〔発明の説明〕に該下位概念技術特徴である「ギ酸」又は「酢酸」が既に明確に記載され且つ〔発明の説明〕が支持するものを除き、訂正後、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更することになる。

(4) 〔特許請求の範囲〕に含まれていないものの、〔発明の説明〕又は図面に既に開示されているその他の技術特徴又は技術手段を、原許可公告された請求項内に付加する又は別の請求項として新たに構成する。

〔発明の説明〕又は図面に既に開示されているものの、請求項自体には含まれていない技術特徴又は技術手段につき、それが新規性、進歩性を有するか否か又は一般の人によく知られた技術であるか否かを問わず、かかる技術特徴又は技術手段を原許可公告された請求項内に付加する又は別の請求項として新たに構成する場合、形式上は原請求項に条件を追加してさらに一步踏み込んだ限定を行うものであっても、原有の部品、成分、工程の結合関係及び原許可公告された発明の性質又は機能を変えることになり、したがって、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更することになる。

(5) 〔発明の説明〕に既に開示されているものの、〔特許請求の範囲〕には含まれていない実施方法（又は実施例）を請求項に追加記載する、若しくは別の請求項として新たに構成すると、原許可公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大

- することになる。
- (6) 選択肢記載形式（又はマーカッシュ形式）の請求項について、〔発明の説明〕に記載されている選択項の1つを請求項中に追加する。
 - (7) 〔発明の説明〕に記載されているが、〔特許請求の範囲〕に属さない特許出願に係る発明の技術内容又は実施例を、原許可公告された〔特許請求の範囲〕中の技術特徴と置き換える。
 - (8) 請求項の発明カテゴリーを変更する。
 - (9) 〔特許請求の範囲〕中のいくつかの異なる技術特徴を別の新たな組合せに変更する、又は方法発明の工程順序を変更する。
 - (10) 特定用途の請求項をその他の用途にも適合する請求項に訂正する。
 - (11) 〔特許請求の範囲〕に記載されている数値の範囲を拡大する。
 - (12) 〔特許請求の範囲〕に記載されている数値の範囲を縮減し、該数値の範囲が原明細書又は図面に明確に記載されているものであっても、縮減した結果、その示す意味が原〔特許請求の範囲〕の解釈とは異なる場合。
 - (13) 請求項の総項数を増やす（但し、もし、**2.3.1**の(9)の情況に属し、引用又は従属する一部の請求項を削減し、かつ残りの記載部分を分けて記述する場合、例外的に請求項の総項数の増加を許可する）。
 - (14) 新たな請求項を追加する。
 - (15) 特許を受ける前に既に削除されていた請求項を回復する。
 - (16) 従属項の従属関係を変更した又は引用記載形式の独立項の引用関係を変更した結果、該請求項のもともとの技術特徴の結合関係又は方法発明の工程順序を変更することになった。
 - (17) 〔特許請求の範囲〕の技術特徴を、構造、材料又は動作から、それが生み出す機能に係る手段機能用語又は工程機能用語で表されるものに訂正する。
かかる訂正を行った結果、その後、〔特許請求の範囲〕を解釈する際に、〔発明の説明〕の記載の均等範囲が広くなり、〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大することになる。
 - (18) 〔特許請求の範囲〕の技術特徴を、手段機能用語又は工程機能用語で表されるものから、構成、材料又は動作に訂正する。
後者は原〔特許請求の範囲〕に明確に記載されているものに属さないため、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更することになる。
 - (19) 〔特許請求の範囲〕を訂正しないものの、〔発明の説明〕又は図面を訂正した結果、たとえ出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えていなくても、〔特許請求の範囲〕の解釈がもともとの許可公告された〔特許請求の範囲〕の意味と異なる場合。
 - (20) 化学組成物発明に関する請求項が、もともとはクローズ式接続詞で記載されていたとき、開放式接続詞で記載されるものに訂正する。
 - (21) 誤記事項の訂正が、〔特許請求の範囲〕の実質的な拡大又は変更になる場合。

例：原公告の〔特許請求の範囲〕における“Aは枝分れを有する炭化水素基である”との記載につき、特許権者がそれは“Aは枝分れを有してもよい炭化水素基である”の誤記であると主張する場合、原明細書又は図面の内容に明らかな誤り又は異常かつ理不尽な状況はなくとも、訂正後、それに含まれる意味がもともとのものより広がるので、原〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大することになる。したがって、訂正は許可されない。しかし、仮に特許権者が原明細書に記載されている「枝分れ」が「枝公れ」の誤記であると主張する場合には、原明細書又は図面の内容をチェックすれば、そのもともとの意味が「枝分れ」であり且つ「枝分れ」が唯一の解釈で、「枝公れ」は明らかに誤りで且つ無意味であることが分かり、かかる訂正は〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更するものではないため、訂正は許可される。また、例えば、原公告の〔特許請求の範囲〕にはある種の光ファイバー材料が「-0.3%の屈折率」を有すると記載されているのに、〔発明の説明〕には「-0.3%以上の屈折率」と記載されており、特許権者が原公告の〔特許請求の範囲〕のデータは誤記であると主張する場合、原明細書又は図面の内容につき、〔特許請求の範囲〕に記載されている「-0.3%の屈折率」にいかなる明らかな誤り又は異常かつ理不尽な状況があるのか分からなくとも、訂正後、それに含まれる意味がもともとのものよりも広がるので、〔特許請求の範囲〕は実質的に拡大されており、したがって、訂正を許可することはできない。

2.5 訂正の効果

明細書、図面は訂正が認められ並びに特許公報に公告された後、出願日に遡って発効する。

2.6 審査の注意事項

- (1) 特許主務官庁は公告後の特許案件の訂正につき、通常、従来技術の検索を行わない。したがって、特許権者が原明細書又は図面の訂正を申請する理由が不明である場合、例えば、明細書、図面の訂正書を提出するのみで、理由及び根拠となる法律を説明せず、主務官庁から通知を受けても依然としてかかる事項について答弁しなかった場合、訂正は受理されない。
- (2) 本章 1.4.3 の規範により、中国語版の内容は外国語版の範囲を超えてはならず、且つ、特許公告後、特許権の範囲は中国語版明細書に記載されている〔特許請求の範囲〕を基準とするため、特許権者が外国語の明細書や図面しか訂正せずに、中国語の訂正書を同時に提出しなかった場合、中国語版の内容が外国語版と一致しないことになるので、訂正は受理されない。但し、もし明らかな誤記の事項である場合には、特許主務官庁は外国語版の訂正申請について、ファイルに保管し、必要であればチェックすると返答することができる。

- (3) 二段式 (two-parts form) の請求項について、特許権者が、段に分けない記載形式に書き変える、若しくは前言の一部技術特徴を特徴部分に記載する、若しくはもともと段に分かれていない記載形式を二段式 (two-parts form) に書き変えるよう訂正申請することは、いずれも〔特許請求の範囲〕の縮減、誤記事項の訂正又は不明瞭な記載の説明に属さず、訂正は許可されない。
- (4) 二段式 (two-parts form) の請求項について、特許権者は、不明瞭な記載の説明を理由に、特徴部分の一部技術特徴を前言部分に記載することができる。
- (5) 特許権者が提出する訂正内容に、受け入れることができる部分と、受け入れることができない部分がある場合、例えば、特許主務官庁の通知内容に完全に従って訂正しているわけではなく、依然として原明細書、図面の記載事項を超えている、若しくは訂正後の内容にまたしても新たな事項を書き加えている場合、訂正は許可されず、特許主務官庁は理由を説明して特許権者に指定された期間内に改めて訂正を提出するよう通知しなければならない。期限を過ぎても訂正しない場合、該現有の資料により直接審査を行う。
- (6) 特許権者が一回分の訂正申請手数料しか納めずに、何回も明細書又は図面の訂正を提出する場合、最後に提出された訂正書を以って審査を行い、該訂正書が出願時の原明細書又は図面に開示されている範囲を超えているか否か及び原許可公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更しているか否かを判断しなければならない。しかし、特許権者が何回も提出した訂正ページが異なるページに対してである場合、依然として逐次審査しなければならない。
- (7) 特許権者が提出する明細書、図面の訂正書 (ページ) は、明細書の訂正部分に下線を引かなければならず、図面の訂正部分には下線を引く必要はないが、訂正する図面について訂正申請書に詳細に記載しなければならない。また、訂正後の下線のない明細書又は図面の差し替えページを添付しなければならず、訂正した結果、原明細書又は図面のページ数が連続しなくなった場合、訂正後の明細書又は図面を丸ごと1部提出しなければならない (「専利法施行規則」第45条)

2.7 案例

例 1. 構造及び効果の追加—発明の説明及び図面の訂正

訂正前の明細書及び図面

〔発明の名称〕

熱溶接方法

〔特許請求の範囲〕

熱可塑性樹脂基板板上に円錐孔の突起面を設け、前記突起部分に止着板を嵌め込み、並びに円錐孔の突起部分に加熱フレームを圧入し、押圧接合する熱溶接方法。

〔発明の説明〕

……本発明は上記技術内容を有し、熱可塑性樹脂基板板の円錐孔突起部分が軟

化し止着板を圧接固定するので、熱可塑性樹脂基板上の止着板を堅固に固定することができる。

〔図面〕

(加熱フレームの突起部分は環状部分を開示していない)

訂正後の明細書及び図面

〔発明の名称〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

(同)

〔発明の説明〕

……本発明は上記技術内容を有し、熱可塑性樹脂基板の円錐孔突起部分が軟化し止着板を圧接固定するので、熱可塑性樹脂基板上の止着板を堅固に固定することができる。このほか、加熱フレームの突起部分の周囲に環状部分を設け、加熱フレームを押圧することで突起を均一の形状に変形することのできる効果がある。

〔図面〕

(加熱フレームの凸部分につき環状部分を開示している)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕の縮減に属さない事項で、且つ原明細書又は図面に開示されている範囲を超えている。

〔説明〕

〔発明の説明〕の訂正事項は、加熱フレームの突起部分の周囲に環状部分を新たに設けるものであり、〔特許請求の範囲〕については変更されていない。但し、〔発明の説明〕に追加された技術内容は原明細書又は図面に開示されていないため、原明細書又は図面外の事項を明細書又は図面内の事項に訂正するものであり、並びに該事項は〔該発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者が直接且つあたり前に知ることができるものでもない。したがって、該訂正は、訂正後に新事項を加えており、且つ〔特許請求の範囲〕の実質的な変更と解釈される。

例 2. 技術特徴の追加—特許請求の範囲の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

化合物 C の製造方法

〔特許請求の範囲〕

化合物 A と B を化学反応させて化合物 C にする方法を含む、化合物 C の製造

方法。

〔発明説明〕

……該反応の好ましい温度は 80°C 以上で、……。

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

80°C 以上の温度で化合物AとBを化学反応させて化合物Cにする方法を含む、化合物Cの製造方法。

〔発明の説明〕

(同)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕を実質的に変更する。

〔説明〕

訂正前の〔特許請求の範囲〕には“化合物 A と B を化学反応させて化合物 C にする”としか記載されておらず、「80°C 以上の温度」は含まれていない。即ち、該事項を限定せずに発明を特定しており、該問題解決の方法は確定事項ではない。たとえ訂正後に「80°C 以上の温度」の記載を追加したとしても、請求項を 1 つの下位概念に限定させることができると認めることはできない。このほか、該訂正は〔発明の説明〕中の事項を〔特許請求の範囲〕に追加記載することで、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

例 3. 技術特徴の追加—特許請求の範囲の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

自転車のハンドル

〔特許請求の範囲〕

…… (ハンドルの内容を具体的に記載) を含む、自転車のハンドル。

〔発明の説明〕

…… (自転車のハンドルの内容を具体的に記載しているほか、自転車のハンドルのその他の部品、例えばベルなどについても具体的に記載している) ……。

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

…… (ハンドルの内容を具体的に記載) を含み、並びにベル (その内容を具体的に記載) と互いに接続する、自転車のハンドル。

〔発明の説明〕

(同)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

〔説明〕

〔特許請求の範囲〕を訂正する事項は、原〔発明の説明〕中に記載されている自転車のハンドルと関連するベルを〔特許請求の範囲〕に追加記載したものであり、形式上、原明細書又は図面に開示されている範囲を超えていないものの、もともとの自転車のハンドルにベルを加えた後、原有の部品の結合関係及び許可公告されたハンドル（ベルを有していない）の発明の機能を変えることになり、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

例 4. 上位概念を下位概念に変更—特許請求の範囲の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

光信号の双方向伝送方法

〔特許請求の範囲〕

発射ソース中に設けられた光伝送装置から信号を發し、かつ受光装置によって信号を受ける双方向伝送方法において、前記受光装置は光導波経路が形成する伝送セクションに設けられ、光伝送装置と集合構成されており、それには
(a) 伝送装置及び受光装置が結合してなる集合部品、
(b) 一方向に伝送される信号が伝送過程において光導波経路を経由してもう一方の伝送方向に導かれる……、
ことが含まれる双方向伝送方法。

〔発明の説明〕

……本発明の優れた点は、その構造が発光ダイオード（LED）によって構成された光伝送装置がフォトダイオード（photodiode）によって構成された受光装置の穴の中に設けられている点である。発光ダイオードは、GaAs 発光ダイオード又は Barus タイプの GaAlAs 発光ダイオードを使用することができる。前記フォトダイオードは……を使用することができる。

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

発射ソース中に設けられた光伝送装置から信号を發し、かつ受光装置によって信号を受ける双方向伝送方法において、前記受光装置は光導波経路が形成する伝送セクションに設けられ、光伝送装置と集合構成されており、それには
(a) 伝送装置として発光ダイオードを使用し、及び受光装置としてフォトダイオードを使用し、両者を 1 集合部品に結合させる、

(b)一方向に伝送される信号が伝送過程において光導波経路を経由してもう一方の伝送方向に導かれる……、
ことが含まれる双方向伝送方法。

〔発明の説明〕

(同)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕の縮減に属し、且つ〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更していない。

〔説明〕

訂正後の〔特許請求の範囲〕では“伝送装置”及び“受光装置”をそれぞれ〔発明の説明〕に記載されている“発光ダイオード”及び“フォトダイオード”の特定事項で限定している。つまり、特定した発明事項の一部の上位概念技術特徴を、〔発明の説明〕に明記され且つ実施例で支持されている下位概念技術特徴に置き換えており、並びに訂正前後の産業上の利用分野及び〔発明が解決しようとする課題〕が同じである。

例 5. 上位概念を下位概念に変更—発明の名称及び特許請求の範囲の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

フラットパネルディスプレイ

〔特許請求の範囲〕

制御端子を有するフラットパネルディスプレイ、……。

〔発明の説明〕

……本発明の制御端子は、プラズマディスプレイ、TFT-LCD、低温ポリシリコンディスプレイ又はカーボンナノチューブを用いたディスプレイに運用されるものであり、優れた効果を生むことができる。

(制御端子をプラズマディスプレイ、TFT-LCD、低温ポリシリコンディスプレイ又はカーボンナノチューブを用いたディスプレイに運用する実施例が記載されている)

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

プラズマディスプレイ

〔特許請求の範囲〕

制御端子を有するプラズマディスプレイ、……

〔発明の説明〕

(同)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕の縮減に属し、且つ〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又

は変更していない。

〔説明〕

訂正後の〔特許請求の範囲〕ではもともとの“フラットパネルディスプレイ”を“プラズマディスプレイ”に置き換えており、その訂正前後の産業上の利用分野は同じであり、〔発明が解決しようとする課題〕も変更されていない。

このほか、原〔発明の説明〕に既に記載されている上位概念技術特徴の“フラットパネルディスプレイ”には下位概念技術特徴の“プラズマディスプレイ”、“TFT-LCD”、“低温ポリシリコンディスプレイ”又は“カーボンナノチューブを用いたディスプレイ”などの意味が含まれている。“プラズマディスプレイ”は原〔発明の説明〕で支持される事項であるので、本事例は〔特許請求の範囲〕の上位概念技術特徴を〔発明の説明〕に記載される下位概念技術特徴に置き換えており、発明を特定する事項の縮減に属するものと認めることができる。このほか、該訂正は原明細書又は図面に開示された範囲を超えておらず、且つ、訂正後、原許可公告された〔特許請求の範囲〕を実質的に拡大又は変更していない。

本事例は、〔特許請求の範囲〕の訂正が許可されたため、〔発明の名称〕をこれに合わせて訂正する。

例 6. 解決しようとする課題を変更—特許請求の範囲及び発明の説明の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

船艇

〔特許請求の範囲〕

表面の一部に太陽電池が配設され、並びに透光性のある材質で構成される蓋板で前記電池を覆う、船舶。

〔発明の説明〕

……蓋板は、太陽電池が風雨によってその機能……を失うことのないよう保護するために用いられる。

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

表面の一部に太陽電池が敷設され、並びに透光性のある材質で構成される板で前記電池が覆われ、それ以外の表面部分は遮光性のある材質で構成される蓋板で覆われる、船舶。

〔発明の説明〕

……蓋板は、太陽電池が風雨によってその機能……を失うことのないよう保護するために且つ船艇が紫外線の影響を受けないよう保護するために用いられ

る。

〔結論〕

原明細書又は図面に開示されている範囲を超えており、且つ〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

〔説明〕

訂正後の〔特許請求の範囲〕はもともと設置された蓋板を“透光性のある材質”から“透光性のある材質”と“遮光性のある材質”に変更しており、変更した事項は原明細書又は図面に明記されていた事項ではなく、また該〔発明の属する技術分野〕の通常の知識を有する者が原明細書又は図面に記載されている事項から直接且つあたり前に知ることができるものではない。

このほか、訂正前の〔発明が解決しようとする課題〕は“蓋板は、太陽電池が風雨によってその機能を失うことのないよう保護するために用いられる”であったが、訂正後の〔発明の説明〕には〔発明が解決しようとする課題〕として“且つ船艇が紫外線の影響を受けないように保護するために”が追加されている。しかしながら、後者の解決しようとする課題は、訂正前の解決しようとする課題の下位概念ではなく、同類の問題を解決するものでもない以上、訂正前後のそれぞれに記載されている〔発明が解決しようとする課題〕の間には密接な関連性がないため、該訂正は〔発明が解決しようとする課題〕を変更していると認められる。

例 7. 産業上の利用性の変更—発明の名称及び特許請求の範囲の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

界面活性剤

〔特許請求の範囲〕

物質 A を含む界面活性剤。

〔発明の説明〕

……該界面活性剤は清潔剤、乳化剤、分散剤及びその他その界面活性作用を利用することのできる一般情況に用いられ、……このほか、該界面活性作用は殺虫剤にはさらに幅広く適用される。

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

殺虫剤に用いる界面活性剤

〔特許請求の範囲〕

物質Aを含む、殺虫剤に用いる界面活性剤。

〔発明の説明〕

(同)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

〔説明〕

訂正後の〔特許請求の範囲〕はもともとの“界面活性剤”を“殺虫剤に用いる界面活性剤”と特定しているが、殺虫剤に用いる界面活性剤は界面活性剤の代表的な用途ではなく、界面活性剤の特殊な用途にすぎない。本特許について、“殺虫剤”は原明細書に指定されている用途ではなく、且つ“界面活性剤”と“殺虫剤”の産業上の利用分野は密接な技術関連性を有しておらず、訂正前後の〔発明の産業上の利用分野〕は異なっている。このほか、該訂正は〔発明の説明〕中の事項を〔特許請求の範囲〕中に追加記載するものであるため、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

例 8. 請求主題の変更—〔発明の名称〕及び〔特許請求の範囲〕の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

検査用クリップの絶縁カバー

〔特許請求の範囲〕

狭い後部を有し、…中心部で枢着する 2 枚のクリップ片を覆うことのできる、検査用クリップの絶縁カバー。

訂正後の明細書及び図面

〔発明の名称〕

検査用鰐口クリップの絶縁カバー

〔特許請求の範囲〕

狭い後部を有し、…中心部で枢着する 2 枚のクリップ片を覆うことのでき、鰐口クリップを構成する、検査用鰐口クリップの絶縁カバー。

〔結論〕

原明細書又は図面に開示されている範囲を超えており、且つ〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

〔説明〕

訂正後の〔発明の名称〕及び〔特許請求の範囲〕では、もともとの検査用クリップの絶縁カバーが鰐口クリップに変更されているが、原明細書又は図面には該検査用クリップが鰐口型であることは開示されておらず、したがって、訂正後の事項は原明細書及び図面に開示されている範囲を超えており、且つ両者はそれぞれ異なる特許出願発明に属し、〔特許請求の範囲〕の出願主題の変更に属するもので、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

例 9. 出願主題の変更—〔特許請求の範囲〕の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

温度制御機能付きヒーター

〔特許請求の範囲〕

加熱装置、温度設定装置、時間設定装置……（内容を具体的に記載）を備える

温度制御機能付きヒーター

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

（同）

〔特許請求の範囲〕

加熱装置、温度設定装置、過熱保護装置……（内容を具体的に記載）を備える

温度制御機能付きヒーター

〔発明の説明〕

（同）

〔結論〕

特許請求の範囲の縮減に属さず、且つ特許請求の範囲を実質的に変更している。

〔説明〕

訂正後の〔特許請求の範囲〕は、原有の技術特徴“時間設定装置”を削除し、原〔発明の説明〕に開示されている“過熱保護装置”をその代わりに記載しており、原明細書又は図面に開示されている範囲を超えてはいないものの、訂正後の〔特許請求の範囲〕に記載されている“加熱装置、温度設定装置、加熱保護装置”から構成される温度制御機能付きヒーター発明と、原許可公告された〔特許請求の範囲〕に記載されている“加熱装置、温度設定装置、時間設定装置”から構成される温度制御機能付きヒーター発明は、異なる出願主題に属し、〔特許請求の範囲〕を実質的に変更している。

例 10. 技術特徴の変更—二段式（two-parts-form）〔特許請求の範囲〕の訂正

訂正前の明細書

〔発明の名称〕

○○装置

〔特許請求の範囲〕

A、B、Cを含み、

前記Aは……（Aの内容と連結関係を具体的に記載）、

前記Bは……（Bの内容と連結関係を具体的に記載）である○○装置において、

前記Cは……（Cの内容と連結関係を具体的に記載）であることを特徴とする○

○装置。

〔発明の説明〕

……（A、B、Cの内容と連結関係を具体的に記載）、…。

訂正後の明細書

〔発明の名称〕

(同)

〔特許請求の範囲〕

A、B、Cを含み、

前記Aは……(Aの内容と連結関係を具体的に記載)である〇〇装置において、

前記Bは……(Bの内容と連結関係を具体的に記載)、

前記Cは……(Cの内容と連結関係を具体的に記載)であることを特徴とする〇〇装置。

〔発明の説明〕

(同)

〔結論〕

〔特許請求の範囲〕の縮減、誤記事項の訂正又は不明瞭な記載の説明に属さない。

〔説明〕

訂正後の〔特許請求の範囲〕は、もともとの前言部分 (preamble part) に記載されている〔従来技術と共有の必要技術特徴〕Bを特徴部分に変更して記載したものであり、原明細書又は図面に記載されている範囲を超えていないものの、その訂正は特許法第64条第1項に規定されている訂正事項に属さない。

産業財産権における模倣対策のご案内

財団法人交流協会では特許庁からの委託により、海外進出日系企業を対象とした産業財産権の侵害対策事業を実施しております。具体的には、現地にて以下の活動をしております。

1. 台湾における産業財産権の模倣対策に資する情報の収集
2. 弁護士、弁理士など産業財産権の専門家を講師としたセミナーの開催
現地で活躍する専門家から最新の情報を得る機会です。
3. 産業財産権に関する相談窓口の設置
産業財産権の権利取得手続きから、産業財産権の侵害に関する相談まで、幅広いご質問にお答えいたしますので、是非ご利用ください。

※相談窓口の利用、セミナーへの出席、その他ご不明な点については、
財団法人交流協会 貿易経済部までお問い合わせください。

TEL：03-5573-2600

FAX：03-5573-2601

H P：http://www.koryu.or.jp/

[特許庁委託] 台湾模倣対策マニュアル

平成19年3月 発行

発行者

松倉浩司

発行所

財団法人交流協会

【禁無断転載】

東京都港区六本木3-16-33

青葉六本木ビル7階

印刷所

株式会社宝円堂

執筆協力：理律法律事務所 (LEE AND LI Attorneys-At-Law)

台北市敦化北路201号7階
